

川柳塔

昭和四十二年一月九日 郵便物認可
 平成三十二年八月一日発行 (毎月一日発行)
 創刊大正十三年 通卷九九九号



白川協加盟

No. 999

八月号

第16回 川柳塔まつり

川柳雑誌・川柳塔通巻1,000号記念川柳大会

と き 平成22年10月9日(土)

と ころ ホテル・アウィーナ大阪

(近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車・TEL 06-6772-1441)

《 同 人 総 会 》

午前10時～11時 3階 生駒の間

議 事 平成21年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成22年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《 各賞表彰式・記念句会 》

午前11時開場・午後1時開会 4階 金剛の間

祝 辞

(社)全日本川柳協会 会 長 大 野 風 柳 氏
番 傘 川 柳 本 社 主 幹 磯 野 いさむ 氏

表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬抄・一路賞・各地柳壇賞

おはなし 「路郎と薫風 ― 牽引車の火と継承者の灯」

兼 題	「 虫 」	『上方芸能』発行人	木津川	計 氏
	「 深 い 」	川 柳 展 望 社	天 根 夢 草	選
	「 渡 る 」	時 の 川 柳 社	平 山 繁 夫	選
	「 車 輪 」	ふあうすと川柳社	赤 井 花 城	選
	「 スピーチ 」	番 傘 川 柳 本 社	森 中 恵美子	選
	「 価 値 」	川 柳 噴 煙 吟 社	田 口 麦 彦	選
事前投句	「 千 」(9月1日必着)	柳 都 川 柳 社	大 野 風 柳	選
		川 柳 塔 社	河 内 天 笑	選

◎各題2句・欠席投句拝辞

出句締切 正 午(午後5時終了予定) ※各題の「天」位に賞呈

◎会 費 4,000円(当日いただきます) ご昼食は各自でお済ませ下さい

◎記念品呈 『麻生路郎読本』『河内天笑川柳句集』

《 懇 親 宴 》

午後5時半～7時半 3階 葛城の間

☆会 費 7,000円(会席料理) 先着申込 140名様

☆宿 泊 ホテル・アウィーナ大阪 8,000円(朝食付き)

*事前投句および懇親宴・宿泊のお申込はチラシに刷りこみのハガキ(御希望の方は事務所)にて9月1日(水)までに本社事務所宛、お送り下さい。

*懇親宴・宿泊のご送金(句会費除く)は同封の振込用紙でお願い致します。

主催 川 柳 塔 社

大阪市天王寺大道1丁目14番17号201
〒543-0052 ☎・FAX 06-6779-3490

第一回川柳塔まつり(2)

嬉しい川柳塔まつり、毎年愉しくやるとしよう。

実は路郎先生の川柳雑誌時代は、川柳塔まつり、あるいは川雑まつりと銘打ち、毎年七月(路郎先生誕生月)の句会で賑やかに行なわれ、川柳雑誌の終刊まで続いていた。

その頃は川柳浴衣で集まったり、随分愉しかった思い出がある。特に西出一栄さんの浴衣は傑作で、お尻のところに一句、

玉串へ敷かれますとは言わなんだ

そして前の帯の下あたりに一句、

混浴へタオル一本頼りにし

と染めこんであつて皆の目を引いたものだった。

また炭坑節の替え歌で唄い踊る「川雑おどり」も思ひ出深い。作は須崎豆秋さん。

(一、二番省略)

一句出た出た 一句出た ヨイヨイ

ぎよつとするよな句が出来た

あんまり選者が辛いので

天かと思つたら没だった

サノヨイヨイ

記念句会の各題と選者、そして天の句は次の通り。

〔兼題〕

▽「姿」……………小出 智子 選

踏み台が亡母の姿のまま残る 寿恵子

▽「明るい」……………牛尾 緑良 選

堪忍袋 仰山もつて明るいよ 妻子

▽「昇る」……………林 荒介 選

陽が昇り人は等身大になる 楓 楽

▽「会う」……………仁部 四郎 選

嘘すこし盛って愉しく会っている 朱 夏

▽「結ぶ」……………恒松 町紅 選

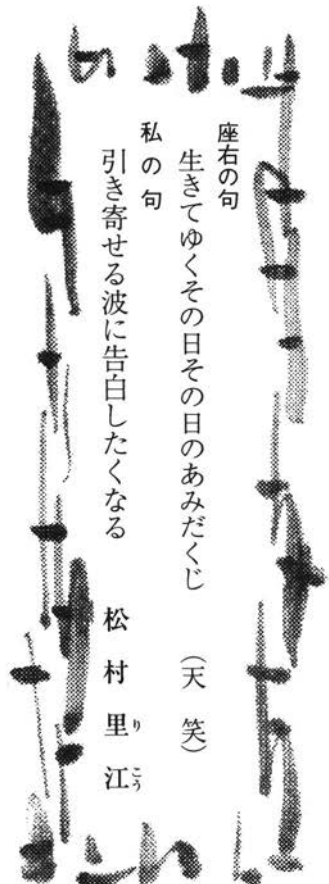
結んだらほどけぬ縄を父は縛う 雄々

▽「祭り」……………橘高 薫風 選

教室が祭りの顔になっている 狸 村

この「第一回川柳塔まつり」が成功したことを心から感謝している。

(平成7年 西田柳宏子)



座右の句

生きてゆくその日その日のあみだくじ

(天笑)

私の句

引き寄せる波に告白したくなる

松村里江

川柳塔 八月号 目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「菅島灯台」

■巻頭言 第一回川柳塔まつり(2)

川柳雑誌の砦を訪ねて

川端 一步

(1)

川柳塔(同人吟)

河内天笑選

(4)

川柳塔の川柳讃歌 (68)

木津川 計

(47)

自選集

温故知新

(48)

水煙抄

川上大輪選

(51)

檸檬抄「痛い」

三宅保州・高田美代子共選

(72)

麻生路郎句抄

新家完司選

(75)

愛染帖

誹風柳多留一篇研究 60

(80)

一路集

「貢ぐ」

(82)

「割引」

堀 正和選

(82)

川柳雑誌の砦を訪ねて

川端 一步

川柳雑誌・川柳塔誌通巻千号記念川柳大会に発刊される『麻生路郎読本』編集委員の一人に加えていただき、私の分担は、路郎師の住まいと川柳雑誌社の現住所の表記を調べることでした。

初めこの仕事なら該当する区役所に行つて調べたら分かることだし、もし分からなければ図書館に行けばよいと簡単に考えていました。さて具体的に調査を始めますと大変な障害にぶつかりました。当時、特に明治、大正、昭和初期の台帳が思い通りに見つかりません。理由は二つ、一つは、明治二十二年四月に大阪市政が施行されて以後、行政区再編成が何度も行われ、調査の町名が二行政区に分割されていたり、理由は不明ですが住民台帳が紛失していることです。二つ目は、第二次世界大戦で大阪の街や建物が戦災に遭い、その折に貴重な台帳や古地図が消焼したのではないかと思われます。

しかし区役所に来た限り、「ああそうですか」と引き返す訳にもいかず、関係十区役所

一路集「テンポ」	山口高明選	(83)
初歩教室「必ず」	鈴木公弘	(84)
秀句鑑賞「同人吟」	佐藤古拙	(86)
水煙抄	居谷真理子	(88)
■エッセー 龍馬と私	鈴木いさお	(89)
■エッセー 全日本川柳鳥取大会を終えて	高浜 勇	(89)
第34回全国川柳2010年鳥取大会に参加して	江島谷勝弘	(90)
穴吹尚士さん さようなら	村上玄也	(91)
七月本社句会		(92)
各地柳壇(佳句地十選/井上勝規)		(96)
全日本川柳2010年鳥取大会		(111)
八月各地句会案内		(114)
柳界展望		(116)
各賞選考規定		(118)
■編集後記(ひとこと/田中みね)	朱夏・光久・能子	(120)

座右の句

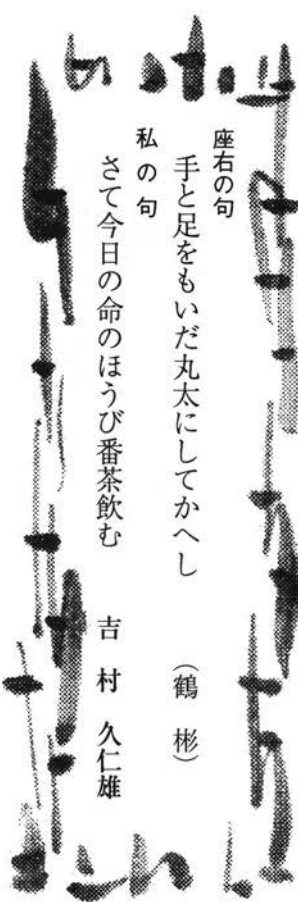
手と足をもいだ丸太にしてかへし

(鶴 彬)

私の句

さて今日の命のほうび番茶飲む

吉村 久仁雄



を再三尋ね、大阪法務局、大阪法務局北出張所、大阪造幣局、住まい情報センター、市立中央図書館等で古い住所地図を探しました。西ノ宮市役所、堺市役所も調査に行きお世話になりました。

嬉しかったのは、対応したほとんどの役所の職員は親切であったこと、分からなければ先輩に聞きに行ったり、「時間を下さい後日連絡します」等々丁寧な対応に出会ったことです。調査の途中、古い町名の由来を調べたり、路郎師はこの辺りを散策したのではないかと散歩する余録もありました。

そんなある日ふと思いました「私は何をしようとしているのか」と。仕事は現住所の表記を調べることであるけれど、そもそも『麻生路郎読本』を発刊する目的は、多くの人に、路郎の句を読んでもらう、優れた柳論や語録にふれてもらう、そして人間路郎を知ってもらう。ことなのに私自身どれだけ、路郎師の句や柳論を読み学んだと言えるのか忸怩たる思いをしました。

『麻生路郎読本』を一日も早く手にして、川柳作品やエッセイ柳論にふれて、今後の川柳人生の糧にしたい。いま川柳界が抱えている諸問題へのアドバイスを書きたいと毎日わくわくその日を待っています。



河内天笑選

吹田市(故)穴 吹尚士

大それた事はようせんDNA
金離れきれいな方と煽てられ
心身の元氣なうちに撮る遺影
土地だけの値打ちになったマイホーム
一日を無為に過して陽が沈む
古希なのにどう生きようかまだ迷う

吹田市 山本 希久子

なんとぜいたく二十四時間がフリー
花柄を着ると晴ればれする私
続く者あつてこの道掃いている
無駄な抵抗加齢とは戦わぬ

生き下手のてのひら結んでも開いても
ひとことがハートをノックしたようだ

弘前市 高瀬 霜石

政治家に正義 ないものねだりです

世も末のニュース毎日聞き飽きる

読まれたくないからだろう小さい文字

同級生歩けるうちに会いましょう
どっちが怖い大阪弁広島弁
古き良き時代よへビースモーカー

和歌山市 木本 朱夏

不意打ちをしてばあちゃんを喜ばせ
6Bを持つと着想湧いてくる
チョコパフェの前で決意が揺れている
うしろから目隠しされてから恋に
肩の荷を降ろし肩から風邪を引く
神さまのふるいで仕分けられている

尼崎市 山田 耕治

宝くじよ一度びつくりさせてくれ
帰ったら玄関に鍵つけたまま

消しゴムを探すに書類掻き分ける

近道を聞いて判らぬようになり

あと一球負けてる方は気忙しい

地下道の風吹き上げるモンロー忌

京都市 高 島 啓 子

出かけねば退化していく風切り羽

切り干しを煮る良妻の顔をして

大西瓜すばと切つて忘れよう

切りぬけていくほかはない向かい風

水切りをして乾かしておく証拠

ビフテキをしばらく切つてないナイフ

大阪市 井 丸 昌 紀

かなわんなあ言いつつ無理を聞いてくれ

皆が皆私の負けに賭けている

福耳でやっぱりに金に困つて

心地よい言葉に耳を閉じておく

もう一本飲めばからっぽ冷蔵庫

ジャガイモを茹でると騒ぐマヨネーズ

吹田市 須 磨 活 恵

余計なものを捨てると心軽くなる

楽しかった電車ごっこや鬼ごっこ

赤ちゃんをも一度だっこしてみたい

美しい百合に薊に鬼がつく

草臥れて石に座つて無にかえる

論すよう無理をするなど石の声

松山市 高 橋 宏 臣

見るものはみな面白い井の蛙

やりなおし精一杯のラッパ吹く

信号の黄になる前になる元氣

お子様ランチの旗が替わると月曜日

プロポーズの言葉に少し嘘がある

少しずつ蓋を開いて月満ちる

堺市 志 田 千 代

蛭住む川に戻して村おこし

人間がいないと生きられぬカラス

隅っこの私のそばに来てくれる

顔バック笑い皺までのばしてる

食べ方が気になりだした差し向かい

衣替え猫は首輪を替えただけ

大阪市 谷 口 義

目葉のさし方を初めて習う

ちよつとやそつとのがたびたびにおこる

百歳と五十日でしたと喪主の声

性格のゆがみをりハビリで治す

素麺に追いかけられて夏を越す

半世紀をおばあさんとして生きる

檀原市 安 土 理 恵

身勝手におもいちがいをしました

ここで泣いたらどんなに楽になれるだろ

鍋磨く時代おくれのやり方で

この人とはん時だけ向き合える

男のプライド全部剥いだりしませんわ

お好きなように泳ぎなさいと手を離す

三田市 北野哲男

雨上り野菜の機嫌お伺い
リズムです食後の昼寝一時間
不意に来て長居をしないのが息子
鉢巻きにも引き娘太鼓打つ
騙せたら拍手貰えるのが手品
クッキーを番茶に浸すおばあちゃん

八王子市 播本充子

胸元の辺りにヤル気光らせる
おめでとう素直に言える齢になり
こだわりの色に枝豆茹であげる
込み入った話はしない横座り
お隣の窓を気にする設計図
見境もなくドクダミの根が伸びる

鳥取市 岸本章

支持率は下がるものです総理殿
見返りを期待するから愚痴になる
黒塗りの外車と少し距離を置く
これも愛薄い味付けにも馴れる
過疎過密格差が格差また広げ
同じ趣味だから喧嘩の根が深い

鳥取市 近藤佳子

火の酒を贈ってみたいひと見つけ
豆ごはんいただく母をだぶらせて
天命へ数珠にすがって生きるのみ

うとうとを繰り返しつつやつと朝

敗戦はもう遠い日の物語り

車椅子若葉のシャワー浴びている

堺市 村上玄也

マスコミに誘導されている世論

素人の考えですと往なされる

気楽だと負け惜しみ言ひまだ独り

割り込んで罪悪感のないおばちゃん

身代わりでくさい飯食わされる秘書

怒鳴りあうだけの芸無い漫才師

河内長野市 山岡富美子

カタカナ語と折り合いつかぬ脳の乱

梅雨晴れ間鏡の古さだけ目立つ

コンビニが解放区です塾通い

ふいになりほっとしている宝くじ

みな文句いうがさりとて策はない

ボディーブロー計報は不意にやってくる

和歌山市 武本碧

ソプラノで返事していた若かった

思い出は心の中で呼吸する

初恋の色を移したさくら貝

何時だって君の港になりました

親の背なよりもケータイ見てる子ら

大海を泳ぎ身に付く社会性

松江市 津川紫晃

保水力まだある耳朵で聞く意見
老いてまだ恋の火種は残ってる

朝シャンに流す昨日のわだかまり

冗談で言った話が走り出す

妻の味はめて笑顔の箸二膳

血の通う言葉こころの窓を打つ

大阪市 山本加お里

絵手紙の余白に一句したためる

横車無視するゆとり身につける

ためらわず今しかないと出す勇氣

お辞儀した花に慌てて水をやり

負けそうなチームに応援してしまふ

人生のまさかの坂で愛たぎる

阪南市 山本柳昌

病氣して嫁の優しさ響きます

真底の温い言葉に涙ぐむ

手のひらで掬うとうまい水になる

皆おいで保険満期だ旅しよう

フーッと息いやな予感をふりほどく

スケジュール吐息が洩れてくる手帳

高知市 小川てるみ

つき過ぎず離れすぎずにいる絆

今もって狂わぬ母のしつけ糸

精いっぱい生きた証の太い指

しゃかりきの私を笑う昼の月

これまでと思うと割れるシャボン玉

馬鹿になり切れず心を折りたたむ

大阪市 小糸昭子

子牛から手塩にかけた嘆き節

へえまいど ぼちぼちでんごころはん

領海はむつかしきものの火種抱く

幸せ度傘寿過ぎても悟れない

自分から愚か者とは言わないで

何気なく聞いた話が重くなる

大阪市 小谷集一

命より先に貯金が目減りする

生きている限り仮面は外せない

好敵手いるから張りのある暮らし

長生きのサプリメントは好奇心

利用価値互いにあつて仲が良い

晩酌で今日の予定がみな終る

大阪市 板東倫子

海開き児等ペンギンのように跳ね

殺されるわけも知らない牛哀れ

教師の面かぶる破廉恥な男

同一紙面に児童手当と虐待死

宇宙人の総理在任八ヶ月

弾む若さ目をむくような衣替え

大阪市 神夏磯 典子

光らない私励ますネックレス
前ぶれを信じわくわく待っている
冷戦の始まり巣箱間違えた
請求書見て現実に戻らされ
人間のエゴむき出しの姿焼き
遺産分け他人フーフー吹きに来る

愛知県 早川 遡行

和菓子屋はあんこが勝負三代目
まんじゅうを包むぐらいはまだできる
月と酌み花と酌して五十年
医者という休肝日とは妥協せず
いい竿を持つて魚拓を自慢する
母さんの無言に勝てる訳がない

大阪市 古今堂 蕉子

好きにせいと言うまで粘り私流
次の世は才女で美人物静か
心境の変化かやたら優しすぎ
知らなかりや知らないままにしときます
十五歳なりの気遣いしてくれる
手をつなぐ変に湿った手の男

堺市 荻野 像山

気まぐれな空にも凜と咲く桜
母の日はまず一杯と妻へ猪口
父の日もチンして酌んでいる夫

一先ずと止めたお酒も一夜だけ
心にもないことと言える面の皮
踊るためならいとわなないハリヤイト

和歌山市 福本 英子

フライング怖くていつも出遅れる
マニフェスト裏切ることと思ひ知る
切りようで損したような蓮根の穴
あら煮きが大好きなのに骨粗鬆
副作用覚悟で薬飲んでる

久し振り顔も名前も覚えてた

出雲市 伊藤 玲子

そよそよと吹くから油断してしまふ
幸せに馴れると波も懐しい
柱にはなれぬ優しい杖でいる
飛べるまで摩つてあげる夜明け前
叶うまで走り続けている走る
また明日耳の裏から夕焼ける

加西市 金川 宣子

手話二人愛を語っている気配
五七五言葉のチョイス面白い
DMも来なくちゃポスト寂しそう
ガラス玉質より量の首飾り
好きな事してればパワー溢れ出す
実る愛探しアラフォー駆け巡る

鳥取市 倉益 一 瑤

波かぶるたびに感性磨かれる
恋さめて嘘がいつぱい落ちていた
まだ恋が出来るわたしが大好きだ
いらいらを鎮める人の笑い声
休んではおれぬ人生マラソンだ
休んだら椅子を横取りされました

可児市 板山 まみ子

垣根ごしラッキョの皮をむく臭い
デカすぎる地声に扉そつと閉め
裏切りは高くつきます基地移転
梅雨を待つ休耕田の花菖蒲
毎日を誉めて食せよ食べる人
包丁を置いてメモする痩せるコツ

東京都 岸野 あやめ

新内閣難問題の津波です
鮎と鞭子ども手当と消費税
政界にいる小姑大舅
由緒ある家の土台に蟻居着く
子の母となつて女優の夢を捨て
無駄だけどつい口に出るひとりごと

唐津市 山口 高明

尼將軍宝篋印塔雨の中
泡ひとつ吐いて金魚が媚びて見せ
鉄槌をくださな庶民虚仮にされ

店頭のカニは輪ゴムの手錠はめ
角砂糖ひとつくらしいの親密度
おやすみと月に呟く片想い

神戸市 山田 婦美子

健康な時は感謝の気もつかず
時々神の試練も受けている
衰えた味覚を舌のせいにする
当り前と思えどままにならぬ運
山みどり凝視訓練真つ最中
芝桜遠くに亡母の立つ気配

鳥取市 有沢 せつ子

散歩にはほど良い場所にあるポスト
世界地図キッチンに貼り目で学ぶ
いい趣味と言われ怠けていられない
美しい心で花の手入れする
似たような愚痴が楽しい同期生
わがままな子は優しさも身につかぬ

静岡県 蘭田 模 杏

恋終り猫のんびりと夕涼み
おしゃれ着にボケツトが無い不自由さ
まかないの味噌汁夏に味薄く
家族みんなで背もたれになつてくれ
夕焼けのあしたへ生きる鍬の影
厚化粧ハエは止まれず蚊も刺せず

さいたま市 星 野 育 子

五線譜を越えて園児の弾む声
出来ないが見てて楽しい農作業
行き掛り醉えない人と飲んでいる
適量でお子様ランチ食べている
タレントの食べ歩き見る阿呆らしさ

東京都 清 原 悦 子

炎天を急ぐ少女の夏帽子
古地図の染みが教えてくれた道
土の香に包まれました旅帰り
予想図を遥かに超えた花の数
新線が何よりという庭野菜

横浜市 小 野 句 多 留

アイバット初物食いの雑魚が群れ
たらばが過ぎる運氣の下降線
二十三回忌故人をしのぶ風もない
良くもまあ生きてるもんだ忘れ癖
後ろ髪ひかれるテレビ依存症

横浜市 菊 地 政 勝

クオーツを置き去りにする腹時計
花図鑑目標にして土いじり
達成感残し軍手が洗われる
わきまえた石が落着く寺の庭
父親に付けたくはない迷子札

川崎市 三 浦 き ぬ

青春の友あらかたは旅立ちて
好きならばあばたもえくぼ平和です
言い訳は眉に唾つけ聞きましよう
好い日です小鉢のトマト色づいて
棺に入れる物をそろそろ決めて置く

富山市 島 ひかる

人間の窮地を救う知恵袋
ジんクスを破る長寿の笑い皺
祝盃の一口誘い水になり
遅れたり早まったりの時時計
ブライドがあつて一分の虫も生き

犬山市 吉 田 幸 子

ひよっこりと発芽去年を語り出す
どさ回り慰問で元気色に染め
神頼みよりも保険の保証額
チャイミング歩幅も軽く母達者
ランチ後のスーパの籠輕いまま

犬山市 関 本 かつ子

欲しい物忘れて閉める冷蔵庫
石けりも知らずに帰るランドセル
二桁の暗算ならばまだ出来る
自民党すっかり野党らしくなり
プランター旬の野菜も二人分

大山市 金子 美千代

五六年さば読んで出す顔写真
一人より二人みんなの知恵を借り

凶と出たおみくじちょっとうらたえる
入るのは易し一抜け難しい
消費期限切れても鼻で仕分けする

京都市 坪井 孝一

でっかい海悩み事など恥かしい
ジョギングとサブリメントを友にする

真実を貫く花に本気見た

クロスワードパズルの先にある奇跡
ミス多い人生ロマン残しとく

京都市 三宅 満子

ジャンプ力うぬぼれはまる水溜り

新顔の雑草庭にのさばって

温度差を埋めて快適三世代
不況下に開店する店閉める店

草食系経済力も危うそう

京都市 榊 本宏子

ピッカピカで家事が嫌いな長い爪

木綿糸お役ごめんの糸切歯

切れ味のいい男にはない情け

疑いは否定しておく平和主義

富士山に会えて旅行のいい予感

京都市 西村 益子

あの人の素顔私は知っている
夫とのてにをはいつもずれまくり

よく緩む婆の涙腺持て余す
独り言母と出出しが同じに
鬼門方位氣にした姑を笑えない

亀岡市 井上 森生

知床へ北の自然に憧れて
汗が出るこの快感を夏の山

ルンルのツボを見つけたまた一つ

不老長寿指体操が面白い
耳鳴りもやっと手加減出来そう

長岡京市 山田 葉子

ベテランのバッグに詰まっているレシポ

老人力アップ加齢をおそれない

神通力取り戻したい逆上がり
子育ての自信揺るがす孫世代

解放感溢れる旅の青い空

大阪市 川端 一步

千号の大きな節にいる至福

八月忌レイテ戦記を読むつもり

だんだんと敵も味方も減ってくる

欲言えば手足元気で傘寿まで

三世代揃うと花が咲くわが家

大阪市 福岡末吉

燃える意氣菌痒さ募る老いの坂

批判うけ自己研鑽の的とする

まめまめし夫は黒衣の填り役

逆らう趣味の一つと妻の弁

在りし日の父の決断今に活き

大阪市 大川桃花

繕った数だけ自負のある翼

悪口を聞くと内耳がキンと鳴る

雑草が幅きかして老いの庭

自立心誰にも頼れない暮し

行列を避けて近場の山歩き

大阪市 森田明子

言つてから嘘だと気付くことがある

宇宙から見ればまあいみんなの巢

原色の力をくれる夏野菜

四コマのオチが解けない今日の鬱

カタログのように子供を染めないで

大阪市 澤田定子

さつと来てすぐ去る議員お焼香

新聞僚美女が加わりはなやげる

マンデラさん耐えて希望の国づくり

贅沢に縁ない暮し続くだろ

ただいまの一声不安さつと消え

大阪市 江島谷勝弘

早寝主義私の夜明け三時頃

もう五年遊んでいます定年後

山の神僕より多い午前様

罪悪感ちよびり持つて遊んでる

残高を気にしながらも遊んでる

大阪市 近藤正

年寄りをいじめその上消費税

火傷しても懲りず手を出すあぶく銭

管内閣小鳩に罪をなすりつけ

悪い奴目先はちゃんと読んでいる

廃屋にたと紫陽花咲き誇る

大阪市 鶴田遠野

男のロマンいつもポケットに持ち歩く

二人三脚歩幅が違う倦怠期

バイキング食より欲を皿に盛り

老母の味そのま姉に引き継がれ

まだ老妻に捧げていますマイハート

大阪市 岩崎公誠

泥つきの野菜を並べ無人店

スカイツリー天へ天へと伸び上り

味のあることばに触れてメモを取る

招き猫あの保険屋の一味だな

弔辞などいらぬ現金積んでくれ

大阪市 川原章久

菖蒲湯で遊んだ孫に嫁が来る

この不況コップ酒には冷奴

八十八親戚中で最長老

孫からのメールが来ない日曜日

ブランコは前と後があるばかり

大阪市 中村れんげ

ごまの木で毛虫ゆうゆう世間見る

モネの絵の傘買ってから雨楽し

極楽行きの片道切符ポケットに

トリックがばれて師匠はほおかむり

永田町バトンタッチの早いこと

大阪市 寺井弘子

生き甲斐の趣味遊びとは言わせない

平安京かき立てられる旅心

住む家の有って居場所のない夫

マスコミに曝されている愛子さん

ファインダー香りも入れて花撮す

大阪市 萩原大朔

逢うよりも別れが多い昨日今日

届かない思いが恋を熱くする

うつとりと見とれていても腹は空き

遣伝子が季語のない花造り出す

3サイズびったり当てて嫌われる

大阪市 平嶋美智子

良い日です嬉しい顔にたんと会い

ばちゃばちゃと小川渡れば生家跡

山菜が豊かな味を連れて来た

山菜の生まれた場所が目にかぶ

黄金の輝き失せるあの棚田

大阪市 吉内タカ子

雨蛙よく泣く今日は梅雨の入り

あじさいの薄紫一本庭に咲く

阪神戦夫婦して見る回復期

焦らずにデイサービスに夫送る

母さんに蛭みせたいメールくる

大阪市 田浦 實

母さんがわが家の天気晴れにする

誇らし気に紫陽花が咲く三室戸寺

八方を睨む竜画に睨み敗け

なぜなぜと問う子やっぱ遅しい

良い匂いする鶴橋で途中下車

大阪市 松尾柳右子

発表会済んで疲れがどつと出る

気づかれか目の充血へ何くそと

温泉につかる至福の定年後

路地裏に雀二羽来て語り合う

イケメンに寸時を惚れて若返る

大阪市 岩崎玲子

命日はひとり万歳墓の前
姉居たらきつとラーメン食べ歩き
お転婆の姉が金魚で私ファン
引率の姉がいなくて迷い道
会う日までみやげ話をためている

大阪市 津村志華子

ゆるやかな川の流れに似た命
鈍行の旅駅の名がおもしろい
高齢の背なへ廃品回収車
食欲があつて無欲になり切れず
万物のすべてに今日をありがとう

大阪市 榎本日の出

下ごころあるから続くご親切
脛かじる方がでっかい顔をする
ライバルが居つてまだまだ続けられ
飾る場所無いので捨てた縫いぐるみ
税金をかじるねずみが裁かれる

大阪市 奥村五月

頼らない夫頼りにされている
寝たふりも旨いの声に飛び起きる
ランドセル国の借金つめてある
気がつけばたがい釣書嘘ばかり
普天間の道まちがえて落ちた鳩

大阪市 津守なぎさ

低学年実地体験する田植え
パソコンで打った漢字が読み辛い
ルノワール心の浄化させてくれ
御招待露天風呂付きグリーン車
同伴者忘れルノワールに夢中

大阪市 原田すみ子

妻母を忘れて遊ぶ解放区
歳なりの遊びを見付け錆びぬ日々
生活に遊びを入れてガスを抜く
かたちたるものは流れて無に帰る
痛いところ急に衝かれて貝になる

大阪市 榎本舞夢

わくわくと娘と晴れ着選んでる
ドシャ降りに晴れ着泣いてる七五三
披露宴に招かれ晴れ着買いに行く
晴れ着着て友目立つてる披露宴
にわか雨晴れ着脱ぎ捨て服で行く

大阪市 伏見雅明

帰省して何はともあれ墓参り
人肌の爛でいのちの水を飲む
フルムーン辞書を片手に持った旅
バイキングここはひたすら食べるのみ
期限切れこわごわ試食させられる

大阪市 吉村 一風

池田市 栗田 久子

心から他人をほめて酒うまし
侮った分だけ格を下げたらし
幸せを咲かす種だと信じ蒔く
宇宙への夢は老いても抱いている
生き甲斐と楽しみもらう友の酒

大阪市 升成 好

耳かきの先うっとり顔がある
便利さに不意をくらわす電池切れ
もうひとつ保険をふやす胃の痛み
なるほどと思える場所にお城跡
掴まれた弱みその後もつきまとい

大阪市 坂 裕之

好き勝手言わせてくれる仲間たち
悲しみを肴に酒の進むこと
まだ欲があるから今日も怒ってる
よく笑う淋しがりやの友が居る
言うからは批判覚悟で手を上げる

大阪市 小泉 ひさ乃

中古でもいい欲しいのはほんまもん
へそくりを見つけてそっと元の位置
頂天で浮かれて独り芝居する
人の世で作ら笑い上手くなる
品格にこだわり笑い忘れさせ

八月は仏も玉音を聞いた
行水の風情わたしは知っている
朝顔の蓄悩みはなさそうだ
お茶漬けにつきあい食がやや進む
和ませることばがずっと出てこない

和泉市 横山 捷也

モーツァルト流れコーヒー呑むゆとり
食べ切れぬほどの野菜を作る趣味
良い人と言われ肩の荷重くなる
肩書きは無いがまじめに生きて今
冗談に針一本を刺しておく

和泉市 西岡 洛醉

生き返る原点食を腹八分
お早ようの声を掛け合い老い二人
街角の人情ひとつ笑みもらう
まだ動く十指に夢を載せ元氣
何もかも妻の元氣に生き伸びる

泉佐野市 山本 蛙城

虫だつて魂を持つ毒も持つ
電話かと思えばFAXめの無言
ベースメーカーのおかげ目につく皆美人
ころころと心ころがし生きている
基地思う関空島に近く住む

茨木市 藤井正雄

抜け道を教わるために誘う酒
旅の雨救いは地酒美味い店
碁に負けて帰る途中の小糠雨
一番が欲しい寝袋持つて出る
裏話添えて話題を飾り立て

大阪狭山市 矢野 梓

捗らぬ片付け置いて新茶汲む
衣更え古着着もせず捨てもせず
一日のリズムが狂う朝の雨
目覚めたら昨夜の喧嘩忘れてた
我が齢を改めて知る誕生日

交野市 森本弘風

日記帳昨日の事がもう書けぬ
検査値が酒は許すと言うてくれ
家計簿の仕分け酒代とり上げる
沖縄へ押し戻されて辞職する
階下だけバリヤフリーにした我が家

河内長野市 坂上淳司

上戸下戸南十字を気儘旅（柳友靖博氏と豪州を二人旅）
犬猫も英語がわかる国を旅
特上のワインに酔い痴れてる下戸
手真似してもらった下熱用座薬
カジノにはトイレをお借りしに入る

河内長野市 村上直樹

菜園のわが子すすくすく無農薬
太平洋眺め竜馬に浸りきる
無言劇酒控えろと脂肪肝
螢雪のころを偲んで芋の粥
ひゅーどろん忍者のようにポックリ死

河内長野市 黒岩靖博

ばりばりと仕事した日のうまい酒
気がかわりまた書き直す遺言書
子宝を授けてくれた福の神
錆ついた垢を落しに妻と旅
嘘ついて辻褄あわず嘘重ね

河内長野市 井上喜醉

八十路越え死ぬまで続く薬漬け
地獄見た昭和の傷へ詫び足らず
邪心捨て無念無想で書く写経
無駄遣い宝を探す主婦の午後
同居して親の年金娘が守り

河内長野市 植村喜代

晴れた日はこんなに気持ちよい五月
頼れなくなつてしっかりさせられる
里にまだ母いるような錯覚し
同窓会当日休む人が増え
人生も明日が見えぬとしが来た

岸和田市 森 元 ふみよ

独り居るときめく人がいてくれる
先輩のひとことやる気有難い
八十路来て十年日記つけている
生きていたテラスの虫に話し掛け
老い二人信頼介護愛があり

岸和田市 岩 佐 ダン吉

水準を問うなら僕は汗の量
資格とった頃には介護されている
基地のない日本は無理なんだろうか
温暖化今日もヒト科が裁かれる
冤罪を裁くのもまた人だろう

岸和田市 原 さよ子

友達に恵まれ退屈せぬ余生
何しても迫力のない自分知る
今更にどうにもならぬ癖ひとつ
立ち話で聞く教え子のいい話
生きてゆく耐えねばならぬ声をのむ

岸和田市 井 伊 東 吉

ひと雨を待つ紫陽花がうなだれる
この夏もゴーヤの日除け作るとす
健康の講座に老いが列をなす
今年もかバの実力がセを制す
主義主張違う連立どだい無理

岸和田市 雪 本 珠子

人生の節目節目で脱皮する
人生訓遊びの中で教えられ
存在感アピールしてる池の鯉
女には菩薩と修羅の顔がある
道端でそっと咲いてる花が好き

岸和田市 堤 植 代

頑張ると言った次の日辞めちゃった
紫外線さけた帽子のお大さま
たのしいな百均めぐる好奇心
痩せた友理由は聞けず息をのむ
照りつける日ざしに負けて頬かむり

岸和田市 土 橋 房 枝

趣味が合い愚痴も言い合う友になり
世話になる気持がやつと分かり出し
老いた母に歩幅合わせてくれる娘よ
愛すより愛される方好きな女
ドクターの一語一語にゆらされる

堺 市 奥 時 雄

はいはいと妻にも軽くあしらわれ
見とれてる視線彼女は知っている
癌保険おりて無理矢理遊びだす
かぶりつき夢中になってスリに遭う
同期会昔と今が縛れだす

堺市西村りつえ

走り続け無為な時間癒される
月光にセピアなロマン生きかえり
小心はブレーキ前に進めない
未練かなずっこけながら拭く涙
拝むよりおしゃべり続く紫陽花寺

堺市大久保のん子

雑音にまどわされずに生きてゆく
聞き役に回ると透けてくる本音
雑草に生きてゆく知恵もらつてる
心まで覗かれそうな澄んだ目よ
海はるかひとりで旅に出たくなる

堺市加島由一

サブライズ次男が連れてきた彼女
自転車にようあれだけのアルミ缶
父に似てきたらしお酒注意され
父さんの競馬儲けたことばかり
母さんの見合写真を子に見せる

堺市山本半錢

不意に来た姑はご機嫌ほつとする
有り合せて済ませるはずへお客さま
古都巡る鐘の音など心待ち
一回り千支が同じと紛れ込む
通り雨傘の滴はドレミファソ

堺市源田八千代

凄腕と坊ちゃま去つて風通る
大方は美男に御座す新閣僚
けもの以下の育児能力問われてる
私を妻にしたのが不覚です
すてても色柄にしてファッショナブル

堺市柿花和夫

和と洋の妥協の味さオムライス
おしゃべりの妻を黙らす顔バック
早すぎたようにも思うフルムーン
家中に電子の音が絶えません
賭けだったとあとで言われた大手術

堺市矢倉五月

おしゃれより日よけ優先夏帽子
冗談の中に遺言めく話
神様に本気で頭下げる日々
三歳の描く爺婆は手を繋ぐ
時々ほあるごはん共稼ぎ

堺市宮本かりん

とうさんのハミング洩れてくるいい湯
辻棲は合わせたつもりぼろが出る
しみじみとナツメロ聞いて浮かぶ顔
無駄金も無駄な時間も使ってきた
知らぬ間に二人で溝を掘っていた

堺市 齋藤 さくら

軒下の燕の夫婦仲が良い
医療費が親の年金食い散らす
母さんの足を摩って寝てしまい
自分より若い人の死辛くなる
国民が不在の選挙期待せず

堺市 大隅 克博

丁寧な文で督促状がくる
人はみなおかげの中で溺れてる
一人でも見つめられると背が伸びる
ちよつとだけ多目に飲める妻の留守
毎試合天王山と書く見出し

四條畷市 吉岡 修

ご自由にどうぞ私に壁はない
あるときは天女でもあり夜叉であり
マンネリのくらし日記もただ二行
最年長乾杯という役がある
びくびくと時効の延びる話聞く

吹田市 太田 昭

間違った方が何故だか頭が高い
童貞の頃の抱負も干涸びる
乾パンが戦後の飢餓を語り出す
踏ん切りがつかず遅速のままで老い
三枚目の顔で病の友見舞う

吹田市 大谷 篤子

付加つけて足の訓練坂下る
萎えそうな心時々喝を入れ
胸の隅逢いたい人がひとり居る
痛いほど分るがどうもしてやれぬ
あるがまま生きていくこと趣味にして

吹田市 野下 之男

ほんほんに思い知らせたきつい風
飼う牛も我が子と思うこの辛さ
さり気無く妻を詠んだ句隠してる
愛してるこそばゆいので言うわん
初恋を忘れさせない原爆忌

吹田市 木下 敏子

喜寿からのチャレンジ墨を磨り直す
力石になって一生縁の下
睡蓮が開いたけれどあなた何処
よう笑うにんげんらしい声出して
困つたらすぐ仏壇に手を合せ

吹田市 瀬戸 まさよ

気を遣わないロボットがいい介護
辛いときうれしいときも雲を見る
自分史は日本の歴史個の歴史
蟻さんにごめんなさいと殺虫剤
政界の大スターです小沢さん

高石市 浅野 房子

ご好意のつもりが仇となる辛さ
貧しくも心豊かにとは行かぬ
他力本願もう無理ですよおばあさん
杖ついて執念で行くバラ園へ
ほめられて寒いのが立つ自信なさ

高槻市 乙倉 武史

日本の誇りはやぶさ無事帰還
梅雨入りを聞いて紫陽花活気づく
枇杷たわわ故郷偲ぶ田植ごろ
生き下手な男が描く絵空事
せめてもの慰め病氣と縁がない

高槻市 安田 忠子

うまい話疑ってみることにする
儲け話するはずが無い他人さま
免許返し住基カードに変えました
点滴に通える内はまだ元気
ヤワラちゃん参院選で格落ちる

高槻市 井上 照子

妻の看護米寿の兄も辛からう
愛犬の死無口の日々が続いている
ロボットの掃除機今日は楽しよう
日に何度同居の感謝娘は多忙
老人会ボケナイ音頭の歌うたう

高槻市 指宿 千枝子

お隣の肉じゃが風にとつて来る
朝ドラに出る卓袱台が懐かしい
卓袱台の頃は御飯に御御御付
テーブルの今は紅茶とパンの日々
久久に幼馴染みと中之島

高槻市 佐甲 昭二

同病の友から知恵を吹き込まれ
親展の手紙そわそわする缺
結び目に母の記憶のある包み
大暴れしたいコップの中の水
きな臭い昭和の記憶つきまとう

高槻市 執行 稲子

数なんて御褒美みたいと歳の数
にんまりと思わぬ示談夜が明ける
捨てたはずの恋うらめしくまた拾う
裏返し上紋羽織の派手なこと
故郷の風の便りに聞く不安

高槻市 峯村 勲弘

石油にも寿命があつて風車
ウィルスに試されている人の知恵
沈黙は金でも癌はサイレント
潰された面子も所詮この世だけ
基地要らぬざわざわときび畑

高槻市 生田 義一

力あるリーダー出でよ永田町
敗戦を知らぬお方の甘い知恵
国技までコワイオッチャン幅きかせ
古賀メロディ聞きつ夢路の老いの幸
趣味はなし晩節淋し老いの坂

高槻市 杉本 義昭

トキメキを十七文字へ踊らせる
今生きる遠くの嘘は気にしない
ダム出来て桃の流れる川がない
角砂糖溶けぬ小さなわだかまり
今日生きる始まり告げる蟬の声

高槻市 左右田 泰雄

やわらかい視線を背なで受けとめる
舵取りは妻にまかせる夫婦舟
貼りついたガムが重たい靴の底
茶目っ気のある意地悪で憎めない
飲み屋から想定外のつけが来る

高槻市 富田 美義

化粧損じの女房と湯豆腐をつつく
損得を忘れてからの夫婦仲
胃が痛み肩凝る訳は分かっている
言い逃れ出来て口元泡だらけ
損をした記憶日増しに強くなる

豊中市 水野 黒兔

タイガース勝ちマナイタのいいリズム
猫も夫も同じ口調で叱る妻
表より裏に本音のある手紙
促すがなかなか聞いてくれぬ脳
ネギ刻む音も涼しい冷し麦

豊中市 藤井 則彦

タマエとホンネを混ぜて丸く生き
真夜中にあの世が見えた不整脈
ばれそうな嘘にじわりと滲む汗
猛犬の札も黄ばむと怖くない
トラ負けるたびにテーブル叩かれる

豊中市 江見 見清

手を握りたいけどその手握れない
握手した温もり残し来る計報
解釈で足跡さまたざまな伝記
下を向きそっと手を挙げ当てられる
円卓での話題あちこち飛び火する

豊中市 安藤 寿美子

思い切り遊んで来た子いい寝顔
集合写真中の老婆は私なり
臨終に間に合う距離に居て欲しい
ブティックで先ずし寸を着せてくれ
南天とどくだみは白さつき赤

豊中市 松尾 美智代

記念館八雲の暮し垣間見る
不便さを買って緑の中に住む
うぐいすの鳴き声聞いて目が覚める
好きな事してしんどいは言えません
微笑めばみんなキラキラして見える

富田林市 中崎 深雪

住んでみないと基地の苦しみわからんやろ
五月雨に無沙汰を詫びる手紙など
紫陽花のいよよ艶なる雨上がり
喧嘩する元気まだまだ共白髪
一番つらいこと知り合って無二の友

富田林市 稲川 恵勇

何の日か覚えてるかとか絡まれる
廃校と知らず記念樹生い茂る
うっとりとしたひと言がくされ縁
世界遺産めぐって歴史好きになる
山の辺の道万葉を匂わせる

富田林市 中井 アキ

きつかけが欲しくて紅を選っている
耳底に姉と遊んだ手毬唄
母さんの涙に弱い鬼やんま
モノクロの炎の真なぞつてる
シナリオになかった恋に揺れている

富田林市 片岡 智恵子

植木市満開の鉢値切られる
まだ生きるために遺言状を書く
砂かぶり或る日は力士までかぶり
貯金などするなと金利下げ続け
デパ地下は新発見のあるところ

富田林市 井上 じろう

目指すことなど何もなしケセラセラ
青二才死語になったが生きている
想い馳せ独り呟く城の月
伸び盛り三人娘母を超え
うちの庭ごんどん掘ってブラジルへ

寝屋川市 富山 ルイ子

傘寿とはこう言うものか物忘れ
傘寿でも母の年まで二十年
友はみな傘寿話に花が咲く
早朝から盛り沢山の予定立て
東京で兄の三十三回忌

寝屋川市 籠島 恵子

水田を走る電車の灯がゆれる
おうむ返し集中力を見抜かれる
お誘いをすればコントラバスでノー
しあわせの尺度夫が変えている
押問答しているうちに出る電車

寢屋川市 森 田 麗

歳重ね氣遣いに見る過去は過去

お喋りは犬の昼寝を妨げる

待たされる焦りを風がノックする

戸袋が愛の巢となりヒナの声

木の上の愛の巢を見る二人の目

寢屋川市 平 松 かすみ

空っぱの頭振ったり叩いたり

義母偲ぶ干し椎茸を使う度

宗教はインターホンでおことわり

誘われて粘土と遊ぶ小半日

手捻りの最後は植木鉢になり

寢屋川市 森 茜

うやむやな季節の尻尾つかめない

励ましはうれしい少しずれたって

献体を決める手前でまだ揺れる

二三日ベット預る氣の配り

初対面ピピット彼女もしまり屋だ

寢屋川市 太 田 とし子

議事堂で決めた総理だわしや知らん

政治家のドラマ見ながらマッサージ

勇気ない男の酒は飲みすぎる

童謡をせずに歌う歳かナー

もういいかい命そろそろかくれんぼ

羽曳野市 永 田 章 司

信号の無視を幼児に咎められ

刺のある言葉後から効いてくる

歴史書は勝者の立場恥部書かず

なつメロをうっとりと聞く老婆の顔

名園に琴の音流れ時忘れ

羽曳野市 酒 井 一 壺

浮き沈み耐えて人間出来あがる

浮き沈みわが人生へ重ね見る

麻醉さめしき命かみしめる

人間に生まれたことで苦勞する

美しい隣りと褒めるわが亭主

羽曳野市 吉 村 久仁雄

性善説きれいな嘘で場をおさめ

打ち水に昭和の風が吹いてくる

花言葉花は静かに笑うのみ

住みつけば闇にも闇にある安堵

天敵と会って寝たふり死んだふり

羽曳野市 三 好 専 平

クジラ肉食べてしのいだ焼跡派

家庭内別居がすすむ貧困化

タレントが出稼ぎをする永田町

分けるより捨てる力がのぞまれる

ハンシンファン北海道で旗を振り

羽曳野市 安芸田 泰子

律儀にも予報どおりの旅の雨
そんな目で見れば理性が崩れそう
冒険の好きな蛙が井戸を出る
真実は言わない夢が消えるから
ちぐはぐな返事へ老いを逆らわず

羽曳野市 徳山 みつこ

故里の情けがめぐるお裾分け
弱点を見せると怖いものはない
一枚の白紙にもある裏表
竜巻は大気ストレス吐いたのさ
透明がいいワ政治とゴミ袋

羽曳野市 吉川 寿美

人並の人生だろう湯が溢れ
火傷せぬ距離を保って老いの知恵
手の届く処に夫が居る安堵
涙腺のもろさ女は盾にして
似通うた身の上他人と思われず

羽曳野市 福田 悦子

明日の命信じて神に手を合わす
喜びは母へ感謝のありがとう
子の努力親の努力で子が育ち
まずバンザイハグと握手のホームラン
一人居の友はラジオを放さない

東大阪市 米田 水昇

ハウスの中いちご豊熟色さえて
友老いていちご農家を守りぬく
若草の山遠景に古都目覚む
朱雀門平城宮跡夢結ぶ
遊園地消えてまどろむしょうぶ池

東大阪市 佐々木 満作

風情ある流しそうめん掬う箸
涼感を誘う素麺夏最中
くだおれ夜の水都は眠らない
湿っぽい話は苦手笑いましょ
空地なく子供の声が聞こえない

東大阪市 北村 賢子

ともすれば相手傷つけてた言葉
茶柱へふいに舞い込む福の神
朝の顔今日もガッツで生き延びる
人間のこころ裏腹読み取れず
思い切り生きて未練は残さない

枚方市 安達 忠央

深みある人相の持つ頼り甲斐
熱き血の騒ぐ男の持つロマン
傷つけぬ言葉さがして世を渡り
陰口のたたかれ役がぬつと出る
タブーなど素知らぬ顔で踏み潰し

枚方市 二宮 紫鳳

スニーカー大活躍の血糖値
おニユーの傘回すおしゃべり女学生
朝顔のつるに生き方教えられ
梅雨晴れ間下校の子らのカン高し
日焼けした顔になじんだランドセル

枚方市 寺井 弘一

矢印を疑う人は天邪鬼
聖書を読むと善人の血が騒ぐ
石庭で対峙しびれがきれるまで
恋愛小説読むと恋愛したくなる
大阪のおばちゃんにある自尊心

枚方市 海老池 洋

薫風と明日の話するいのち
草イチゴ飢えてた頃の少年期
萎むことゴム風船に教えられ
老老介護リリーフ欲しくなってくる
さようなら言えずまたねという別れ

枚方市 丹後屋 肇

カリスマを渴望している民の鬱
定年の熟練工を買い上げる
紫陽花の誇らしげなる一周忌
水無月の無念流してくれよ 雨
問いかける妻の遺影は笑うのみ

枚方市 小林 わこ

民宿にずっと飾ってある魚拓
鮫鰐が吊り下げられてだらしないく
釣れたのは泳ぎ疲れた魚ばかり
鮭弁当飽きはしません日本人
目薬は魚の鮮度を見るために

枚方市 伊達 郁夫

派手な服着ている方が年配者
まだまだかもう良いのかな腹八分
落ち椿すこし残して庭を掃く
一度だけ流れに棹を差してみる
荷物より重い言葉を子に持たす

枚方市 二宮 山久

梅雨晴れ間チョーク落書き花盛り
立ち並ぶ家へぼつねんと青田
宅急便届きふる里味に酔う
青空がくつきり映ってる青田
エコ上手ETCで里帰り

藤井寺市 増井 ヨシ枝

縁側の窓いっぱいアジサイ花
蛭見にただそれだけの里帰り
野の花を活けて一人の侘住い
小糠雨帰したくない蛇の目傘
雨の日は猫の欠伸を貰い受け

藤井寺市 津 田 シルク

人の手を借りて受粉の花果実
五百羅漢の中でもイケメンを探す
女偏誰にも解けぬ地図を持つ
口止めをするまでもなく物忘れ
下着ドロにコケにされたと姑シヨック

藤井寺市 吉 田 喜代子

さあ今日も取った野菜が膳に乗る
水ナスの値下り待ってる糠床
布団干し掃除念入り梅雨近い
お月謝を払えば私休めない
票集めやめときなはれやわらちゃん

藤井寺市 若 松 雅 枝

鏡との対話が弾む夏帽子
初恋と逢えるか故郷のクラス会
後悔を一杯詰めた古靴
若者の好みこれかと納得し
儲けたと一本付けて足が出た

藤井寺市 伊 藤 アヤ子

ゆりの花盛りの時はすぐ過ぎる
若くなることはないから撮っておく
真夜中の電話にもしや息止める
前頭葉錆び出したのか浮かばない
遺言を書くとき安心して生きる

藤井寺市 鈴 木 いさお

辛抱強さでは妻に敵わない
八割は妻に預けている命
似合うてはるその一言で買っちゃった
問いません男の過去のあれやこれ
いざとなれば何とかアドリブで繋ぐ

藤井寺市 太 田 扶美代

ソックスを脱いでわたしの夏仕度
どの花もいっぱいファン持っている
子育ての名残り小さい力瘤
一滴も飲めない人と四季の歌
逢う機会なくてうすれた恋心

藤井寺市 鴨 谷 瑠美子

ハーブ茶の思いやりには負けました
ひとりになるとおいしいものがみつからぬ
さわやかだ虫の居どころ悪くない
芸術は深いところで笑わせる
小さい過去だけどこころの宝物

藤井寺市 高 田 美代子

幸せは夕陽の色にとける今日
ノーマスで生きたわけではない傘寿
とっておきの嘘をエンマに聞かせよう
浮気などしませんわたくしは本気
何をしようか時間だけ過ぎる

藤井寺市 俣野 登志子

立つ度に序での用をさせられる

ありがとうでも痒いのはそこじゃない
ジョギングの度にキーキを買うてくる

しなかった事の後悔しています

あれもこれもと元気な内は忙がしい

箕面市 出口 セツ子

忙しい方が考えなくて済む

ブランドの真赤な財布子がくれる

傷つけているのに優しい子に感謝

物よりも週一電話リクエスト

頼り無い方が元気と子を思い

箕面市 広島 巴子

万物の御縁に生きておかげさま

ちぐはぐの夫婦茶碗で続く縁

はじめと遅れて来ても梅雨は梅雨

友作る玉葱甘くお相伴

日本国チェンジチェンジで知れ渡る

八尾市 高杉 千歩

スーパのちらし並べて朝のパン

杖忘れ五百メートルポストまで

普段着と優先席で気がついた

ファミレスの椅子は若さで満ち溢れ

鈍だから八方美人で暮らせてる

八尾市 宮崎 シマ子

雨だれと淋しさかこち梅雨に入る

一人分の洗濯部屋に干して留守

折角ですが夫がいますお許しを

社の秘密なせ居酒屋で口にする

窓あけて今日の悲しみ今日流す

八尾市 内海 幸生

単細胞登った木から降りられぬ

コンビ二で自炊は止せと棚が言う

しゃべらんでいいから顔だけ出してんか

陽を知らぬ工場生まれの野菜です

本心でやる気でしたかマニフェスト

八尾市 村上 ミツ子

梅雨入りの前に済ませたどぶそうじ

大臣の椅子引き寄せた仕分け術

三界に家無くつても生きている

肉眼では見えぬ通帳の利息

その先は言わずにほかす思いやり

大阪府 桑田 ゆきの

痛いところ突かれ答弁行き詰り

糠床を混ぜたその手で化粧する

政策を置き去りにして鳩が翔つ

マニフェストトラストミーにくすぐられ

野口さん地球の空気おいしいと

大阪府 米澤 俣子

美しく老いるに難があり過ぎる

自転車止め方にさえ出る個性

まあまあリズムで過す空元氣

健康な夫見直す年金日

ホワイトリカー梅届くのを待ちかねる

大阪府 野田 栄呼

愛用は優しい銀のネックレス

進展のないリハビリに老いの風

医者通い国の財源食べている

解っても解らなくても読む新聞

ダイエツト明日からにする誕生日

大阪府 初山 隆盛

光琳のえがく梅林匂い立つ

潮騒に老いも高ぶるフルムーン

グリーン車で一世一代東上す

やさしさに触れると涙もろくなり

ねんねこの亡母の温みは忘れない

大阪府 澤田 和重

なに思う人かジョークが通じない

まだ生きる希望を胸に抱いている

辛い時楽しい日々を思い出す

おそうなよ持つてる杖が武器になる

疲れたら歩幅を変える老いひとり

神戸市 山口 美穂

Tシャツがとても似合っている若さ

ご先祖さま豆ご飯ですてんこ盛り

夏が来る前に赤札つけてある

窮屈な話はよそう雨だから

言い訳の電話を犬がきいている

神戸市 山口 光久

極楽も地獄も君と手をつなぎ

モミジの手肩をトントン夢うつつ

分水嶺地獄極楽仕分けする

爪に火をともした頃のパンの耳

台所ネールアートが邪魔になる

神戸市 両川 無限

ほめられて知った我が子の意外性

愛してるなんと素敵な嘘だろう

だんだんと子が削いでゆく僕の夢

切り取り線の上を歩いているスリル

やさしさは見てはくれない時間給

神戸市 伊勢田 毅

路線バスまた間引かれた時刻表

つぎつぎと汚職司直の手が足りぬ

ほどほどに血液型を信じてる

奢られて奢って共に終電車

視聴率競いテレビの質落す

神戸市 木村 貴代子

明石市 梶谷 和郎

桜だけ堪能させて梅雨に入る

だらしないみつともないは今や死語

流行を見ているだけで疲れる身

人並も普通もどこかずれて来た

花暦今年の天気迷い出す

神戸市 山崎 武彦

あちこちが痛んで余命をふと思う

責任者出てこいと啼く蟬しぐれ

美人薄命母は百まで生きられる

卓袱台の疵が昭和を生き抜いた

ジャングルの奥で帰らぬ兵の魂

神戸市 田中 章子

雨上がり螢が待っていてくれる

ウィーンフィルポルカ奏でる笑い顔

おばちゃんでCMデビュー出来るかも

太陽のめぐみ野菜もわたくしも

針千本飲ませたい人たんとある

相生市 中塚 礎石

顔写真つけた大根見くらべる

お隣の模範亭主と縁切れず

転がせば嘘が大きくなる達磨

古里に帰れば俺の童歌

子の夢へ父の甲羅が小さすぎ

成せぬまま過ぎてそのまま夢となる

主人無き看板いまも客を引く

褒め言葉自分のために取っておく

チャンスだと娶った妻の高野

欠伸する度に萎んでいくやる気

芦屋市 黒田 能子

右側に座った人が気にかかる

人生はスリルスリルのくり返し

満足の度合が違う人は人

揺らいでるたったあなたのひと言で

突然の名差しなんにもしやべれない

尼崎市 春城 年代

斜視でみるあの世この世の不確かしさ

ひとり笑いも馴れました笑劇場

歳なりに忘れることのありがたさ

世界地図ひろげうとうとする老女

近頃は断わることも馴れたもの

尼崎市 長浜 美籠

月日の経つ早さにしがみついている

いい時に来たと持てなす初摘み茶

下戸だって弁舌振うウーロン茶

コミカルなりズムに歩幅早くなる

気の効いた台詞が言えぬ鬼瓦

尼崎市 軸丸勝巳

一年の四季ひと月で見る縮図
旨いものマグロも牛も遠くなる
ビフテキも今のうちにと家族連れ
毎日の散歩で元氣確かめる
貸花壇荒れて主を待つ辛さ

尼崎市 加川靖鬼

鳥取砂丘素足で熱さ確かめる(鳥取大倉)
満月が駱駝の瘤をせり昇る
おいでませ暖簾の蟹が呼んでいる
手錠され蟹は鉄が動かせず
褒めるところ探しあぐねて天氣ほめ

尼崎市 林昭三

横綱は懸賞の束軽々と
大銭は持たぬ小銭は持っている
盗み酒五勺の冷酒美味かった
平成の志士は何処に皆世襲
畦道で薊誰かを待っている

尼崎市 藤岡りこ

点滴のリズムに眠氣誘われる
一滴の香辛料が味を決め
無理な相談わかつているが亡母にする
格調の高い書物は飾り物
紫外線浴びて向日葵なお元氣

伊丹市 山崎君子

胡蝶蘭最後のつぼみいい香り
パンジーがベゴニアとなる庭も初夏
腰痛に苦しむ友の多いこと
お互いに慰めあつて電話口
サザエさん久々に読む友みやげ

川西市 米原雪子

立ち止り無理せんとこに妥協する
失敗談意味深長に語られる
一言のよかつたねえに温まる
肘当てがファッションになり未だ着れる
チャンネルで気分転換選び出す

三田市 堀正和

朝ドラに合せて妻が起きてくる
いつだつてスツピンですと言う自信
牛丼が素うどんよりも安い謎
失言と言うからやはり本音だろ
親よりもネットに頼る知恵袋

三田市 久保田千代

越境の筈今朝の無礼打ち
USJ借り切り式を挙げる友
正夢になれと叫んで目が覚める
草むしり終えてクーラーありがたい
もうやめようあと一服と蛭族

三田市 石原 歳子

目正月させてくれますコマーシャル
心配をよそに明るい夫の声

故郷の天気予報を今日もみる
はらはらする場所で子どもが遊んでる
跡継ぎができて家中うれしがり

三田市 白井 二英

傘なんか失くしたくないケチで
あれやこれ値上げしないが量が減り
サバ読んで早い目に出て丁度よい
古希すぎて月日の流れ二倍速
人並でいいかと思っている寿命

三田市 上垣 キヨミ

一旦は覚悟の命授かった
カステラが見舞に届く絶食日
旅の振り入院カバン見抜かれる
黙祷に仏と決めた内緒ごと
お昼寝の議員血税吸血鬼

三田市 福西 好文

性善説信じ野菜の無人店
冷やかしと一目で見抜く骨董屋
女性から耳打ちされる心地良さ
好きだけど近寄らないで暑いから
子の貯金借りて子にするプレゼント

宝塚市 小倉 藍

誕生日生きる目線を少し上げ
終章は花道連れに見送られ
冷蔵庫にみどり野菜の絶えぬ幸
子の自立はらはらしてる苦労性
政党の仲間同士で我こそは

西宮市 西口 いわゑ

十指みな役を担当してくれる
美容院ゆつくり鏡との会話
六月の風に抱かれて散歩する
花しようぶ源氏に待る女たち
胸にぽつと明かりをくれた国なまり

西宮市 牧 渕 富喜子

夢なかばピリツと辛いかいわれ菜
たつぷりの雨に緑と生き返る
ソユーズの無事の帰還と辞任劇
採血のチクリに慣れて来た夫
悔しいが金が物言うのも事実

西宮市 山本 義子

明かり消し今日のわたしを切り捨てる
欲を切るちとやそつとで出来まへん
立ち直るきつかけ爪を丸う切る
野の花は野におくべしと風申す
寒気団は未練たらたら北へ発ち

西宮市 亀岡哲子

居るだけで役立つ怖い顔借りる
瞬発力があると錯覚して転ぶ
てっぺんに立つなど書いてある脚立
順番に歳とってゆく四姉妹
留守勝ちの家で石楠花美しい

西宮市 秋元てる

受付に何時もの笑顔ある安堵
助けてるつもりが守られてた不思議
心配は張り切り過ぎの老母のこと
何も彼も流れに任す花筏
生き方の差がもろに出る老いの坂

西宮市 緒方美津子

へそくりをためすぎました死ねません
テーブルの一等席に母の箸
国産では満たし切れないショーケース
薬局を素通りできるありがたさ
客降ろし安堵のバスは跳ねて消え

西宮市 足立茂

質素でも石鹸の香にある品位
雨の日は紙と鉛筆横に酒
ツケ溜まり呑み屋の前を駆け抜ける
格好をつけてもバレている背伸び
資質なぞ要らん票だけ獲ってくれ

西宮市 藤本直

本日は晴天なれど予定なし
酒の席今日はここまで甘えよう
一呼吸体に緑沁み込ませ
納豆の糸引くような長電話
山開きついヤッホーと叫んでる

西宮市 片山忠

神様に無理を言いたい幸福度
迫力は肉を食わぬと出せません
呪われたように身体にガタがくる
猫舌の男のキスは甘くない
生意気な奴ほど鍛え甲斐がある

西脇市 七反田順子

憧れの堺探訪どっどと見る
七まちもチンチン電車も夢乗せて
響き合う時代に込めた夢もある
利休さんに黄金の日日重ねお
ホトトギス泣いて笑って初夏の風

姫路市 古川奮水

喜寿祝車乗換え祈禱受け
豚足を齧れる喜寿の歯が自慢
風見鶏空の青さに昼寝する
早朝に美人の素顔見て仕舞う
四季の風知らぬ老人介護寮

奈良市 天正千梢

武装する事ももうなし杖たより
欲捨ててかかる相手にかなわな
杖ついで遠吠えしてる昨日今日
時として人は自然をなめすぎる
みか月に話しかけてる哲学者

奈良市 米田恭昌

まだ生きる欲に歯止めはかけられぬ
アイパッド早速買ったおばあちゃん
USJに食われた昭和の遊園地
遷都祭古都はいま人人の群れ(遷都祭 2句)
時超えてまほろばの風古都走る

奈良市 辻内 げんえい

湯あたりの嫁に息子の慌てよう
ハミングがでてるカミさん攻め時だ
混浴と期待したけど水着着け
金できて夜遊びできぬ歳となる
時ならぬ老いの出逢いに舞い上がる

奈良市 岩本浩二

爽やかな笑顔に勝る術は無い
いい汗をかいて露天の湯に溶ける
鳶の子は鳶です無理を言わないで
遊ばれて夢見せられて丸裸
遊び方知らぬ頑固の子沢山

奈良市 阿部紀子

円山の龍馬の像に手を合わす
難波津は歴史の流れ知っている
大極殿古代建築荘厳美
平城京広い遺跡を守り抜き
国のため理想に燃えた遣唐使

生駒市 飛永ふりこ

万緑にわたし自身が澄み渡り
なつかしい記憶の底の玉手箱
ばら寿司がふっと恋しい母の味
いややなあ頑固なところ父親似
今地下鉄住んでた頃はまだ市電

橿原市 居谷 真理子

どう見てもビリケンさんの狡い顔
残念なことに故障でなく老化
ふて寝から覚めればふわり掛けてある
僕という時は頑張らなくていい
たそがれて妻ある人の白い襟

香芝市 大内朝子

居酒屋に集う心の丸裸
カタログの中で妄想する御洒落
ストレスヘローズマリーの香を放つ
忍耐と根気が失せるどないしよう
にこにここと日野草のごと咲こう

大和郡山市 坊 農 柳 弘

和歌山市 松 原 寿 子

語り部が語る原爆地獄絵図

健やかにお過ごしですかカモメール

ミサイルの届かぬ里で盆おどり

腑に落ちぬ子供手当と軍事費と

洗ってもまた浮いてくる過去の染み

奈良県 渡 辺 富 子

ユニクロのTシャツ夏の色で着る

ケータイの窓でにつこり君に逢う

イチローのヒットへ今夜呑むとする

役人天国なんとかしたい夏の陣

はりまや橋サンゴのピアス買ってくれ

和歌山市 古 久 保 和 子

花過ぎて塔は緑に包まれる

シュミレーションだけで時間が来てしまい

日本酒の場面場面にある涙

個人情報たつぷり仕入れ立ち話

本番になってもつれた決め台詞

和歌山市 岩 本 美 智 子

病室に紫陽花生けて初夏にする

初夏の空招き入れたく戸を開ける

新緑の森むくむくとブロッコリー

実直に咲いて知らせる時計草

ペランダに傘の花咲く梅雨晴れ間

夕暮れて非常な雨が頬を打つ
効果どうあれひたすら祈る再手術
病棟でぬくいドラマのある会話
えくぼから微かな笑みがこぼれでる
切り出せぬ本音をそつと持ち帰り

和歌山市 喜 田 准 一

ありのまま生きて多少の角も立ち

適当に答えたツケが後で来る

五分五分の主張で探る妥協点

歌詞に惚れ十八番にした演歌

萎えた日はとに角旨い物を食う

和歌山市 玉 置 当 代

半世紀歩んだ道に悔いはない

杖になり支え合ってるああ夫婦

ここだけの話で止まる訳でない

未練捨てショートカットで闊歩する

頭の痛い話が続く金バッジ

和歌山市 松 尾 和 香

清冽な泉に浮かぶ嘘真実

譲られた席に感謝のありがとう

片足で立つのはよそう若くない

ないないでバランス保つ母の知恵

楽な方へ流れる体自然体

和歌山市 堀

富美子

気力なお夢のスコアを狙わせる

カスミ草でいればいいのに切れちゃった

警鐘かブチブチ骨の軋む音

えいっと言うファッション買った日の粗食

嘘つけぬあなたの目線泳いでる

和歌山市 坂部 紀久子

お帰りなさい地球の香り存分に

半年の宇宙リングが重いか

青空のおすそ分け受け布団干す

心という具が入ってるお味噌汁

嬉しさの笑顔の後の涙声

海門市 堂上 泰女

二人目が出来て省エネ育児法

間違え探し孫と脳トレしています

嫁さんに優しくされて気が弾む

晴れててもやっぱり夫する昼寝

雨が降りやデパートでするカード買い

田辺市 岡本 昇

ばあさんが背筋を伸ばす車椅子

聞く耳を持つているから増える友

出てこないまだ出てこない出ずじまい

叩かれて木魚の頭たこになり

ほんとうは離れたくない千切れ雲

鳥取市 田村 邦昭

平成に押され昭和も遠くなる

ついにくる一人ぼっちの寒い夜

トラブルの果てはやっぱりうまい酒

大輪のかけに可憐な花見つけ

肩書をとれば名刺はただの紙

鳥取市 岸本 孝子

余っても米の豊作祈りたい

三食を少し減らすとすぐおやつ

肥満体意志の弱さの付けに泣く

あ・うんがだんだん鈍くなってきた

午後三時夫婦であくび移し合い

鳥取市 夏目 一粹

にんげんの考え方が多すぎる

あさひるばんと三回は笑ってる

言い合いの後に小さな溝ができ

ノックする音にも心遣いする

ふるさと思えなくなる様変わり

鳥取市 土橋 睦子

泣き笑い赤鉛筆にかけた運

揺れ落ちる木の葉も自我を持っている

轉りも静かになった楠若葉

桜んばたわわに揺れる黒真珠

母の日に貰った服も派手になり

鳥取市 土橋 はるお

内緒ばなしが長くて内緒にはならぬ
蝶よ花よと長持ち唄が待ち遠し
好きだから君に責め寄るではないか
田植機がすいすい植えて行っちゃう
電化する最後の鉄の鍋洗う

鳥取市 西川 和子

親心見舞う息子をまだ案じ
お互いにルール大事にして平和
アナログの時計急ぐの遅れるの
もたつきだした足を時計が追い回す
古時計まだコツコツと時刻む

鳥取市 春木 圭一郎

気がつけば思いわずらうほどでない
箸休めのような男になれるかな
いい言葉聞ける気がして席に着く
その道で自分らしさを表現す
ほんとうはどうしたいのか書いてみる

鳥取市 奥谷 彩子

わかっていても甘いことばに酔っている
支持率求めタレント候補かつぎ出す
威勢いい喇叭吹く父いてくれる
いい余生彩どる暮らし多色刷り
詩のう若返えらす青春ラブソング

鳥取市 福西 茶子

立ち寄ってくださいいきょうも日曜日
マドンナはまだ旧姓のままでいる
アラ居たの そんなふたりのワンルーム
天才でないから努力五倍する
気付かずにピエロ真面目にやっている

鳥取市 中宇地 秀四

運の良い奴だと努力無視される
幸せの隣に地獄口を開け
広告を信じ切ってる人の良さ
ピーポーで夫婦喧嘩は小休止
年金は要らぬ生活保護がある

鳥取市 横田 春名

御近所の関所ちやらちやら通らんせ
ちようどいい納得までの歯がゆさよ
顔のシミ気になる八十路まだ女
フウフウと息のかけ合い老夫婦
沢蟹を追った小川は姿変え

鳥取市 永原 昌鼓

めつきりと老いの財布は軽くなる
逃げ道へ嘘がめつきり下手になり
たまに会う顔はめつきり老けている
信用もめつきり落ちた我が政府
老いの坂歩幅めつきり狭くなり

鳥取市 宮 協 道 子

窓明り人のくらしのある温み
鉢の花友達にして老いの日々
老いの不安花に注いで迷いなし
お茶石鱖泡でゆとりの夢みよう
煙草作りにささげた父は星となり

鳥取市 平 尾 菜 美

上ばかり見てると蟹を踏みますよ
明日知れぬ道ぼつねんと歩く蟹
お世話様蟹センサーにありがとう
夢ロマン蟹の舞台は深い海
父に似て寡黙な蟹の丸い背な

鳥取市 吉 田 孔 美 子

嘘混ぜた話を楽しそうに聞く
入念なブロー見せたい窓がある
花の深夜に心をととき放つ
月は月明日のために寝る時間
放浪の神にも頼られる駱駝

鳥取市 中 村 金 祥

百歳の賛歌ページを埋め尽くす
格差などない少年の笑い顔
脱皮する蟹に習った処世術
神様の前でそんなに甘えるな
厄年へ関所を抜ける策を練る

鳥取市 池 原 天 馬

猪のグルメじゃがいも選って食う
竹の子を今年猪食べきれず
麦を刈る田植え後とは今年知る
年金で二十年過ぐよく生きた
さきのいくさなんだった友多く死す

鳥取市 吉 田 弘 子

ご近所へ仮面と距離をほどほどに
旅に出るエプロン少し休ませて
目標があつてスムーズ家事雑事
またですか世襲総理の無責任
九十の婆さん農の司令塔

鳥取市 池 澤 大 鯨

林道を車で走り蛇を轢く
階段に蹴つまづいて腰を折る
わけあり品割引かけて売り捌く
大丸に割引なしという自信
鳥取時間ワンステップが遅れてる

鳥取市 太 田 幸 枝

傘寿坂越しても女捨て切れず
花傘の鈴が先祖の霊を呼ぶ
すいすいとブランコ漕いで浄土まで
ママになる責任胸があつくなる
ありがとうごめんなさいを子に教え

鳥取市 山宮愛恵

N響へひとり心の潤滑油

ぎりぎりど螺子を回してまだ半は

十葉の匂い年々好きになる

大胆な味だ油は何だろう

古里の訛りに憩う負の心

鳥取市 加藤茶人

口答え油をそそぐ更年期

ドックから帰る半病人の顔

サブリより食わず歩いて瘦せただけ

カタカナで書く効能の心地良さ

謙遜が過ぎると嫌味にも聞こえ

倉吉市 牧野芳光

褒められぬけど税金は払ってる

舌をかむような英語は使えない

お婆さんサバを読むのは罪ですよ

タラの木をしつかり残し藪を刈る

出し惜しみするほど余生ありません

倉吉市 山本玲子

爽やかな声で鶯谷渡り

風のない日は風車基の休息日

猿真似でその場のぎもさまになる

イヤリング諦めさせたゼロの数

いつからか命を軽く扱われ

倉吉市 松本よしえ

まん丸い地球に生きて苦勞する

やたらデモ・テロ外国はおそろしい

還暦を越えた娘と行く夢二展

夢二の絵じつと動かぬ老紳士

筍を貰って糠を買いに行く

倉吉市 猪川由美子

恋心失せれば女お終いね

宇宙人総理現実処しきれず

こりやダメだ日本沈没待ったなし

柔ちゃん議員のメダルまた狙う

選挙用パフォーマンズの仕分けかよ

倉吉市 山中康子

ありがとう胸に灯のつく恩返し

梓を出てつめたい風も心地よい

ベケボンのおどけた顔に励まされ

どうですか元氣そうだがどこわるい

どう思う沖縄県民の怒り

倉吉市 最上和枝

親娘だな電話の声がそっくりだ

内定を蹴られて未だ職捜し

洩れて来る笑い声皆福を呼ぶ

難しい世を楽しんで生きていく

貰い物返しが頭かけめぐる

米子市 白根ふみ

あやまちをして人間らしい日が暮れる

踊らねばところが沈むからおどる

縦に首振れば一度に楽になる

可愛がり過ぎて通用しなくなる

慰さめてくれなくていい気楽だから

米子市 野坂なみ

党多く信の一票迷いだす(参議院選)

若者の菜食主義よ欲を出せ

みつをの書味わうほどに酔ってくる

自己採点欲目につける癖をもつ

日記にはるんるんの日を晴れと書く

鳥取県 深田 俱久

がたの来た五体へ今朝は梅酒つぐ

卒寿坂なだめすかして万歩計

東方へ両手あわせて祈る朝

余生とも与生とも思う満ち足りて

限界を越え次ぎつぎとコマーシャル

鳥取県 石谷 美恵子

あの時は妻に始末書かかされた

簡単なお見舞状のぬくい文字

目鼻だち少しくずれて福の相

福耳に穴あけてから下り坂

老いの耳なるとい言葉が心地よい

鳥取県 鳥越 鬼一

ビュロロローやつて来ましたアカシヨーピン

休耕が増えて今年も蛭減り

年金日指折り数え待つ暮らし

子が無けりや孫がないのはあたりまえ

日本の首相の任期は一年か

鳥取県 山本 正光

もうしなくよくよするは無駄と知る

僕の胃は酒とあらそいなどはせぬ

ゴクゴクと水飲む音の素精らしさ

逢える日の笑顔いっぱい用意する

幸せと思うこの歳飲めて生き

鳥取県 山下 節子

肥満体福々しいはお世辞だね

福耳に思う存分ピアスつけ

始末書を書いて一件許される

自分史が時代の歌でよみがえる

関所など無い意のままに旅をする

鳥取県 北村 稔

寝たきりを無理に起こして陽なたぼこ

寝たきりの母が済まぬと泣かせます

ぎりぎりの合格だっておんなじよ

父さんの昔の歌に味がある

給料もボーナスもない農楽し

鳥取県 竹 信 照 彦

山菜はただよと言って叱られた
お忙しい時でしようかと老人会
これからの旬の苗物花盛り
旬が出る前にハウスの旬を食う
天然魚減って旬には養殖魚

鳥取県 鈴 木 一 弘

保養所のタオルで偲ぶ母の肌
同窓会車座で聞く歴戦譜
傘差して蛍雪の窓ふり仰ぐ
窓開けて恩師の四股名声かぎり
同窓会傘寿の川で蛍狩り

鳥取県 細 田 裕 花

老眼がほどの位置まちがえる
六月の大地命のパラダイス
夏空へ元気に跳ねる草の種
味のある流木拾いインテリア
カタツムリやさしい雨を待っている

鳥取県 佐 伯 や え

友がくる久しぶりだなかしわ餅
花の絵をきれいな線で画いてみる
障害をはねのけた子の絵が歌う
長生きをしたい欲まだ捨てませぬ
合掌の手に空がある花がある

松江市 三 島 淞 丘

力より情けに開く貝の口
接ぎはぎの弁解しては逃げ回る
ぼろぼろと古い鱗を脱ぎ捨てる
里自慢人の情けとしじみ汁
誇らしく胸張る句碑になった石

松江市 川 本 畔

渦のように追っかけこの恋だった
止むを得ず少しずらして嘘をつく
足許が不如意になった酒と居る
トマト売り美味しいですと言いつぎ
ふるさとの風は他人の色ばかり

松江市 松 本 知 恵 子

山の道若葉の息吹沁みてくる
大鍋の出番ばあちゃん旬を煮る
杖をつき頑張る父が愛しくて
金運の赤猫だから飾ってる
しばらくは狸寝入りと洒落れこもう

松江市 小 川 注 湖

小さいが僕のしあわせこのくらい
美味しいと評判の店満員だ
子ども手当子どもの方が意見出す
汗吹いて賑やかさ撒くギャル御輿
一個一個良心詰める選果場

出雲市 石倉 芙佐子

生かされて夫婦で越した八十路坂
一足お先などとはきつと言わないで
これからも楽しく生きよ手をつなぎ
さらさらと並び耀く北斗星
病院の廊下思わぬ人に逢い

出雲市 富田 蘭水

勅使くる出雲大社を信じてる
虫穴の野菜だけれど誇り持つ
余命など今日いっばいの汗を出す
プライドが邪魔する平凡な暮らし
マイバックスーパ―通い身について

出雲市 岸 桂子

見舞客来たので帰る見舞客
善人の顔してお経あげている
四次元の情景抱いてホタル飛ぶ
喪服着てわたしは別のことと思う
手の甲の日焼け気になる草むしり

出雲市 多久和 敬子

古稀の坂ちよつぱり夢をふくらませ
賞味期限気にする人と食べる人
娘のしぐさ私そっくりどうしよう
箱の中愚痴が一杯詰めてある
梅の木も柿の木もあり実にならぬ

出雲市 小白金 房子

節くれた指が苦楽を語り出す
回診の白衣まぶしい朝の声
一日の翼を畳む茜雲
野菜種貴女に上げる雨上り
口実の迷いにのらぬ寡婦の意地

島根県 持田 多輝子

迫力も気力も欲しい老いの日々
国運を背負う総理の板ばさみ
あきれてもうかつに本音など言わぬ
老い一人のんびり朝の一番茶
仏だんの母の年齢こえて生き

岡山県 撰 喜子

招集され桜のように散った人
買物物は運動かねて歩きます
工夫して食費削らぬ自負をもつ
好きな菓子に作法を抜きの抹茶飲む
あきもせず三日で止める日記帳

美作市 大石 あすなろ

集中力欠けてリセットばかりする
日向ぼこたまにはしたい足の裏
妥協点探しつづけて不整脈
直送便解けばこぼれる国訛り
引き合いに出された僕の裏話

美作市 山本玉恵

うたかたの命心の草書体

虚と実のはざま命の炎は消えぬ

夕陽燃ゆあきらめ切れぬ物抱かせ

年金の枠内で居るいのちがけ

雲は流れて夢のつづきの一雫

美作市 福原悦子

削られた山は無理だと泣いている

畳んだり干したりもする日記帳

口惜しさを流す女にある蛇口

お茶席に招かれ飯面つけていく

成り行きにまかせ余命が軽くなる

真庭市 福岡智恵子

昭和史の傷忘れられぬ炎暑の日

敗戦の苦境凌いで今がある

駅弁が宝石箱に見える旅

年を経て弟妹旅行すぐ決まる

ふる里の話はつきぬ姉妹旅

真庭市 国米さくゑ

逆らわず流れのままの人生譜

一本の杭に流れを変えられる

飴なめて頑張ってます吟の友

頂点の椅子がぐらぐら揺れやまず

雨しどど打たれて石も冷たかろ

竹原市 石原淑子

風鈴のはこぶ涼風生き返る

さよならは言わない君が消えそうで

もの忘れ自慢しあつて長くなり

食べ喋る静かな時は眠ってる

いとかわの石を拾いに豪州へ

竹原市 岩本笑子

病院へ行くバス一番先に乗る

缶ビールこれがあるからする仕事

何でだろ星を見てると出る涙

父思う器用な指を受けついで

いつか消える足跡だけど歩かねば

竹原市 時広一路

読めるけど分からないのがカタカナ語

気分一新眼鏡を替えてみる八十路

お歳ですよと膝が私に訴える

自分史のところどころを忘れてる

来年を信じて花は枯れてゆく

府中市 藤岡ヒデコ

波風に逆らえないが異議はある

我慢ぐせ身についたまま六十年

誘われるうちが華だと輪に入る

異常気象パツと出来ない衣更え

ネジを巻くその日その日で加減して

府中市 馬場利子

八月へ語りつくせぬ空がある
垣根から朝顔のぞく夏が好き
しがらみを抜け三分のカップ麺
貴女の手顔を浮かべて貼る切手
全身でビーポーの行く末を聞く

美祿市 安平次 弘道

デジタルのなやみお経はいかがです
ゆっくりと沈む夕陽を見えています
点と線ブライドだけは守れるか
すぎ去つてみれば予想の範囲です
両の手にコップの水がゆれていた

宇部市 平田実男

何よりの支え空気のような妻
玉砂利の音は神様達の私語
逝く時は夕陽のように沈みたい
重箱の隅を突いている仕分け
ソロバンを弾くと細くなる絆

東かがわ市 清川玲子

夢で逢う人は二十のそのまんま
百歳へと未来の夢をつないでる
ストレスをゆっくり溶かす梅の酒
アイリスの色に染った梅雨間近か
平城宮跡天上人がほらそこに

東かがわ市 川崎ひかり

家中に匂い充満ラッキョ漬け
愛というときめき長く忘れてる
その内に手押し車の世話になる
来世もきつとあなたを好きになる
金魚皆死んでうつろな日を送る

東かがわ市 原賢

あぶく銭持つと男は蝶を追う
ひと呼吸おいても読めぬ他人の腹
生きている証か腹が減ってくる
朝露が光る新芽にある未来
いきさつはどうあれ挨拶だけはする

東かがわ市 伊勢八重子

長い目で見れば些細な事ばかり
深刻な話にお茶をそつと出す
刺のある言葉は聞かぬ事にする
何もせず時計ばかりが先を行く
健康がすべての基本万歩計

松山市 古手川光

選挙のための政治の付けはお断わり
官房機密費そうだったのかそうなのか
世界一平均寿命も借金も
羽化登仙うらやましいと思う下戸
デパートの物産展で買う故郷

松山市 宮尾 みのり

晩成は夢のまた夢日向ぼこ

誘惑に負けてケーキを二個食べる

ためらっているナ敬語になつてきた

生命線延ばしています維持装置

つまり知る見栄っ張り虚栄心

大洲市 中居 善信

音一つ立てない小糠雨である

屍を雨に打たれるそれもよし

沖縄を今語らねば来ぬ平和

暑い夏来るヒロシマも沖縄も

福島瑞穂よそれでよしそれでよし

西予市 黒田 茂代

雷神の虫の居所多雨少雨

金持ち貧乏貧乏の目にじれつたい

値札見ず買える身分に一度でも

良くも悪くも運勢合うたことがない

丈夫なのもよし悪し悪しバグ飽きぐる

高知県 小澤 幸泉

改める顔は見せない反抗期

のびのびになった返事を書き直す

真ん中に子供を置いていがみあい

カクテルへ女の嘘がきれいすぎ

この街に住んで悲しみまだ癒えず

唐津市 坂本 蜂朗

年毎に妻の石垣高くなる

耐え忍ぶ無口饒舌なのは妻

金婚の道ハンドルは妻の手に

合わせてるのに合つてると思う妻

結論をはっきり言つたのは女

唐津市 井上 勝視

敗戦忌元氣に伸びる芋の蔓

校庭に幻を見る芋畑

老兵の記憶苦よりも涙です

鶴彬いままも堂々生きている

あと一年卒寿を目指す散歩杖

唐津市 市丸 晴翠

居眠りの祖母に毛布を掛ける孫

丁度良いところと湿布貼らされる

物置になった平和な非常口

このところ釣瓶落としに進む老い

まだ少し生きる欲あり八十路往く

唐津市 樋口 輝夫

線香のポトリと命落とす音

元栓の夢ばかり見る旅の宿

コンビニでよく売れている恵方巻

勘定は任せておけと先に消え

泣かない子迷子と誰も気がつかず

熊本県 高野 宵草

テレビ消し読めば時計が急ぎ出す

八十年続けた鼓動聞く寢床

ポイントの点検一巡消灯す

半袖のシャツに代えたら雪が降り

わが顔の何と拙さよ愛しさよ

熊本県 岩切 康子

車窓から大パノラマの晴れ女

33回忌へ写真を纏め持つ

遺品の糸使った布団仕上った

梅雨空に反応してる後遺症

樋掃除は夫に任す梅雨の声

シドニー 坂上 のり子

何と言う蒼さだろうか夜明け前

桜想う文化世界でただ一つ

遠来の友へ何たるどしゃ降りよ

やつと陽がほほ笑む洗濯物ゆれる

コーヒーをたぎらせ籠もる臭い消す

砂川市 大橋 政良

深ぶかと欠伸を囁んでまた一つ

一本の線を辿って過去を知る

隅っこに咲いて淋しい花になる

檜山の矢印がある道の駅

かけそばをすすする一面蕎麦の花

黒石市 佐藤 古拙

散りぎわの美学を知らぬ月見草

おひねりが義理がたく降る村芝居

帰省するたびに萱屋根減ってゆく

髪型を変えておんなが脱皮する

父超えて戸惑っている余命表

黒石市 相馬 一花

混浴で上がるチャンスを探索する

ほろ酔いで軟らかくなる石頭

低音の囁き痺れてくるハート

唇に少しは残るキスの味

喧嘩してしこりが残る血の絆

弘前市 福士 慕情

ビールだけ飲んで見事なビール腹

ロードショーたった二人で幕が開く

喉元へカミソリ当てる散髪屋

読めぬのに頷いてみる書道展

メモ用紙探してる間に句を忘れ

弘前市 高橋 岳水

皮膚呼吸する万緑に抱かれて

お荷物にならぬ積りの万歩計

物差しが競う心に火をつける

野良犬に絆のほしい老いが来る

こめかみの皺は男の履歴書だ

弘前市 須郷井蛙

日本人なのに読めない字が多く
お土産は値ぶみされない物を買
好きなものたんまりいいねバイキング
ジュースよりお水美味しい汗のあと
観光があるから出張手をあげる

弘前市 今 愁 女

午前三時読書タイムの目が覚める
そのうちと身辺整理まならず
如意棒のよにケータイ持って遊歩道
玉子十個の安値に無駄も買い漁り
ポイント五倍箱で買い置く缶ビール

弘前市 岡 本 花 匠

年金と子ども手当できずな旅
朝焼けが強くて傘を持って出る
反骨の魚雷のタクト振る悪魔
束の間の朱夏を乱舞のねぶた馬鹿
キンコンカン戦後の唄につちかわれ

平川市 小 寺 花 峯

ひらがなで飾る男に嘘がない
中締めは一本締めで飲み足りぬ
疑問符が取れてまあいいお月さん
新幹線野菊が笑う通過駅
蟬螂の笑った顔を見てしまう

青森県 松 山 芳 生

木蓮の白はたばたと別れゆく
さくらさくらまた一年の北のさと
やんわりと僕を宥めて川渡る
春津輕僕にはボクの花が咲く
待つさくら咲いてはしゃいで散って哀

(前月分) 枚方市 安 達 忠 央

ランドセル以来の友と喜寿祝い
一年生家のしつけが透けて見え
気配りがとても上手で座を握る
コンビニに一人暮らしの食まかせ
乗り出せばどんだん勇氣湧いてくる

せんりゅうぐー一ぶGOKEN 第9回誌上川柳大会 作品募集

題・選者

「連」

黒田 るみ子選 (第8回優秀者)
能田 勝利選 (第8回優秀者)
吉松 澄子選 (第8回優秀者)
戸川 嘉山選 (第8回優秀者)
岩淵 香城選 (俳詩「南風」)
筒井 祥文選 (ふらすこてん)
小島 蘭幸選 (川柳搭)
中川 一選 (ふあうすと)

「雑詠」

締切・発表

2010年9月20日(月)消印有効
11月発表誌送付
1組1,000円何組でも可
〒791-0212 東温市田窪
1976-17 野口三代子方
せんりゅうぐー一ぶGOKEN
誌上川柳大会係宛

お問い合わせ・連絡先

松山市千舟町7-6-504 原田否可立
☎089-921-5377

川柳塔の

川柳讃歌

(68)

木津川 計

平均寿命延びて人生薄くなる

古手川 光

薄い羊羹をだれが好みましよう。厚切れであつてこそです。大体に「薄い」は、薄情、薄謝、薄利、薄弱、浅薄、軽薄など、嫌がられたり、否定されたりしがちです。反対に「厚い」には厚意的で、厚情、厚志、厚誼、厚遇などが有難いし、重厚な人物や温厚な方への信頼も厚く、評判もいいのです。

すると、薄い長寿か、厚い間の早死にか、「しがみつくほどのこの世でなかりけり」(路郎)への共感と右の句を僕は解するのです。

忘れるというより消えてゆく記憶

三好 專 平

いまは懐しい「君の名は」のナレーシオン、「忘却とは忘れることなり」ではない、と専平さんは菊田一夫に遅時ながらの異議申し立てをされたのです。「忘却とは消え去ることなり」ではないか、と。忘れたことを思

い出すことは可能です。が、消えたら思い出しようもありません。

不義理も借金も約束も「川柳讃歌」のメロ全部消えたら、僕は幸せというか、無責任というか、専平さん、どうしたらよろしい?

暗証番号を忘れて二十年

森 元 ふみよ

ふみよさんの暗証番号は二十年も使われることがなかったのです。忘れるなんでもものでなく、完全に消えています。消えて二十年、日常生活に何の支障もなかった、ということではキャッシュカードを必要とされなかったのです。デジタル化、ＩＴ化と無縁な浮き世離れの堂々として超然、歌人の斎藤史さんの天晴れな生き方です。彼女はこう詠みました。「携帯電話持たず終わる死んでからまで便利に呼び出されてたまるか」、ふみよさんも又、極楽という切札で感わされ

佐々木 満 作

人類史上最大の発明は、死後の世界を編み出し、宗教を大系化したことに他なりません。ことに仏教が極楽に対比して地獄を構築、信じさせたのは地上最大の、ではない、歴史上最大の作戦、だったのです。

一休和尚は「極楽・地獄は、東にも西にもなし。北(来た)道(さ)がせ南(皆身)にあり」

と説きました。さすがに頓智の名人です。のちの不勉強な坊さんはこれを活用、「お寺へ参れば極楽行きは叶えられ」と。

真ん中にキリトリセンのある夫婦

安土 理 恵

天根夢草さんの「ああ夫婦電車がゆきちがうように」にも、酒井一壺さんの「ああ夫婦鎖ではない絆です」にもひどく感心しました。が、理恵さんにまたしてもやられました。

絶えず夫婦は破局の危機と背中合わせ、つまり反対を向いているのかもしれない。だから破ると、切り口は無残です。が、キリトリ線を割くと後腐れがないようにきれいに別れられるのです。なるほどなあ。

大志あり天から吸うて天に吐く

居 谷 真理子

坂本竜馬の如き大志です。竜は天から息を吸い、天に吐きます。スケールが違います。人間もかくあるべし、とは真理子さんの号令です。失礼ながら彼女のご主人に同情します、竜はやさしい動物ですが、喉の下に逆さに生えた鱗が一枚あります。これに触れた人間は激怒した竜に必ず殺されます。即ち「逆鱗に触れる」です。真理子さんのご主人は珍しく逆鱗のない、やさしい方に違いありません。

(「上方至能」誌発行人)

自選集

兩川 洋々

臆病な鬼と仲良しにはなれぬ
寝首搔く出刃か女房が研いでいる
春だから恋の余震が止まらない
先の無い同士だケンカなどすまい
ある日ある時神が道しるべを変える

板尾 岳人

街角で逢った男は龍馬だな
あばら骨薔薇と仲よくするでなし
あのひとと歩いた町は不眠症
落ち込んでいる訳でなし未だ八十
妖怪に出合ってから飲みすぎる

奥田 みつ子

遷都祭いまいにしえの空気吸う（平成遷都祭吟行 四句）
山並みを見れば鐘の音聞こえそう
史跡巡り古都の風格そこかしこ
ストレスをいつしか消した古都の風
真似できぬ努力努力の人送る（樟尚士氏）

親友のためと厳しい助言する
定退へ趣味の盆栽熱込める
ためらったばかり幸運掴めない
亡父母五十回忌を無事勤め
再会へ遠い記憶を巻き戻す

川上 大輪

残高はゼロでエコには慣れている
不意に気が変つて途中下車をする
ひと眠りすればモザイク消えていた
帰らない筈を今も待っている
敵に回すと厄介な傘になる

木村 あきら

聖戦に妻子残して征った過去
大和武蔵魚礁となつて幕下りる
二千年の歴史を閉じたキノコ雲
妻宛の手紙を胸に戦友は死ぬ
報道が嘘八百の大本営

小島 蘭幸

空豆を剥く丁度良い爪になる
手を上げるもう迷いなどないように
月へ月へと泳ぐマンタにある翼
横書きの絵ハガキばかり残るなり
欲ばりになるのはいいことだ母よ

河井 庸佑

小西雄々

散りいそぐ花にも訳はありそうだ
菊飾る夢をいだいて菊育て
健康器具つぎつぎ備え病んでいる
珍しく実った西瓜デザートに
腕相撲孫には負けず元氣でる

斉藤 磊

約束はこの山ひとつ越えてから
葉ざくらしみじみ語るいのちなど
りんご樹も大志を抱き生きている
約束は三年先の接木する
目覚めると野鳥と会話もうしてる

塩満 敏

アメリカの基地は日本から去りなさい
参院選世の中変える票がある
妻の庭今年も朝顔植えてあり
この秋に傘寿の祝いする予定
鶴彬大阪城を宣伝す

新家 完司

五七五脳内占拠耳日曜
妻小言貴方川柳自閉症
今宵又誘惑電話午後八時
余命内矯正不能飲酒癖
右絶壁左断崖現在地

恒松 町紅

廃業や閉店街も老いてくる
車から降りて骨折した話
両隣子供の声もしない町
貸した本戻らず棚が淋しがり
立ち上がる元氣もらった車椅子

津守 柳伸

騙されてみよう必死の汗光る
会者定離み仏のみが知る定め
グリーン車サマーコートのお出ましだ
なによりもまず健康のお湯めぐり
ブルジョアを真似る貴船の床料理

遠山 可住

悠悠自適田んぼ少々無一文
末席という婆ちゃんの椅子がある
風邪ひとつひかない妻に寝込まれる
準備した椅子が半分埋まらない
米寿へのぼちぼち旬に迎えられ

都倉 求芽

梅雨の窓カーテンまでがうなだれる
カラスの声だけが明るい梅雨の空
春夏秋冬梅雨もひと役買うて出る
太陽の自惚れじわじわ梅雨が問う
掌を合わせ梅雨の葬儀へ重い数珠

土橋 螢

四苦八苦楽しいことが待っている
月光に照らされ罪が深くなる
蟹が泡ふく哀愁の海ゆかば
いらっしやいませ満月の窓ひらく
錢という暗さを覗みかえすだけ

中原 諷 人

逢いにゆく脚力いまだ頼りない
教室の羽づくろい受験子コース
咲くまでにアワダチソウの処刑など
墓参することも出来なくなりにつけり
見逃せば勢い保っている根っこ

西 出 楓 楽

七十路まだ世渡りの下手なまま
七十路まだ日本語が難しい
交際費削るとツケがきつとくる
空腹の時スーバーへ行くなかれ
負け方が下手で悟りに遠くいる

仁 部 四 郎

きっちりの時間代理の見舞客
ご近所のニュース土産に見舞客
来る順にクレーム言えぬ見舞客
久闊を叙し合っている見舞客
ドクトルの本音ひきだす見舞客

林 瑞 枝

魏郁たる美女の舞うよな白牡丹
わが夢の銀河に続く果てもなく
ストレスの枯野這い出て夏の旅
一度きりのこの世だ孤立せぬように
薄野の獣は月とねんころりん

前 たもつ

昇仙峡甲府の緑みな集め
雨上がり五湖の水面は静かなり
この下は富士山ですと虹の橋
一桁の軒寝言はまだ元氣
手術癒え満喫できた芝桜

政 岡 未延子

米寿まで一応出番組んである
もう少しこの世に粘り続けよう
少年の背筋あわだち草を越え
妖怪もひっこむゲゲゲ人の群れ
横風に弱い椅子たち転んでる

三 宅 保 州

ほんとうの深さ溺れてからわかる
暗いとは思っていない深海魚
刃こぼれを辿ると見えてくる答え
絶滅か太郎花子という名前
私の骨は自分で拾いたい

番傘川柳本社 8 月句会 (水府忌)

日 時 8月6日(金) 18時(開場17時半)

会 場 ホテル大阪ペイタワー

TEL 06-6577-1111

大阪市港区弁天1-2-1

地下鉄中央線弁天町駅すぐ

JR環状線弁天町駅すぐ

お 話 磯野いさむ

宿 題 「秘 密」 選者 当日発表

「プラス」 森口 美羽 選

「泣 く」 大堀 正明 選

「猿 」 片岡 加代 選

「星 」 川端 一步 選

「利 用」 森中恵美子 選

席題なし (各題2句)

締め切り 18時30分

会 費 1000円

出会いは宝あなたがいてるからわたし
人の世の重さ軽さの罪と罰
きれいと並べてちよつといい子ぶる
身長が縮んだ分を背伸びする
神の木が生きてる街の下真ん中
膝少しくずす女の酔い心地
背のびする男に助言聞こえない
密航は生死を越えてくる打算
身辺調査人身御供となった秘書
変身の技がたくみな金バッジ

宮 西 弥 生
八十田 洞 庵

温故知新

川柳句集『ふるさと』

須 崎 豆 秋

人間に化かされなやと親狸
紙屑が飛んでる死滅をした地球
植木鉢一年ぶりに水をやり
夜の蜘蛛死んだまねしたままで死に
陽と月とてれこに出たりはいったり
剃刀がヒヤヒヤとする話ずき
新緑が臍まで染まりそうな雨
鼻歌で入院をする夕まぐれ (入院三句)
さけたばこやめてなまこのようになり
どうですかどうですか病人眠るひまもなし
長尻が来て病人は熱を出し
しんぼしんぼジャングルでさえ十余年
鱧の皮キュッといっ杯もう駄目か
病人の耳へ夜通し水が漏れ
やせすぎて体温計がはさまれず
絶対安静馬鹿正直の姿なり

初 版 昭和29年11月発行
再 版 昭和30年4月発行
三 版 昭和33年12月発行
復 刻 昭和60年9月発行

水煙抄

川上大輪選

米子市 吉田陽子

デジタル化ついでに部屋の模様替え

ダイエット心が先に痩せてくる

数合わせわたしの頭提げて行く

電池切れここの一番を撮りこぼす

使い捨て未来につけを先送り

考えに考え抜いて今のまま

米子市 竹村紀の治

乱読で脳の栄養補給する

忘れてたジャガ芋の芽の自己主張

窓口で何時も慌てる保険証

飲む話小さな声も逃さない

止めろって好きなお酒だ無理言うな

菓子折りと謝りにゆく子の喧嘩

札幌市 三浦強一

一日の汗をビールで補給する

割り勘の仲間の酒はよく弾む

君と僕ビール枝豆ほどの仲

紙コップもつたなくても吟醸酒

本名は知らず雅号のお付合い

待ち合せ口臭剤をなめて行く

香南市 桑名孝雄

酒と歌ご迷惑とは存じつつ

年寄りの冷水承知しているが

やり残し三つ四つは子のために

老々介護看られる方も看る方も

まな板で僕はじつとはしておれぬ

雑草よ君もやっぱり生きたいか

高槻市 片山かずお

親に子を預け娘は翔んでいく

バアチャンを家来に孫の散歩道

聞いたままだけではすまぬ嗜好き

大の字になり青空に溶けていく

撒き餌だと分かる笑顔に魅せられる

しんがりについて波風かわす策

堺市 羽田野 洋介

自分色に染めるつもりが染められて

野菜好き草食系と言われても

マイナスでなければそれでよしとする

前途多難船頭ばかり揃えても

くちばしの黄色いうちはよくしゃべり

歩くだけ軽い財布を道連れに

西宮市 寺井 秋果

悪友の葬列に立つ悔しいな

リハビリへ少しお負けの万歩計

何方かなともかく会釈しておこう

再会の握手苦勞をしたようだ

風みどりメールを閉じて出ませんか

血圧の数値が浮いてくるジョッキ

篠山市 酒井 真由

昨日今日明日を紡いで生きてゆく

毎日が日曜だから出かけます

手も足も出ぬ剛球を投げないで

私はいつもチャンスをついにする

炊事洗濯あとはその日の風まかせ

虹いろの夢のつづきをしてみるか

海南市 小谷 小雪

ま後ろにつつかい棒のようなひと

洗い髪風にさらしてデトックス

田を植えて水の匂いを持ち帰る

蟻さんに話しかけるの気がひける

あくまでも主権在民です総理

まだ我慢きつと薄日が差ししてくる

竹原市 國實 力

八十を隠す元気を模索中

露天風呂山椒魚をやってみる

よく飲んだ職場に残る隠し芸

はじめてのテレビ正座で見たような

泣いてんのなあんだ花粉症なのか

神様も苦勞してます絵馬の誤字

芦屋市 竹山 千賀子

満天の星が見たくて山に行く

写経する筆が教えた心の灯

笹の葉に子らの幸せ巻くちまき

親切の匙の加減が難しい

退院日新たな幕が開く気分

ひたすらにありがとうです退院日

阿波市 三浦 千津子

命綱妻に託した安堵感

年月を重ね繋いだ赤い糸

古里の自然と流れ行く命

可能性秘めた明日へ旗を振る

前向きで生きる目線を高くして

目線下げ淋しき人の愚痴を聞く

札幌市 佐藤 登美子

藤沢市 加藤 スズコ

孫五歳ひらがなだけを拾い読む

歳のせいやたら昔を思い出す

父さんの酒癖嫌う青春期

老春を謳歌している一行詩

ビアガーデン仕事の憂さも一気呑み

札幌市 小沢 淳

納得は早く度忘れまた早い

鈍感力付け過ぎたのか無神経

朝は鋏夜はペン持つ二刀流

世渡りに信用という手形持ち

葬儀社が動くと言街が活気づき

昭島市 野口 忠

ああ言えばこう攻め返す仕分け人

見料をはずんだ客に色をつけ

通販の靴と折り合いつかぬ足

一杯のあとには至福のごろ寝かな

百歳が通過点とは恐れ入る

横浜市 巖田 かず枝

おふくろの味は三つ星レストラン

ウキウキと出掛けた後の痛い足

禁煙も禁酒も孫の手を借りて

頑張れば何とかなると信じたい

ピカチューに子守り頼んで昼寝する

ウグイスの初音うっとり雨上り

春風笑い崩さぬ花の意地

老いの春掛けて見たいな色めがね

生きてこそ心豊かに四季の花

藤見頃今日は遠出の車椅子

佐渡市 高野 不二

無駄遣いしなきゃ景気が良くなりぬ

警察官募集毎日ある事件

老人手当くれる大臣出てほしい

二合までつき合いますと言う傘寿

銀行で俺よりえらい免許証

江南市 脇田 雅美

大往生おしゃれな母に紅を指す

喉元を過ぎたカメラに好奇心

長生きにお洒落も趣味も欠かさない

ヤタガラス熊野古道で雨に濡れ

心まで凍る言葉が斜めから

豊橋市 藤田 千休

君の名はに個人情報教えない

無駄花を咲かせはしない仕分け人

振り向けば月よお前もストーリーカー

心地よい便座と語る小半時

降格も特進もないアルバイト

京都市 清水英旺

カワイイとみな一言で片付ける
梅雨近し膝関節がきしみ出す
夢とうつつシンクロしてる雨の音
人生は陽画陰画のモザイク絵
おとなしくしとこ年金入るまで

大阪府 神野千恵子

ぼつんぼつん紫陽花息を吹き返す
頑固者孫が一滴油さす
金平糖フラッシュバックする戦後
継ぎ接ぎで味がでてきた知恵袋
パビブポどこかおかしい宇宙人

大阪市 高杉力

舞台から降りよう拍手止まぬ間に
もう二度と背伸びはすまい独り言
挨拶をした人の名を妻に聞く
とりあえず並んだけれど何の列
ユニクロでよそ行きの服買っている

大阪市 安藤なつこ

給料日妻が請求書に見える
検査日がすんで少々ハメはずす
太めでも元氣やったらええやんか
どこまでも断ることも生きる道
連休が明けてなんだかすつとする

大阪市 笠嶋惠美

ありがとうそしておおきに言い添える
冷泉家タイムスリップして見せる
後期から心自由になる予感
どの花も懸命に咲く私も
未来図に百歳までの視野も入れ

池田市 上山堅坊

肩書きも損得もない飲み仲間
鑑賞も兼ねて育てるミニトマト
渾身の力でじつと耐える杭
蛍光灯替えろ替えろと点滅す
死亡保険受取る妻が先に逝き

泉津市 助川和美

妻元氣亭主は今日も米を研ぐ
散らかった靴で子供の元氣知る
心配するな一人暮らしの老いた母
政治家は命かけると軽く言う
紫陽花は雨に恋して色を変え

河内長野市 山室光弘

向こう傷あまた作った武勇伝
わだかまり包んだ胸に棘ひとつ
喋るなど言われもだえる口の先
贅沢はせぬが年金足がでる
縦に振る首がないのでへそ曲り

堺市 遠山 唯教

枚方市 河田 洋子

微笑みが介護の疲れ吹き飛ばす

空を飛ぶ翼がほしい少年期

大切な友情だから断ろう

居酒屋で今日の空気を入れ換える

提灯にさみしい虫が寄ってくる

高槻市 島田 千鶴子

すだれ吊り部屋も気持も夏モード

魚の目に急かされ靴を履替える

ケータイにつながれ妻のひとり旅

旅かばん解いていつもの主婦の顔

腰掛けのつものの職にしがみつく

羽曳野市 宇都宮 ちづる

マニキュアを塗って女に弾みつけ

輝いた証の名刺捨てられず

主婦業を自己採点で終らせる

平穏な日々に悲しい金魚の死

譲られた席に素直に座る老い

東大阪市 西田 いくひろ

カラオケは息抜きたまに足が向く

山里も過疎で田畑が荒れている

防犯カメラ怪しい人を突き止める

生き残る余生にネジを巻いている

ハードルを越えて自信が湧いている

ライバルのあまりの才に猜疑心

疑いを知らぬ夫の深い愛

年なのに疑ってみる黒い髪

先生と聞けば信じて疑わず

暗い道背後気になりにかけ足に

八尾市 田邊 浩三

背を見て育った子らが背を向ける

ライバルと夜更けまで飲む酔わぬ酒

ライバルがハイブリッドに買い替えた

一生分もう飲んでると妻は言う

一生の願いに女房振り向かず

神戸市 白川 淑子

わたくしは私貫く風当たり

一滴のアロマの香り春のうつ

ざぶざぶと川柳で私を洗う

嘘幾つ女は本音では泣かぬ

気が付けば皆居なくなり一人鍋

篠山市 石田 久子

散歩道声掛け合って勇氣湧く

ドアのある暮しにやっと馴れました

独り言本当は聞いてほしい事

誕生日ジンワリ迫る老いの道

珍らしく身近にあった当りくじ

三田市 辻 開子

花吹雪シャッタチャンスをずらされる
どうしても距離縮まらぬ嫁姑

脳トレのつもりがはまる熟語表

ウォーキングひと駅だけでメタボ減る

新婚のほどほどレシビ味は良い

西宮市 泉水 牙子

空想を食べて大きくなりました

何となく惹かれてしまう毒舌家

ユーモアで包んでいるの下心

神さまの企みらしい運不運

電子本葉の出番あります

和歌山市 上田 紀子

アングルを変えれば見えて来た世間

神様に試されている崖っぷち

マネキンを全部脱がせて夏に入る

ゆつくりと少女に戻るロスタイム

置き場所に迷う私の自尊心

和歌山市 福井 菜摘

先の先読んで小石にけつまずき

優しさを形に書けば○になる

お世辞など言わず生きろと影が言う

分け合った痛み絆を太くする

人生の幸せでよい家族の和

岩出市 藤原 ほか

削られて細くなっても芯がある

輪の中に入りそれから考える

描かれてみたくて墨を足しておく

今日をいうシナリオキラリ生きてみる

どん底を知っているから揺るがない

紀の川市 江内 次根

明日ひらく夢が花芯を温める

いい手相していると聞いたことがある

長生きを後悔させている政治

病院で貰い分け合う胃の薬

バランスがわるい夫婦の記憶力

紀の川市 宇野 幹子

割箸を裂いて別れを決意する

陽炎とさ迷う父の羅針盤

ドクダミの葉にも花にもある微罪

一呼吸おけと信号赤くなる

温情へ猫の尻尾が絡みつく

紀の川市 北山 絹子

ボジションを忘れた妻が飛び跳ねる

風向きの悪い夫を避けている

休日には手に取る物が多すぎる

こっそりと猪口一ぱいが顔に出る

母さんのうしろ姿に詩がある

鳥取市 高 浜 勇

出雲市 川 島 和歌子

咲かぬまま朽ちていく身がいとおいしい
つらくても自分は自分嘆かない
ふたりきり黙って食べて片付ける
もつれても時間たつぷりありますよ
ひとり身に風は冷たいことを言う

米子市 後 藤 美恵子

美しいことば葉のように飲む
愛という店をなかなか閉められず
残り火がときどき炎視させる
コーヒーで育つ噂が風に乗る
遙か彼方ことばが一人歩いている

米子市 野 川 宣 子

るるんと手を組む仲も老いている
撫でていくみどりの風に酔っている
言い訳を探しながらの回り道
三世代溝を埋めてる孫の守り
探し物一緒に秘密覗かれる

鳥取県 齊 尾 くにこ

思い出す優しさが梢をゆらす
耳打ちへ稜線はくつきり浮ぶ
酔っている間に手の平は返ってた
いただいた幸デザートにティータイム
風音を聴いて一番星を消す

五月晴れ青葉若葉の香る庭
小旅行天気予報がうそついた
とても無理嫁と互角に喋るのは
お買物いつもお供のエコバッグ
八十路来て歩く幸せ今気付く

雲南市 菅 田 かつ子

譲られて座った席の温かさ
笑ったら負けてしまおうとおじいちゃん
気をつけて祖母の言葉を背で聞き
気休めと思えどじっくり効く言葉
今わたしご存じですかオフタイム

大洲市 花 岡 順 子

一呼吸おけば優しい文字になる
さあビール脳の部品が緩みだす
ワープロの謀反へ右往左往する
一歩引く勇気が視野を広くする
そうするか踏ん切りつける独り言

今治市 渡 邊 伊津志

マンションの中で欠伸をする造花
肯いてばかり結論まだ聞けず
励ましの言葉を囁むと暖かい
温暖化人の心もずれてくる
柔かい言葉の棘に気付かない

網走市 角谷 幸甚

縄のれんストレスを脱ぐ戦士たち
振り向くのに時間がかかる亀の首

いつか独りにだから慣れますしたたかに
偽・欺・疑・戯・犠・やっぱり義にはこれがよい

栃木県 岡野 すみれ

もうすでにガンと決めてるガン保険

切る事に決めたら咲いた袖の花
抜け道があつて道草したくなり

トランプができる家族に戻りたい

東京都 高岡 弥生

蚊の季節年々長くなりますね

子の苦勞無駄にはならぬと信じたい

小さくて暖かい手の肩たたき

傷ついた心に欲しい母の声

東京都 井上 つよし

葉桜や傘寿気楽な年度末

カルチャーでも女は強し過半数

自分では背筋伸ばしている積り

自分では見えぬ自分を妻は知り

横浜市 川島 良子

カーナビに頼りすぎてる記憶力

ボケないで生きたい本日のメニュー

試着室より明日からダイエツト

自己主張とてもロボツトにはなれぬ

勉強になったと得のない話

塩少し加え祝辞をしめくくる

指切りの小指がうそを見ぬいてる

言葉では言わず名刺に喋らせる

岐阜市 平野 あずま

ウエルカムと山彦返るUターン

不揃いの野菜味には自負がある

マドンナの誘い先約反故にする

風邪うれし夫がつくる七分粥

静岡市 渡辺 芳子

川柳で笑いのしわのいい人生

雑草でもきれいな花を咲かせます

今が旬はて私にもあつたはず

もつたないもつたない物と物を捨て

大阪府 若月 祐作

釣り池に一日座わり春を食う

検診に主治医は指で丸をくれ

人の世は縁を大事に生きている

君子蘭蕾の開く音を知る

大阪市 松田 聡

えっ傘寿はりのある声薄化粧

鳥の声今朝も変わらず元気づけ

月星をじつと眺めているゆとり

責任をとると投げ出す無責任

大阪市 吉田知之

酒好きでまずお流れを所望する
遊び癖につける薬はないものか
高野山開いた大師今も生き
カルチャアの門を叩いて若返る

大阪市 吉川弘泰

酸欠で体に欠伸呼び込んで
年寄りに言うたらあかん年寄りは
体内に点滴液の旅紀行
待ち合せ欠伸うつして右左

大阪市 片岡松枝

冬越せた体へ風邪がまといつき
嫌な事洗う湯ぶねで首が鳴る
昼寝して元気をつけて大掃除
大往生するため医者に通うてる

大阪市 太田としお

期待する笑顔に揺れるランドセル
見方によれば昼行灯に見えるけど
人生の節に恩ある人がいた
損得を考えすぎて動けない

大阪市 平井露芳

長さ先ず測って釣果確める
未だ死ねん大河と朝ドラ見たいから
ケイタイの写真で始まる孫自慢
角はもう見慣れましたよセントくん

大阪府 高木道子

細かい字とどのつまりの注意書き
落ち着かん日本のトップと世の景気
それなりの場数を踏んだ低い腰
ハッピーな風を託した御釣書

大阪府 中井記久乃

山椒とるその手に残る香ぐわし
夜走る見える街灯目印に
寝る前に夫の寝息たしかめる
カレンダーまだ日があるとつい忘れ

大阪市 橋村容子

紫陽花が今日も笑顔で呼んでくれ
つかまえたチャンスに乗って今がある
口蹄疫牛の心を誰が知る
人間だったらどうしよう口蹄疫

泉佐野市 稲葉洋

夏の色真つ赤にするか真つ青か
追うように追われるように走馬燈
紫外線老いを仕分けて加減しろ
うしろ手に夏帯結び娘も大人

茨木市 島田誠一

湯煙りも噴火も神の思し召し
新緑に充電新酒で放電
魔女増えイケメン仏がもて始め
母と娘の絆に男立ち入れぬ

河内長野市 内海綾乃

母元氣何をするにもよつこらしよ

巣箱つけカメラ取付け鳥を待つ

菅総理動じぬ態度頑張つて

生きているようにかなるよ母の声

河内長野市 山本エミ

久しぶり心弾んで取る受話器

達者です一言多い口を持つ

祝開店競い合わせる女の目

挟み将棋孫に勝つたらママ睨む

河内長野市 谷久美子

仕方なくついた大嘘人助け

文句なら後で聞きますおちついて

手の中の小さな幸を握り締め

いつになく優しい妻にうろたえる

河内長野市 木太久 正一

愛犬の散歩で呼吸整える

年重ね喋る仲間がいて元氣

無手勝流男の料理まだつづく

与野党の攻防つづく夏の陣

河内長野市 梶原弘光

シンブルに構えられると隙がない

物言いをつけられたのは砂かぶり

ほどほどにしいやと亡母の灯が揺れる

子沢山ビール一本つけましょか

河内長野市 木見谷孝代

煮詰まって大事なエキスだけ残る

花菖蒲雨に濡れてる方が良い

喋りすぎ血管までも透けて見え

朗らかに喋り病気が寄りつかぬ

河内長野市 松岡篤

この祝辞どこかで聞いた記憶あり

駄目押しをされて返事をノーに変え

本心と正反對の捨て台詞

娘から貰うお古で若づくり

河内長野市 辻村洋子

八十歳長生きするとダイエツト

夢の中M寸着てる私です

困ったな母性本能くすぐられ

色メガネ夫見るとき濃くなる

河内長野市 針生和代

今日だけは文句は言わぬ花の下

お互いを結び直して金婚譜

田植時お茶を運んでいるペンツ

梅らつきよ漬けて長生きするつもり

岸和田市 中岡香代

人間と距離を狭める介護ロボ

胃袋がフリーサイズのバイキング

仏壇の花も造花で夏休み

鉢植を過保護にしては枯らす妻

堺市 近藤 治子

巢立つ子の部屋そのままに母のうつ
必ずが私を縛る縄となる

かたくなな心が視野を狭くする
痛みだけ取つてと医者にたのんぶく

堺市 内藤 憲彦

我が家なら疑わしきは起訴死刑
辛そうなハンゲル文字のカップ麺
赤提灯ばくはばくはと出る本音
朝顔の萎んだ頃に起き上がり

堺市 澤井 敏治

一字だけ大きくなってしまふ鬱
異議なしと最前列で叫ぶ椅子
瞑想かいや転寝の椅子もある
人は人我は我なり黒は黒

高槻市 初代 正彦

丁寧に掃除しだすと切りがない
人は人どんな時でもマイペース
温かいあの思い遣り今気付く
いつの世も歴史を変えた人がいる

豊中市 荒巻 夢

つんのめり生死の境ひよいと越え
父に似た後姿を少し追ひ
アイドルがいつのまにやら母の役
プライドが慰められて疼き出す

豊中市 源田 啓生

湧き水をゴクゴク飲んで嘘を消す
鯛どの命貰うて生きてます
親切が過ぎた機能に退化する
残された人生少しいい加減

豊中市 池田 純子

ペタンコの靴で心もリラックス
画用紙をはみ出し絵筆床を這う
梅らっきょ漬ける頃よと亡母の声
痩せなくちゃ言いつつめくるお菓子本

寝屋川市 岡本 勲

杖になり杖にされたりめおと坂
手切れ金にばけた汗の退職金
流れ星きつとあの子と見えそうだ
めしまだかはいただ今は俺の役

寝屋川市 小谷 滋彦

薫風にでんぐり返り空を蹴る
いい湯にも税をとられて湯冷めする
豆ごはん粒小柄でもこしひかり
投句して確かめてみる誤字脱字

羽曳野市 森下 一知

どこまでの命夜店の金魚鉢
報告の間延びが事故を膨らます
村祭り人手不足に冴えぬ笛
失敗の試行錯誤に屑の山

羽曳野市 松本 静子

生涯の学習にした川柳を
故郷の山に笹百合咲く頃か
絵画展友のかく絵は青い竹
梅雨入りはどしゃぶりの雨梅雨どこへ

羽曳野市 仲谷 真一

参院選 誕生日が投票日

天候不順 体調も不順

交流戦実力のパシしてる

サッカーのワールドカップ興味なし

羽曳野市 安本 美喜

靴脱いで世間の地熱感じ取り

初物と大笑いしてメロン食べ

とれとれの丸茄子刺に突き射され

地球の熱下がりますよう祈ります

阪南市 坂口 公子

蛍の候手帖に足を奪われる

幾憶もこんな地球という談議

人在りやあんなにピカリ光る星

宇宙人在せば生のある内に

枚方市 坂本 ミヨノ

跳ねたいわ駆けてもみたい足笑う

毒舌の丸い背中を憎めない

喋るだけ酒でまぎらす男顔

杖突いてふと幼な友恋う年に

枚方市 小川 良吉

歳とらぬ脳裏の笑顔原節子
化粧より笑顔と寺の掲示板
たてまえと本音の顔の使いわけ
快便で快晴の朝生きてよし

箕面市 寺井 柳童

梅さくらつつじカイドウ用意どん

一〇〇〇勝へ館内が沸く右上手

面接へ苦労が見える靴の先

草笛が吹けてスキップ青い空

八尾市 赤木 妙子

うちで一番艶っぽいのはアマリリス

いい女だと言われたことがないの

気遣いのはずでもとんだ老婆心

口出したばかりに覗く落し穴

八尾市 前田 紀雄

全没でサヨナラ負けの気分です

無事帰還忘れてました野口さん

ユーモアに半生捧げ巨星逝く

蜂が消え受粉待てない南瓜達

八尾市 中島 春江

夫婦けんか亡夫とも一度してみた

行進曲みているだけの老いの足

でんでん虫も私も好きなマイペース

保証人迷惑かけぬと言うけれど

大阪府 西川 冷子

加東市 黒崎 美紗子

新しい風の息吹きで脳鍛え
すれ違いバック気になる宵の道
自家肥料な夜な狙い荒される
母の日のシルクのパジャマ見てるだけ

大阪府 畑中 節子

カルガモのファミリーたのし青田中
夕暮れのホタル乱舞のルミナリエ
遅れ来る仕事疲れの花ぐもり
一番に採れたキュウリの朝の味

大阪府 小栢 こずえ

ずるよりも休みが多い草むしり
手も足も出せず見ている田ごしらえ
夏めいて衿元広きシャツを着て
雑音と雨風凌ぐ城があり

神戸市 早川 孝子

大地から育つ実りは母の色
転んでも繋ぐバトンは離さない
順番はやはりあなたの後がいい
嫁がせる父の涙が酒になる

尼崎市 小池 幸子

年重ね許容範囲も増して老い
百均で十分間に合う品見付け
八十路坂酷使した膝愚痴る梅雨
寿命延び気丈に余生生きる術

年なんか言わないダンス仲間です
よい日和玉葱乾した手際よさ
草とりの笑顔おしゃべり早くすむ
痛みます秘密かかえた胸の奥

加東市 安達 厚

ありし日を想うや友の句碑の前
昨日来て今日も来ました花の下
渾水も濁流もない我が人生
パソコンが俺を昔の人に作る

加東市 岩本 美緒子

おはようの暮らして暇も楽でない
グルコサミンと大正薬や娘の届け
早い目に弱味を見せる老いの知恵
足腰に嫌われ宥め貼りバック

川西市 日野岡 和之

生きのびてなおお手付かずの明日がある
過ぎ去れば悔し涙も温かい
さわやかな笑顔が空気丸くする
赤ちゃんも借金おんぶ予算案

川西市 岡嶋 洋子

嫁さんをナイスキャッチで五十年
さりげなくひとこと言って職なくす
溶けないで孫が来るまで雪だるま
赤い靴はいたあの頃全盛期

篠山市 永井 かほる
掘りたてのポテトサラダに満足す

主婦業は老いと戦いまだ続く
菜園の野菜の世話に無我夢中
七年ぶり友の退院春が来た

篠山市 沢山 啓子

引き抜いた十葉^{じくたみ}ほどの存在感

宇宙には住みたくないなア鎌を研ぐ

少しでもたれてみたい藤の棚

一行詩先輩の背は大きい

篠山市 谷田 多美子

古味噌の賞味期限をたずねられ

調味料の残りが並ぶ冷蔵庫

夕焼けもうれしたのしい金曜日

梅雨空に鶯の声老いました

三田市 尾崎 一子

後目継ぐひろい心があたたかい

減量がストレスとなりさっぱりや

金毘羅さん孫に引かれて登り切る

誕生日元気で暦無事通過

宝塚市 丸山 孔一

何してる人か昼間のフィットネス

居酒屋で笑った友も三回忌

生きてれば何か出来るさ生きてれば

吠えながら後ずさりする犬に似て

西宮市 株元 玲子
枯木にも花を咲かせたい老人力

効くと良いな脳活性のサプリメント

二人して一人前の仕事ぶり

成功へひた走ってる鈍行車

西宮市 吉井 菜々子

さようならワックスかけて廃車する

哀しみをリセットしたい北枕

花のいろ惜しんでなんかいられない

つまらない宇宙も君と一緒になら

三木市 山口 久子

メモの字がきれいねと娘にほめられる

満開の色々花の背くらべ

庭に出てエンピツにぎり五七五

自家植のいちご今年もジャムに化け

奈良市 尾畑 なを江

曖昧が大罪の芽を育成す

あちら向き猫の額で二輪草

生きている証抱きみ次々湧いてくる

年重ね益々冴える舌の先

奈良市 加門 萌子

いにしえの匠の技と心意気

友達に気づかされてる奈良の良さ

内憂外患日本は今や揺れている

ふと今も亡母に聞きたいことが有る

奈良市 矢野 良一

凹んだら陽気な友と縄のれん
窓少し開けて楽しむ雨の音
降る雨に濡れて色増す花菖蒲
風薫り薔薇も見頃の中之島

奈良市 前田 弘恵

二十年着られる服が誇りです
姑が小さく住んで恙無く
草食系男か女目を凝らす
父母逝きて家族の絆うすれいく

奈良県 谷川 憲司

すぐ替わる首相の椅子は落ち着かず
縄文人豊富なグルメ持っていた
フェルメールうつとりさせる光り満ち
駆け抜けて時代作った龍馬伝

奈良県 牧野 隆之

巻き戻し始発の駅に立っている
実体のなさを虚空がカバーする
うっかりと軽い口から出た本音
手前にはきつと吹いてる甘い風

和歌山市 磯部 義雄

しサイズ締め顔の試着室
ブーメラン機嫌損ねて戻らない
虫食いの産地直送だけを買う
営業の努力が実る靴の底

和歌山市 坂部 かずみ

動かすと踊り出ました捜し物
軒先に玉ネギ吊って梅雨に入る
晴れの間に約束果たす花と会う
食べ物のテレビばかりで太りだす

和歌山市 根田 よしこ

さあ田植え蛙ケロケロ応援歌
人並みに病んではじめて知った事
老母がいてありがたい時困る時
ありがたい老々介護できる今日

岩出市 村中 悦男

表彰状透かしてみれば妻が浮く
一枚の表彰状にある重み
忘れたと言っては笑顔返す年
寄る年と体よく役を引くつもり

田辺市 大峠 可動

日傘直立 炎天の原爆忌
八月や母もわたしも生れ月
現実と夢と陽気に生きてます
晩学は知能指数に聞いてから

橋本市 石田 隆彦

驚きの味覚テレビで笑味する
いい嘘と思えど後の不整脈
鼻の差のハズレ馬券を捨て切れぬ
子どもらと約束を待つ遊園地

和歌山県 森 下 よりこ

街に出て時々散らす加齢臭
びったりの服が苦しくなってきた
新内閣やつぱりちよつと期待する
急に来た今日の暑さに立ちくらみ

鳥取市 山口 千代子

花の命も人の花にも限りあり
葉桜の下に腰掛け思い更け
人の死も落葉と同じ自然なり
老いの身を庇い手を引く娘の姿

鳥取市 大前 安子

ポケットへ飴玉一つ気迫剤
一言の痛みウインク一つ来る
食べて寝る今日もテンポは崩れない
ジョギングヘテンポを合わす蛙の子

鳥取市 津村 律子

普天間をなあなあにしてなりません
老夫婦あなたと呼んでいい笑顔
手造りを紙塩くるむ友の笑み
頼りになる婆ちゃんですといい切れぬ

鳥取市 近藤 秋星

一寸先は闇政界のことらしい
総理になったら居眠りなどはしとれない
菅丸に乗り損なつて口をあけ
普天間はまだ解決はしていない

鳥取市 深澤 千恵子

怖いのは大人ではなく子供の目
同じ距離歩数ばかりが増えていく
割り切ったつもりが夢でぶり返す
やんわりと後ろから来る紙つぶて

倉吉市 藤井 美津恵

運動会走るとの子も同じ顔
運動会カメラを持って走る親
さわやかな風が緑の田を走る
紫陽花も水がほしいと下をむく

倉吉市 前田 喜美子

電話口親子まちがう変声期
つらかった事懐かしむ今生きて
衣がえ暑さ寒さが同居する
家の前通過していく救急車

境港市 中井 虎尾

隼は同名バイク集う駅(若桜鉄道集駅)
口喧嘩仲が良いから出来るのさ
石頭意志が強くてゆずらない
大器だと言われ成せず今七十

米子市 見山 温子

石橋を叩けばチャンス逃げていく
何事もチャンスは吉と決めている
隣近所トラブルのないいい暮らし
はつらつと番茶も出花咲き誇る

米子市 田村周子

石ころの中でもまれて独り立ち
るんるんと羽をのばして同窓会
欲のある内は生きて証拠です
探しもの無くしたいけどまたやつた

米子市 成田公一

お出かけの顔がなかなか決まらない
飾り物ではない妻が口を出す
折って吸い折っては吸って蟹を食う
太陽を七十周して古希となる

米子市 猪森スミエ

蟹食べて土産に蟹を買って行く
いい夢の続きを見たく二度寝する
鉢巻きの汗がうれしい優勝旗
クレヨンが画面から出た勇み足

米子市 小塩智加恵

育ち好い鳩山さんは丸い顔
正座出来百段位は登れます
小さいが福耳持つて生きている
雨が降る豆をゆつくり煮ています

米子市 加藤正二

歳だけは格差がつかずに老い拾う
ひとり者愚痴聞くだけで胃が痛む
リハビリを老いの日課に割り当る
老いひとり癒しの旅も寺めぐり

米子市 後藤宏之

今日の客騒々しいとホタル言い
長男の嫁とあじさい寺をいく
今年またたずねてみたい鮎の宿
お休みをとって今年も田植する

鳥取県 大塚美代子

いかなこの釘煮が初夏を連れて来る
政界のバランス崩す基地騒ぎ
おみくじを結び未来の運を待つ
花道を飾り主役の出番待つ

鳥取県 岩崎和子

ときめいて恋に恋した頃もある
スクラップ開きときめき思い出す
気が付けばまどろむ夫に陽のかげり
化粧して背なを伸ばしてまだ生きる

鳥取県 吉野いさお

女房が乙女座なんて信じない
尻に敷く妻が掴んだ勘所
腰低く世間の風を躲してる
六曜が心を縛る世辞世間

鳥取県 岡本幸枝

母の背で聴いた記憶の子守唄
瞳を閉じて今宵しみじみ酔う艶歌
繕って育ててくれた母手本
亡夫の声世間を広く渡れよと

鳥取県 下田 茂登子

正直で奥の手なんて知らぬまま

夫の留守私の出番やつと来た

あの世には行きたくないと駄駄こねる

あの世とこの世どっちが楽か返事待つ

鳥取県 田口 清帆

いたわりの心よせ合うフルムーン

老人の心の闇を照らす愛

菅政権紙面の動き日々新た

今日の日を大事にしようこの命

鳥取県 飯野 菖子

空間にひと鉢添えて春を待つ

待っていた春の光が肩たたたく

平凡に生きて幸福続いている

いらだつと今日の幸せ逃げて行く

鳥取県 加賀田 志延

御堂筋銀杏並木が深くなる

大阪の匂いが洩れる紙袋

ミンスカの足に見惚れて道迷う

大阪弁耳だけ染めて帰路につく

鳥取県 岡村 孝明

薬膳の料理百まで生きのびる

夢枕まつたけ山を亡父教え

のみ忘れ病の去った証かも

同じ種まいても同じ芽は出ない

鳥取県 西谷 悦子

しあわせの餌を求める蟻でいる

さまざまに生命の重み持つて生き

充実したところの旅をめざす日々

わたくしも波も寄せては返す性

鳥取県 橋谷 静江

招かざる客が居座る長話

庭いじり日課になった昼下がり

花言葉魅せられ作る花の数

花を見て暮す毎日忙しい

鳥取県 坂本 なつみ

大砂丘駱駝の背から日本海

パスポートで関所を越えてお国入り

大学の関所も夢を抱いて越え

ニューフェイスホルモン焼きで盛り上がり

松江市 松浦 登志子

月末に平気装う空財布

山頂は遠く眺めるものとなり

ストレート投げあう夫婦絶えぬ傷

お見舞のメロンの網目辿つて

松江市 山根 邦代

思いやりハガキに込めた筆のあと

足腰のトラブル友も抱いていた

ふるさとは時間ゆっくり流れてる

ふるさとの美味しい空気腰のばす

松江市 柏井 日出子

天に地に川ありロマン来る予感
エコシユーズ低い山へと誘う夏
まれに見る美人びんずる嬉しそう
多数決国会あたりですることよ

松江市 相見 柳歩

なんてまた何を根拠に五月末
お茶の葉をこぼして集めまたこぼす
極端に曲がったへそがおとなしい
本当に近くに寄った時に来た

松江市 錦織 禮子

ガーデンのバラの香りを持ち帰る
背くらべ伸びない兄を気にしてる
傍らにきみまろの本置いてある
眠りたいだけと介護の手を休め

雲南市 福岡 博利

動かない足をたたいて五割引
もの忘れ自慢し合つて二人連れ
痛いところ今日はどこかと妻が言う
四時が来る黄門さんが待っている

雲南市 武島 ちよえ

軟らかな言葉で刺を包み込み
ぞんざいな口で励ますのも友か
気がかりを一つこなしてまたひとつ
山緑色が足りない絵の具皿

雲南市 渡部 好榮

気にしないぶうらりぶらりへチマ揺れ
口車に乗ったり降りたり今日も暮れ
市になって何が変わるか里の秋
嵐にも負けるな今日の青い鳥

安来市 原 煩惱児

それとなく急所を突いた孫の槍
医者任せされど傷みは独り堪え
おお生きていたかよ句会出てみれば
横着でメタボになった杜寺の鳩

美作市 小林 妻子

何事も無かつたような桜島
七月七日僕の復員記念日だ
亡母に似ているのか鮎をしゃぶるくせ
甘党の亡母も九十四だった

竹原市 土井 輝恵

献立のこだわり店を梯子する
何もない日はいい日です風が言う
横断の勇気が仇のろま亀
自問自答私に出来る役がある

竹原市 六田 半徳

アジサイが蕾そろえて待っている
昼寝してピンチ脱した夢を見る
国民の納得出来る政治待つ
脳のリハ健康マージャン始めます

宇部市 高山 清子

平凡という幸せの薄化粧

咳一ツして核心にふれていく

真実を知らぬ雀が良く喋る

飲み込んだ言葉が喉につっかかり

香南市 近藤 功

いつからが余生か知らず鋏を振る

軽トラの夫婦たい焼き食べてます

元気です一人通院しています

父の日へ母はほんのりうす化粧

福岡県 林 さだき

言い返す言葉を風呂で思いつく

さようなら我が青春の下宿先

お荷物になりたくはないストレッチ

トンネルを抜け本物の空を見る

唐津市 北村 松風

風見鶏風の流れにさからわず

大正の綻びだした知恵袋

広告の白紙に予定大書する

親父から小遣い貰う五十歳

唐津市 吉富 節子

日々老化体の悲鳴聞いてます

天引をした妻がいて今がある

トラの子も不況の波にさらわれる

夫火種わたし我慢の消防士

唐津市 岩崎 實

ゆっくりと歩いてわかることもある

むくわれず苦の連続を背負い生き

次々と手を打ち支援おこたらず

その頃もそうであつた間に合わせ

シドニー 三谷 たん吉

いつやめて誰に代ると興味なし

お前等に期待もしない頼らない

イヤならばガタガタ言わず引越しな

世話やける自分を自分でどなりつけ

吹田市制施行70周年記念

☆文化祭吹田市民川柳大会☆

夏休みに親子で川柳を作りましょう

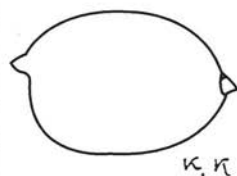
日時 平成22年9月26日(日) 午前11時開場
各題 2句連記 投句締切り 12時15分
場所 吹田市文化会館 メイシアター 3階
レセプションホール
梅田から北千里行で約15分(阪急吹田駅西口前)
宿題 「峰」 野 健 吾 選
「連想吟」 Q 中 辻 天 池 谷 垣 美 和 子 呈
「紙」 根 夢 草 子 郎 選
「かけら」 森 郁 郎 選
「長い」 池 谷 垣 美 和 子 選
「欲」 西 美 和 子 選
会費 1,500円(秀句賞 参加賞 軽食 呈)
(夏休みの親子川柳募集について)
「夏休みに親子で川柳を作りましょう」キャンペーン
宿題 「花 火」・「習 う」・「腹」
一枚のハガキに子どもの部・大人の部として9句まで
お出し下さい。〒番号・住所・氏名・年齢・電話明記、
下記事務所へ(8月30日消印有効)
入賞発表 秀句賞・佳作賞……賞状・記念品授与
懇親会 希望者は9月15日迄に下記事務所へお申し込み
下さい。会費3,000円当日払い。(当日申し込みは御遠
慮下さいませ)
吹田川柳会事務局 〒565-0862 吹田市津雲台3-4 A22-704
中川 隆充 電話/FAX (06) 6833-0744
主催 吹田市教育委員会・吹田市文化団体協議会・吹田川柳会

共選欄

檸檬抄

(薫風書、カットとも)

(投句 七六八句)



「痛い」 三宅保州選

消費税上げると知らず入れた票
痛み止めのつもり国債刷ってます
痛み分け分からぬ人が決めている
温暖化進み地球の偏頭痛
八月の空から痛みおちてくる
一点をリードしてから胃が痛む
青春の確かな痛みビートルズ
膝痛み出したら明日は雨になる
腹痛は昨夜内緒で食べたフグ
チチンブイぐらいじゃ効かぬこの痛み
こけた児がママの顔見てワッと泣く
痛くても泣くに泣けない眼の手術
つねつたら痛い私は生きている
古傷が痛む男の豪遊記
海亀も涙流して産んでいる

和歌山市 福本 英子
豊中市 江見 見清
大阪狭山市 矢野 梓
和歌山市 武本 碧
富田林市 中井 アキ
箕面市 寺井 柳重
篠山市 沢山 啓子
豊中市 松尾美智代
尼崎市 藤井 宏造
堺市 羽田野洋介
唐津市 坂本 蜂朗
東京都 岸野あやめ
大洲市 中居 善信
紀の川市 北山 絹子
西宮市 牧渕富喜子

「痛い」 高田美代子選

八月を捲れば蘇る疼き
十二月八日の傷が未だ痛い
心地好い痛みもあった古い恋
失恋の痛みは全治三ヶ月
昔むかし振った尻尾が痛くなり
まだ惚けてないぞ抓られたら痛い
親友が上司になった日の現
虐待の子へ陣痛を忘れたか
陣痛を忘れた頃に三人目
陣痛も忘れ年子となる悪阻
傷よりも深い所にある痛み
痛み消えやさしい顔のデスマスク
痛い目に何度もあつて脱皮する
聞き役の位置でチクリと父の棘
痛い目に遭つて軽はずみに気付く

大阪府 小泉ひさ乃
香南市 近森 功
西宮市 藤本 直
吹田市故穴吹 尚士
鳥取市 倉益 一瑠
香南市 桑名 孝雄
日高市 根岸 方子
紀の川市 宇野 幹子
京都市 三宅 満子
高知市 小川てるみ
宇部市 高山 清子
堺市 西村りつえ
河内長野市 山岡富美子
大和郡山形市 坊農 柳弘
西予市 黒田 茂代

陣痛を忘れた頃に三人目
虐待の子へ陣痛を忘れたか
都合よく腰痛出せる歳になり
とりあえず置き薬のむ痛み止め
朝が来るやはり痛みも目をさます
痛い痛い今日はほんまに痛いんや
たわいないジョーク痛みへ思いやり
育てよう人の痛みが解る子に
傷よりも深い所にある痛み
逆剥けが時々できて父母想う
子を撲った右手冷凍保存する
好きな事してる間は痛くない
痛いほど解るが腰は引けている
疼痛の極み人格など捨てて
鉛筆が折れる痛みを知っている
痛い時痛いと言える人が居る
痛い目にあつた事だけ覚えてる
痛い目に遭つて直つた悪い癖
痛い目に何度もあつて脱皮する
昔むかし振つた尻尾が痛くなり
分けられるほどの痛みはしれている
明日があるあしたがあると抱く痛み

京都市 三宅 満子
紀の川市 宇野 幹子
三田市 北野 哲男
米子市 白根 ふみ
米子市 政岡未延子
堺市 柿花 和夫
鳥取県 斉尾くにこ
東大阪市 佐々木満作
宇部市 高山 清子
大阪市 森田 明子
弘前市 高瀬 霜石
大山市 金子美千代
和歌山市 磯部 義雄
八王子市 播本 充子
和歌山市 古久保和子
鳥取県 佐伯 やえ
大阪市 古今堂蕉子
羽曳野市 永田 章司
大阪市 萩原 大朔
河内長野市 山岡富美子
鳥取市 倉益 一瑠
堺市 志田 千代
八尾市 宮西 弥生

痛いところズバリと突いてくる味方
言い勝つて胸の痛みを倍にする
父さんの拳固を知らぬ子が荒れる
三日前打つたところが痛みだす
痛いところ背負い貫く自分流
転ぶなら痛くないよう気をつける
痛いゾーと注射の針がこつち向く
必着稿切手不足で舞い戻り
耳の痛い話ばかりで肩がこる
やる事が全て裏目に出る頭痛
痛みなどこくんと飲めば過去になる
悪人になれず群れからパンチ受け
アンケートあちこち痛いところに丸
飽食で他人の痛み気付かない
腹痛は昨夜内緒で食べたフグ
ばてばてのゴロトンネルをしてしまふ
外野席野次は本音を突いてくる
切り口が痛むギザギザのハート
にこにこ急所を突いた孫の槍
痛痒いスネです孫にかじられる
つらい事噛みしめた歯が疼きだす
錆びついてとても痛かつたであろう
痛い目に遭つて大人になつていく

西宮市 泉水 呀子
和歌山市 堀 富美子
大阪府 神野千恵子
米子市 成田 公一
藤井寺市 俣野登志子
藤井寺市 鴨谷瑠美子
藤井寺市 津田シルク
鳥取市 池澤 大鯨
阪南市 山本 柳昌
橋本市 石田 隆彦
西脇市 七反田順子
松江市 柏井日出子
泉佐野市 稲葉 洋
三田市 久保田千代
尼崎市 藤井 宏造
海南市 小谷 小雪
三田市 堀 正和
出雲市 伊藤 玲子
安来市 原 煩悩児
羽曳野市 吉村久仁雄
鳥取市 有沢せつ子
米子市 白根 ふみ
大阪市 萩原 大朔

触れないで欲しい所へ塩をぬる

天井に痛いところを語りあい

頬抓る幸せ一度してみた

バイキングにあちこち痛いのを忘れ

痛み消えやさしい顔のデスマスク

痛まない病魔に命ゆさぶられ

優しさは心の痛み知ってから

しおらしくなった痛みを知ってから

本当は君の優しさと痛いんだ

優しさに触れて痛みがぶり返す

痛いから優しいことは掛けないで

刺はまだ威張ったままで喉の奥

痛いことわかる間は娑婆世界

薔薇の棘加減乗除を推し測り

逆鱗に触れて尻尾が飛んで来る

瘡蓋を剥いで真皮に触れにくる

切り口が痛むギザギザのハート

痛い目に遭うまで分らないばんち

群羊の痛みが朝の駅にあり

秀句

痛いとも言えぬキャベツを切り刻む

痛いとは言わぬ地球を掘り返す

風評が小耳に痛い寒晒し

河内長野市 木見谷孝代

米子市 山本ふみ子

京都市 坪井 孝一

吹田市故 穴吹 尚士

堺市 西村りつえ

札幌市 小沢 淳

大阪市 小谷 集一

芦屋市 黒田 能子

池田市 上山 堅坊

米子市 吉田 陽子

橿原市 安土 理恵

高槻市 富田 美義

大阪市 岩崎 公誠

生駒市 飛永ふりこ

海南市 小谷 小雪

香芝市 大内 朝子

出雲市 伊藤 玲子

高知市 小川てるみ

美祿市 安平次弘道

倉吉市 松本よしえ

尼崎市 藤岡 りこ

鳥取県 鈴木 一弘

痛いところ突かれ風船はり裂ける

痛いところ同じで長い立ち話

優しさに触れて痛みがぶり返す

痛いから優しいことは掛けないで

痛いとこ無くて話に加われず

赤飯で祝われ左遷地へ向かう

腰痛が治り強気になる夫

そりゃそうや生きているから痛いんや

明日があるあしたがあると抱く痛み

跳び越えるつもりで腰を打つ

日が沈む今日の痛さは持ち越さぬ

温暖化進み地球の偏頭痛

許されて心の疵が疼き出す

出合いがしら尻餅ついたのは私

風に飛ばされた一枚の万札

大臣の軽い言葉が化膿した

魂がはり裂けそうなほどつらい

ホスピスの母はやさしい顔になる

薔薇を抱く棘の痛さは覚悟して

秀句

疼痛の極み人格など捨てて

父親の拳固痛くて温かった

次から次へ痛いところ痒いところ

大阪市 伏見 雅明

大阪市 升成 好

米子市 吉田 陽子

橿原市 安土 理恵

堺市 近藤 治子

堺市 荻野 像山

藤井寺市 吉田喜代子

西宮市 緒方美津子

八尾市 宮西 弥生

松江市 三島 淑丘

米子市 高田 振作

和歌山市 武本 碧

弘前市 高橋 岳水

大阪市 平嶋美智子

鳥取市 夏目 一粹

唐津市 仁部 四郎

藤井寺市 太田扶美代

大和高田市 鍛原 千里

鳥取県 石谷美恵子

八王子市 播本 充子

宇都市 平田 実男

大田市 中居 善信

麻生路郎句抄

(句集『旅人とその後の作品』から)

不死鳥

水の垢

苦樂園 仲居同士で髪を結び

靴下を投げ出し 誰も来なんだか

襯衣一枚 出来ぬくらしを続けて来

慰めてやうやう箸を取らすなり

嘘にしておけと障子をびしゃり閉め

月末の金さへ渡しや 出であるき

これだけを持って帰れと云われて居

稼がねばなどと三十七八九

近道にされてる敷地 売りに出し

すすめられ女毛布の端に乗り

もういらぬやうに釣瓶は投げおろし

落籍されて心にもない字の稽古

兄らしいところは年回知らして来

古い値をいふて年寄値切るなり

今見ればこれっぱかしの畑にて

仰山に鱗を飛ばす誕生日

下宿したところは屋根からよく訪ね

大阪へ来て屋根ばかり見てゐます

借金があるとは見へぬ石畳

これ位にしとけと思ふ居候

金ためてどうする気かと縁の端(木偏の縁)

借りる気で行けば有馬の夏と聞く

電車賃もないとは無心哀れなり

不孝者喜劇役者とまではなり

愛染帖

新家 完司 選

神ぞ知るらしいが神は大キライ
シドニー 坂上のり子

(評) なんとまあ、大胆不敵な言葉ーだが、
たしかに、平穩無事をもたらすどころか、戦
争の元凶になる胡散臭い神々ばかりである。

息子との段差を埋めるタイガース
枚方市 伊達 郁夫

(評) 「タイガース勝つとるぞー」「えつ、ほ
んま、めずらしい！」日頃は敬遠がちな息子
と打ち解けられるのも、タイガースのおかげ。

そっくりな孫を叩けるわけがない
橿原市 安土 理恵

(評) 欠点も長所もそっくり受け継いでい
る孫。DNAの根つ子にいる自分を棚に上げ
て、孫だけを叩くなんて、あまりにも理不尽。

自転車に乗ってやると孫が言う
堺市 大隅 克博

(評) 嬉しいことである。乗ってやったこ
とを覚えているのだ。思い遣りのある子に育
った孫の自転車は、どんな高級車より爽やか。

悪友は未だに脂ぎっている
鳥取市 土橋はるお

(評) 古稀を過ぎてゐるのに、話す内容は
銭金や色恋など生臭いことばかり。暑苦しい
が生命力に満ちた奴。血圧は大丈夫か？

柵が離してくれぬ現在地
和歌山市 牛尾 緑良

(評) 煩わしく思うこともあるシガラミだが、
そのお陰で地道に暮らせているのかもしれない。
シガラミを断ち切ると根無し草になる。

自由には寂寥感がついてくる
藤井寺市 太田扶美代

(評) たとえば、誰からの束縛も受けない
気ままな一人旅とか、みんな外出した我が家。
ラクチンではあるが、ちよっぴり寂しい。

古き良き昭和が残る立ち飲み屋
河内長野市 松岡 篤

(評) 立ち飲み屋の魅力は、安くて気楽で、
軽く飲んでサッと帰れるところ。そして、煤
けたノスタルジックな雰囲気がある。

鉛筆を舐めても知恵はもう出ない
和歌山市 古久保和子

(評) 泉のように湧き出ていたネタも最近
はサッパリ。「これは詠った」「これはどこか
で見た」と、ペテランになると苦吟の連続。

幸せな蜜はリズムよく光る
京都市 都倉 求芽

(評) 不思議な事象に満ちている自然界。生

き物たちの営みに目を凝らし、己が想いを重
ねることによって、川柳の素材は無限になる。

八尾市 中島 春江

心臓手術の弁膜入れるとは
父の日のせめての想いお仏飯
父の日の息子もなくなつたもなし

堺市 村上 玄也

よたよたと今年の春がやって来た
青信号安全だとは限らない
認知症テストをされる免許証

鳥取市 有沢せつ子

試飲してリップサービスして帰る
近道へ信号無視をたまにする
ゆつくりとローンの残は減っていく

三田市 堀 正和

新聞は読まぬ血圧高い朝
まずビール買出しに行く年金日
靴底の泥を落としてから眠る

和歌山市 木本 朱夏

不意打ちに椎間板へ来た刺客
宇都宮 平田 実男

よく眠る孫が大物かも知れぬ
御破算に願いますのは妻の愚痴
寝る時になつて気になる足の爪

堺市 矢倉 五月

絵に描いた餅より食べる餅が好き
八尾市 前田 紀雄

大阪市 津村志華子
焼鳥の雀よ何処で捕まった

弘前市 高瀬 霜石
足の爪切るのに邪魔な肉がある

鳥取県 斉尾くにこ
バカバカとあの日の自分ぶんなぐる

札幌市 三浦 強一
花の下おひとりさまの缶ビール

大阪府 米澤 俣子
肝臓くん週休二日して元気

吹田市 故穴吹 尚士
よく伸びる爪だまだまだ若いんだ

魚偏の仲間になっている鮑
もう酒を飲んでええよと陽が沈む

食欲にたすき掛けしてバイキング
大阪市 谷口 義

改心をしたというても知れている
吊橋を渡るところは行きません

海田市 三宅 保州
暇なとき読んでほしいと言う句集

翔んでみたはずがバートで皿洗い
京都市 高島 啓子

居なければ淋しいおしゃべりな雀
すぐ出せるところに置いてある枕

三田市 北野 哲男
古傷をつついて弾むクラス会

自分史に光のページ負のページ

弘前市 福士 慕情
パトカーが車の列を従える

栃木県 岡野すみれ
検診をこばみつけてまだ元気

唐津市 仁部 四郎
昇進の子へ乾杯の電話口

倉吉市 松本よしえ
まむし酒開いただけでも身が凍む

立ち退きの家が三日で壊された
大阪府 坂 裕之

情を知るきつかけくれた癌切除
味噌汁に葱たつぷりと入れて朝

堺市 宮本かりん
おはようの声は機嫌のバロメーター

片方の耳は本音を聞いている
枚方市 寺川 弘一

ひからびぬよう晩酌はやめません
老人になっても好きなラブソング

香芝市 大内 朝子
日日感謝なんだか浄土近くなり

モロツコの蛸もおんなじ顔してる
鳥取県 山下 節子

宴会に音痴は音痴なりの歌
さまざまのまさかの度に鍛えられ

河内長野市 村上 直樹
地場野菜の匂追いかけて道の駅

無理なこといずれ頼むぞ介護ロボ

海田市 小谷 小雪
正面に酒を供えて父偲ぶ

紀の川市 辻内 次根
乾杯はしない静かに飲むお酒

米子市 後藤美恵子
油断すると金に心が盗まれる

三田市 上垣キヨミ
主治医への恋は退院する日まで

代引きで土産が届く孫の旅
西宮市 藤本 直

冗談を切り札にして嘘を吐き
野地蔵がのつぱらほうで濡れていた

寝屋川市 籠島 恵子
しあわせは曖昧模糊とするととき

プラス思考の一日だった良しとする
堺市 奥 時雄

マンネリに気付かぬふりをし続ける
マンネリも指摘されると気に障る

西宮市 泉水 牙子
滑り込みセーフで半額の刺身

岩塩が資産になっていた太古
鳥取市 土橋 螢

さくら花なにを叫んで散つてゆく
ひらめきを仕分けしているボールペン

河内長野市 針生 和代
山程の文句夫婦の五十年

孫の数だけうれしさあった春四月

京都府 松本としこ

どの薬効しているのか仕分けする
狂わないために忘れてゆくのです

尼崎市 春城 年代

人並にわたしの膝も笑い出す
本棚に整理をこばむ本がある

明石市 桃谷 和郎

粘る人だけが授かる徳俵
本日は雨天と聞いて二度寝する

鳥取県 石谷美恵子

喧嘩中なのにうっかり返事した
門限の関所を破る孫の恋

西宮市 片山 忠

鯨肉を食べぬ哲学だつてある

篠山市 酒井 真由

吊り橋を渡る五月の風連れて

弘前市 高橋 岳水

逆立ちの出来る男に職がない

八尾市 高杉 千歩

還暦の息子へ迷うブレゼント

米子市 加藤 正二

口蹄疫殺す知恵では情けない

八王子市 播本 充子

お月謝を払い余談を聴いている

堺市 羽田野洋介

取り巻かれ世間が見えぬお偉方

尼崎市 長浜 美龍

最高齢なにを言ってもフリーパス

響き合うこころ着信音が鳴る

松江市 津川 紫晃

亡き夫の欠点こそがなつかしい

岸和田市 森元ふみよ

じゃがいもを掘るとにわかにはとぎす

浜松市 岡田 史郎

頭から足の先まで酔う花見

和歌山市 玉置 当代

満腹になると世の中丸く見え

大阪市 岩崎 公誠

高知から熱気が届く龍馬伝

東京都 清原 悦子

体温計昔三分今五秒

堺市 澤井 敏治

あじさいの咲く街角で他人の計

紀の川市 宇野 幹子

最後にはシンバル鳴らし黙らせる

奈良市 岩本 浩二

意中の人まだ置いてある胸の隅

豊中市 松尾美智代

ヌートリアわが里すでに支配下に

鳥取市 池澤 大鯨

遺跡から大和の国を垣間見る

岸和田市 中岡 香代

生産者名札の付いた野菜買う

岸和田市 井伊 東吉

ご同伴の招待状はもうこない

堺市 志田 千代

早い目の準備出掛けはバタバタと

芦屋市 黒田 能子

天下りここにもいたか宝籤

大阪市 田浦 實

手枕の夫へそっと毛布など

鳥取県 平木 公子

根気よく口説いてゲットした妻だ

藤井寺市 鈴木いさお

今やった喧嘩忘れて青菜摘み

河内長野市 谷 久美子

富士山の裾野はあわれ基地ばかり

大阪市 近藤 正

クラス会道化になって盛り上げる

倉敷市 撰 喜子

外は闇家の灯が光り増す

羽曳野市 徳山みつこ

割らないでくれバーボンはストリート

米子市 成田 公一

五臓六腑何と何やと指を折り

豊中市 安藤寿美子

紫陽花が蕾をつけてくれません

大阪市 井丸 昌紀

友の距離本音ぶつけりやよく見える

大阪市 岩崎 玲子

ケータイが人を追っかけ捕まえる

鳥取県 竹信 照彦

苦心談一回ことに輪がかかり

東京都 岸野あやめ

最強の敵は己の頼りなさ

八尾市

吉村 一風

ふるさととは飾らぬ言葉しゃべるとこ

大阪市

古今堂蕉子

毎日が生きた長さの自己記録

豊中市

水野 黒兎

ゆつくりと食べてゆつくりしまい風呂

寝屋川市

森 茜

友達が悪いと親はすぐに言う

大阪市

奥村 五月

きつちりが口癖ですかみずほさん

和歌山県

森下よりこ

居眠りも遅刻も許す議員席

豊橋市

藤田 千休

たまに来るまさかは神の一喝か

鳥取市

倉益 一瑤

上客の軽いジョークで座が和む

高槻市

初代 正彦

百均の品をポイポイ使い捨て

寝屋川市

平松かすみ

乾杯のグラス持たされ十五分

唐津市

樋口 輝夫

ミイラより生きてる人がこわくなる

大阪市

笠嶋 惠美

混んでいる医者で安心する患者

枚方市

海老池 洋

嬉しい日信号までも青続く

高槻市

安田 忠子

花束がくくられている交差点

枚方市

丹後屋 肇

後始末思うと皿も投げられぬ

東かがわ市

川崎ひかり

脱ぎやすい服がうれしい五十肩

奈良市

辻内けんえい

順調にいつているから気にかかる

鳥取県

加賀田志延

手習いに始めた趣味がこびりつく

尼崎市

市坪 武臣

それなりに守備を守って元気良い

大阪府

小栢こずえ

追伸に忘れないでとキスマーク

大和郡山

坊農 柳弘

自分の手に戻らぬ保険かけつけ

大阪市

小泉ひと乃

金ができ心の痛み忘れ去る

大阪市

萩原 大朔

洗濯も掃除もサボるたまの雨

加西市

金川 宣子

老いて子に従いたい傍に居ぬ

鳥取市

中宇地秀四

箸を付けて蜜蜂飛んで来た

奈良市

尾畑なを江

今日一日さびずしばます生きてみる

香南市

桑名 孝雄

老木もつつかい棒にささえられ

鳥取県

大塚美代子

酔っている部下の本音を記憶する

和歌山県

磯部 義雄

残り時間見つめ金婚二人旅

唐津市

井上 勝視

松根油取って戦をした昔

東かがわ市

木村あきら

標本のようにヤモリが腹を見せ

箕面市

広島 巴子

女房に下駄を預けて濡れ落ち葉

河内長野市

山室 光弘

古傷を癒やす絵筆を買いに出る

鳥取県

佐伯 やえ

孫メール受けてパワーがはじけたす

枚方市

二宮 山久

わたくしに媚売ってくるサクランボ

西予市

黒田 茂代

大仏さん合成写真許されよ

大阪市

津守 柳伸

ブラウスに去年の皺がついている

大阪府

高木 道子

古代史にはまって今日が頼りない

河内長野市

梶原 弘光

黙々と夫の掃除ありがと

三田市

石原 歳子

遊びにもけじめをつけた定年日

高槻市

片山かずお

花上げてお地蔵さんとする会話

藤井寺市

若松 雅枝

誹風柳多留——一篇研究 60

小栗清吾・伊吹和男

山田昭夫・増田忠彦

山口由昭

清 博 美

454 今以行かもところか角田川

小栗 隅田川べりで、吉原へ行こうか、それとも家に戻ろうかと相談している光景かと思うが、「今以て」がわからない。

「日国」で「今以て」を引くと「今になるまで。今でも。いまだに」とある。これを「もう隅田川まで来たのに、いまだにグズグズと決めかねている」という光景とすれば、面白くも何ともないが、ひとまず意味は通じるので、それでよいのかも知れない。

ただ、「昔も隅田川で行こうか戻ろうかと思案した故事があるけれども、今日でも同じようなことをしている輩がいる」、あるいは「昔から『行こうか戻ろうか』という有名な文句

があるのだが、今でも隅田川べりでそんな文句のようなことをやっている輩がいる」と取れないこともない。その方が面白いとは思いますが、残念ながらそれに相応しい事例を思い浮かべられない。

なお、「行こうか戻ろうか」は文句取りくさい。語調からして俗謡・民謡の類ではないかと思うが、探し当てられたのは、『潮来音頭』の「此処は前川 十二の橋よ行こうか戻ろうか 思案橋シヨンガイ」のみ。これがこの句の時代に有名であったかどうかはわからない。

伊吹 今もつて気ちかひの来る角田川 拾一 44
のような図式になればいいのでしょうか、
今以八朔きやくをなやませる 安五松 2

山田 文句取もありそうです、前半説に賛。
の場合もありますので、前半説に賛。

いのでは？

山口 今もつては何かを連想していますが不

明。

清 礎賛。

455 大門だ泣くとしばるとせげんいひ

伊吹 貧農などの娘を駕籠に乗せて、吉原は
大門口まで連れてきた女衞。客商売の吉原に
おいて、娘が泣いているのを見られては具合
が悪いので、泣き止まなければ縛ると女衞が
娘を威している。

おしろいが泣くとへけるとせげんいひ

二二 29

小栗 賛。事実上縛っているのに、今更。

清 賛。

吠えるなら吠えろと女衞を引くなり

明四松 3

456 出るそうてわつわと泣くと御用いひ

伊吹 あの家は夫婦喧嘩をして実家へ帰
るそうて大声で泣き叫んでいる、とその地域
の情報通の御用が言っている。例句はそれほ
ど気の弱くない嫁。

あのか、あしやうねが有ると御用いひ

清 賛。

八 27

457 金シ氣でもござればかすとむこくする

伊吹 何か金目のモノでもありましたら、それを売り払ってお貸しするのですがと言訳を言つて借金を断る、まるで貸す氣のない惨い扱いをするヤツ。

かさぬ奴種々物入りをいひたてる 一五 27
しわひやつなんそといふと時分から

拾一〇 11

山田 賛。しかし、金氣には金そのものを含みますから「それを売り払つて」は不要かと思ひます。

増田 賛。錢金はもちろんご用立するような質種もない、とするか。

小栗 賛。要するに多少なりとも金にかかわる物は一切ないということ。

清 賛。

458 門すゝみ下女わりい事しなさんな

伊吹 浴衣姿が色づく感ずるのか、悪さを仕掛ける男がいるので、夕涼みをしている下女が叱っている。

あれさよしねへなと下女の門すゞみ

安四板 4

小栗 賛。といいながら、満更でもないのであらう。

清 同。

459 困ふのをにくまんの兄いけんする

伊吹 女犯を禁じられた僧が妾を囲っているで、仏に仕える僧侶としてあるまじき行為だと、その実兄が意見をしている。

囲れてともに地こくへ落るなり 明七義 4

小栗 賛。ではあるが、なぜ「肉縁」などという言葉を使つたものか。

清 賛。仏語仕立てにしたか。

460 うたかひの深さ手引にくしをみせ

伊吹 盲目の瞽女が小間物屋から櫛を買っている図。

お値打品だと勧められても、猜疑心の強い瞽女はお付きの手引にそれを見せ、本当にそのようなか確かめさせている。

小間ものやごせによはれてこりはてる

天一信 1

清 賛。

461 ひめち迄たき火のうつるお目出たさ

伊吹 江戸城での正月三日のお謡初めの句。その夜は大手門と桜田門の両門に篝火が赤々と焚かれ、大手門の向いの播磨姫路藩酒井雅楽頭忠顯十五万石のお屋敷の堀にその火影が映っている、誠におめでたいお謡初めの日である。

目出度サハ酒中へうつる御かゞり

安八宮 1

大そうなむだつ火をたく御吉例 安六松 1

山口 賛。下馬將軍の屋敷。

清 賛。

462 いけもりの酢の無イをくふ内氣もの

伊吹 生盛は、大根や人参などを細かく刻んで、細く削いだ魚や鳥の肉を添えて盛り、酢で味付けした料理。たまたま味付けの酢が掛かってなくても、そのことを言い出せずに黙って食べている、引つ込みがちな性格の人物。例句はまったく反対の状況。

生ヶ盛りをむこくかつこむ座頭の坊

明三仁 3

清 賛。

貢 ぐ

福士 慕情選



ボランテア愛一筋に貢ぐ道
潤んだ目見れば男ちよろいもの
貢ぎ物次第で役を振り分ける
お歳暮が届いて順位書き直す
大学を出るまで貢ぎ職がない
夢でいい美女に貢がせワッハッハ
それごらん君も年貢の納めどき
さんざんに貢いだ蝶の気が変わる
記憶力貢いだ後は脱け殻だ
褒められてあつからかんになる財布
父上さま母上様に貢ぐもの
貢いだ息子ニートの城を出たがらぬ
ずつとずつと貢ぎたい母である
家元が上納金で仕分けする
蜂に蜜貢き受粉をさせる花
身をけずり税金貢ぐ愛煙家
貢いでた相手はきつと鬼だろう
貢きものはさんで揺れる下心
踏まれてもお盆暮れの付け届け
付け届けて神の手へ命乞い
募集中ですイケメンのミツグ君
基地提供割りの合わない貢き物

貢ぎ物殺し文句が添えてある
アッシーもバシリもやって報われず
騙されてだまされてまだ目が醒めぬ
貢がねは捨てられそうでもまた貢ぐ
貢がれて貢いで恋は贅気楼
草食系 母性本能揺さぶられ
婚活へ貢がれた品整理する
請求書だけが残った片想い
菓子箱が法の網目をかいくぐる
貢ぐだけ貢がせあとはグッドバイ
フェロモンを浴びて虎の子まで取られ
生きていることで誰かに貢いでる
爽やかに貢ぐ百万本のバラ
幸福の花咲く種を貢がれる
プロポーズ野性にもある貢き物

正 雄 玄 子 茶 信 善 弘 柳 歩 千 野 遠 弘 一 知 倫 子 一 花 伊 津 志 充 子 一 風 哲 男 淳 かずお 富 子 霜 石 裕 花 朝 子 婦 美 子 天 臥 妻 へ せ め て リ ン ゴ の 皮 を 剥 く 高 橋 岳 水 貢 い で も ソ ッ ポ 向 い て る 百 合 の 花

割 引

堀 正和選



公約を割引いて聞く選挙戦
赤札を貼る頃スパー混んでる
特売のひとつ限りに父出番
夕食は割引シールで決めている
タイムサービスのコロッケ夫も買ってきた
割引の値札に引かれ後もどり
平日の利益疑う五割引
無駄の利益量が減っている
無駄を買い割引額に届かせる
引出しに割引券の期限切れ
割引券使いたい時店は無し
値切ったら帰ってくれと怒鳴られる
人を見て割引をする好かん店
割引に踊らされない年となり
日本には未だあるのかなたき売り
学割で食べた素うどんなんかしい
割引いて欲しい床屋へ薄い髪
割引いてくれたら怪しむ悪いくせ
割引のしすぎ産地が怪しまれ
葬儀屋と医者価値切ったことがない
骨董品言い値通りに買う不思議
割引いてそつと渡した髪斗袋

梓 奮 水 裕 之 好 文 美 紗 子 克 博 照 彦 黒 兎 千 代 子 美 義 玄 也 満 子 舞 夢 の り 子 公 誠 美 千 代 二 英 時 雄 孝 一 輝 夫

割引は昨日までだとレジ係

写真より三割引にしている見合い

割引引かなあかん仲人褒め過ぎる

割引いて報告を聞く子の帰省

割引いて聞いております娘ののろけ

冷房を割引きエコのおしゃれする

バーゲンに無駄を詰め込むエコバッグ

バツイチが三割引で売れました

定年後私の値打ち五割引

私もそろそろ値引される頃

わたしまだ値引きするほど古くない

愛情は割引かないで倦怠期

年齢は一割引にしておこう

半分に聞いたら領ける話

割引いて見ても恐い北の国

佳

阿呆らしやおなじものが五割引き

割引いてその上端数引かされる

閉店の叩き売りだともう三月

割引きになるまで待とうホトトギス

割引になるまで待つて売り切れる

安売りで買ったと自慢するなにわ

割引はしないがお世辞添えて売る

地

天

苦勞話割引せずに聞いてやる

軸

？う半値八掛一割引

テンポ

山口 高明選



親だからスローペースに耐えている

デジタルのテンポへ足をすくわれる

キャスターの早口半分聞き取れず

テンポよく進む話に湧く疑問

スローライフ世間のテンポ気にしない

不規則なテンポに慣れた好奇心

終章のテンポコンダクターは妻

テンポよく来たのに魔女が狂わせる

通常のテンポで読めぬ永田町

ブンチャツチャテンポに合せンチャツチャ

少しずつ二人のテンポずれてゆく

会話のテンポは遅いが手は早い

手に唾をつけてテンポを繰り上げる

二世帯のテンポそろえる孫の声

ワンテンポずれても馬の合う夫婦

さすがプロテレビ料理のコックさん

交代のテンポが早い総理の座

生き残り必死のテンポ町工場

発車ベル時間どおりに動きたす

愛してる方が合わせているテンポ

コンチキチン抵園はやしで夏が明け

セールのテンポに乗って無駄を買い

充子

富子

五月

かずお

玄也

一粋

くにこ

修

正雄

活恵

裕花

俣子

螢

玲子

菜摘

あやめ

哲男

公誠

雅美

蜂朗

弘風

毅

テンポ良く患者を捌く流行る医者

あいの手がテンポ盛り上げ阿波踊り

じわじわと弱みつけ込む意地悪さ

双生児泣くのもテンポ合いますの

里帰り孫とテンポが噛み合わぬ

アンタテン母が辿った道をゆく

割り勘の酒はテンポが早くなる

ゆつくりでいいよと皆で急かしてる

しあわせは食器洗いの回る音

一目惚れそれから恋は急テンポ

テンポよくオベが終って腹が減り

葬儀屋のテンポで進む御焼香

悪声も河内音頭でのるテンポ

テンポよく話すあなたはマグネット

テンポ良く四季を奏でる津軽三味

佳

アナグロのテンポで攻めて来る女房

テンポよい司会本音を曝らされ

リズム感金のタマゴはまだ二歳

パソコンに慣れる頃には変る機種

軽快なテンポで踊る赤い靴

よつこらしよ伴奏入りの我がテンポ

ゆつくりと猫のテンポに添い生きる

地

天

スロースローとあ青春が燃えていた

軸

ご自身のペース崩さぬ蝸牛

敏治

山節

末吉

(七)順子

幹男

大朔

正和

(田)章子

倫子

四郎

猿彦

遠野

(中)章子

慕情

淳司

典子

酒坊

輝夫

(花)順子

堅坊

のり子

中居善信

初歩ノ教室

題——必ず

鈴木公弘

必ずとは絶対という意味を含みます。比較的扱いにくい言葉ですが、それだけに一度は経験しておいていただきたく出題しました。

よくある間違いから指摘します。「かならず」は「必ず」と書きます。あえて記名しますが、早期に是正されるよう望みます。

原因・幡路に必らず傘を持つゆとり

原・巢作りに必らず戻る軒の下

【手を加えた句とその理由】

原・医学進み必ず寿命まだ延びる ミヨノ

添・医の進歩必ず延びていくいのち

原・句の着眼は悪くありませんが、寿命に必ずは当然のことですね。

添・フルムーン必ず行こうカアチャン 健柳

原・フルムーン必ず行こうカアチャンよ

標語風の作りも気になりますが、音文字の数え方に問題があったようですね。小文字の「や・ゆ・よ」は本体の大文字と一体化して一音字と数えるルールになっています。

原・逃げ道のない人生だ次は吉

美紗子

添・逃げ道のない人生だ吉を待つ

現状を具体的に表現できたとき「次は吉」が生きてきます。

原・孫にする必ず来てネとメール打つ 記久乃

添・孫たちに必ず来てとメール打つ

「メール打つ」のですから、上5の「する」は不要です。原句は中8でした、ご注意を。

原・こう言えばああるはずの夫という啓子

添・こう言えば夫必ずああします

経験則に基づく蓋然性を描こうとした「うがち句」ですが、「あある」内容を示せばユーモア句になります。

原・誓います必ず命を見取ります 智加恵

添・誓います必ず命を取ります

終末期のことと察しますので、看取るがよいと思います。

【必ずという言葉が馴染まない句】

原・必ずが約束できん寿命です 一子

原・生きていく上で必ずいるお金 すみれ

原・何であれ必ず朝はやってくる 玲子

生命や金銭のような有限のもの、雨が降る・朝が来るといった自然現象には「必ず」は不向きです。一般論として、対象とした事柄がすでに必至を内包しているからです。

【細部にも心配りがほしい句】

原・燃え上る恋も必ず倦怠期

光弘

添・燃え上る恋も必ず倦怠期

原・まだ呆けてなるかと必ず筆メガネ 節子

添・筆メガネまだまだ呆けていられない中8です。

原・雨警報きつと当ると準備する 孝明

添・雨警報必ず当る雲になる

原・握手して必ず返す受けた恩 弘泰

添・受けた恩必ず返す握手する

原・ツバメ巢を必至に作り猫こわし 久子

添・巢を直す必至のツバメこわす猫リズムに注目して添削しましたが、燕と猫

との攻防戦が目には浮かぶようです。

原・必要で付けた道路がガラ空で 篤

添・必要と付けた道路がガラ空だ

「で」は説明に用いる言葉だと言われています。この句の二つの「で」はいずれも道路の状況を説明していますので、変えました。

原・人も木も必ず光の方を向く 道子

添・人も木も必ず光の方を向く

原・必ず来てねと念を押すノルマ 弘光

添・ノルマ背に必ず来てとママは言い

原・必ずね迎えに来てねその時は 弥生

「その時」とはいつでしょうか。

【入選に準じる句】

着眼や表現がやや甘いと思われる句を載せます。逆に言えば、踏み込みや工夫しだいでは句会に入選または佳作になる可能性を秘め

ているということです。ご研鑽を期待します。

原犬と顔合えば必ずワンと鳴く 紀雄

犬をワンと鳴かせないほうが面白い句になったかもしれません。

原子の熱に必ず母の夜は長い 俊子

よく詠まれてきた場面なのでこの位置に置きましたが、子の発熱は母の熱をもつて退治させることができるかと確信します。

原必ずしも正論通らないこの世 紀子

何故こんな世になるのでしょうか。

原田周に必ずひずみ立ち話 安子

添立ち話必ず田がひずみだす

原最終バス母が必ず立っていた 美恵子

添終バスへ母が必ず来てくれた

原コツコツとやれば必ず実を結ぶ 孝代

これもよく詠まれる句です。

原必ずと言ったけれども熱が出る こずえ

添必ずを破った熱にうなされる

原遠出して必ず食す地の珍珠 滋彦

添旅ゆけば必ず試す地の珍珠

原逢えずとも必ずこころ通じ合う 菜摘

「逢う」のですから恋人かな、とは想像しますが、相手が見えにくい難点があります。

原必ずに縛られ動き堅くなる 治子

添必ずに縛られ動き硬くなる

原神ほとけ必ず居ると信じ切る 恵美

添神ほとけ必ずいると思いたい

響きの強度から申せば「必ず」と「信じ切る」は同次元。よって下5を緩めました。

原必ずと言った人ほど返さない 宏造

添絶対に戻すと言っただけのこと

絶対性が弱いこと、他人事に読めることから、断言しない句に変えました。

原両の手に土産指切りの約束 淑子

添指切りの土産を両の手に掲げて

原約束は必ず守る人が良い ちづる

添約束を必ず守る人がよい

原必ずを安売りされて夢壊す 酒坊

添必ずを安売りされて夢壊れ

【入選句】

必携の辞典飲み込む電子辞書

土壇場で必ず絡む豆の蔓

冷戦中だけに必ずより戻す

アイマイミー必ず学ぶ英単語

学歴を必ず根掘り葉掘り聞く

マニフェスト必ずやと書いてない

久しくも兄弟会えば喧嘩する

ボランティア必ず神に届け出る

必ずとあるが読まない説明書

必ずがあてにならない前科あり

鎌の場所決めておいてと注意され

必勝を期して候補者出陣

老いの坂必ずなごも忘れがち

少子必至と聞かがるさい孫九人

大切なメール必ず削除する くにこ

運命の人が必ずやってくる 唯教

必ずと職に託した事も夢 清

必ずと口にしたのはあなたです 孔一

カギ財布ケイタイ良しとするチェック 登美子

【佳句】

必ずや守ってやると言ったのに

忘れ物無いかいつも妻に訊く

必ずのルビに不信と振っている

孫とする指切りの数おそろしい

口止めの噂必ず舞い戻る

選挙前減税するとみんな言う

必ずと言って別れた日が最後

必ず返す嘘を承知で貸す辛さ

また来るね必ず来るねそれっきり

【今月の推せん句】

陽の当たる裏に必ずできる影 深浦千恵子

いつの時代もそうですね。

おばちゃんは必ず給にも言わす 辻村ヒロ

怖いお話です。

タラレバを言うな必ず愚痴になる 内藤憲彦

覆水盆に返らずですから。

【私の句】

割り勘の日だけ必ず酔い潰れ

輪を目指すアホが必ず一人いる

(登載漏れの方は役員が添削して返却します)

秀句鑑賞

同人吟 佐藤 古拙

— 7月号から —

花嫁の父の最大公約数的感慨である。思わず苦笑してしまった。披露宴での父のオロオロする仕草を彷彿とさせてくれる。乱暴な口調が共感を呼ぶ。

舌打ちをしながらテレビ消している

岩 佐 丹吉

バカレ共が登場する下らない番組が目白押し。年配者の舌打ちが解るような気がする。大宅壮一はかつてマスメディアに侵される有様を「一億総白痴化」形容したが、低俗番組はこれからも生き永らえるだろう。

まだ落ちぬ女の鱗一枚が

須 磨 活 恵

絶世の美女エリザベス・テイラーは七十八歳で九度目の結婚をしたと外電が伝えた。ウィンと呻ってしまった。女性はい旦那と離別すると、男族と逆に、益々、輝きを増す方が多いようだ。アダムのお骨で出来た女がそうなのは天地創造の神の本意だったろうか。女の鱗はシーラカンスのそれよりも強く、極までお伴するのだろうか。

ボケてない薬がちゃんと減っている

江 見 清

隣り近所はボケたと思っっているようだが、薬局で眺めた数種類の薬が法則通り減っている。ポツクリと逝きたいなど触れ回

わたくしの住む町は、江戸時代は五楽庵氏霜石氏の住まれる弘前藩の支藩であった。人口四万人足らずの市で、商店街のシャッターは錆つき、市の財政は極度に逼迫している。そんな冴えない地方都市に呼吸しているから

「川柳塔」同人の作品に接すると、関西風な洒脱、軽妙な言いまわしに羨望すら感じることもある。この欄の執筆にあたり、これまで漫然と目を通して来たことを今更ながら猛省している次第。連綿と続いた格調たかい本欄を、やぶ睨みの秀句鑑賞に格を落してしまつたことをご容赦願いたい。

記事よりも重宝してる新聞紙

志 田 千代

部厚い新聞をみると、終戦前後のタブロイド判や、四頁程度の新聞を思い出し、記事の多さにウンザリすることが多い。丹念に読むと一日がかりになるだろう。不必要かつ下らない記事に対する痛恨な皮肉である。

風切ったお方も着て摘まれる

古手川 光

生前は肩で風切った有力者でも、いつかは茶毘に付される。無常観をさらりと語った表現力に脱帽してしまった。

喋るなという拷問に耐えている

山 岡 富美子

知人に「女は喋っているか食べているかのどちらかである」と不遜にも定義づけている奴がいる。この偏見にみちた知人は、ドライブする時は、助手席に女性をはべらすと、賑やかで眠気さましになる効用もあるともいうが、ともあれ、女性の一面をついていることは確かである。

どちらかが引けば笑って済む話

早 川 遯 行

戦前の教科書「修身」一年生用に、一本橋の上で、二匹の山羊が互いに道を譲らずに角を突き合っている挿絵があった。自説を押し通すことによる諍いは日常茶飯事である。理屈で解っているのだが、人間というものは、

どつやって娘口説いたこの野郎

鈴 木 いさお

つていようだがどうしてどうして。

積んで置くそれで満足してた全集

秋元 てる

時がたてば全集も色があせ、かび臭くもなります。殊に戦後間もない頃の出版物は紙質も悪く劣化が進みます。しかし不思議なもので、辞典や全集を背にすると落着くものです。積んどくも満更ではありません。

片足立ちまだバランスは大丈夫

森 茜

片足立ちは、目をつむると余計むずかしくなります。案山子だって目を閉じると難儀かも知れません。大丈夫という作者は、実年より十歳は若くみられること請け合ひと思いました。

座禅中今夜のおかず思案する

阿部 紀子

精神を統一するための参禅のさなか、不謹慎にも、夜食のおかずを考える——川柳的なシーンではありませんか。その邪念を見破られなかったとすればたいしたものです。心中を見透されると、肩こしに警策がピシッと決まるかも知れません。

汚染した海に人魚は遇せない

古久保 和子

川水は生活排水や農業等で汚れ、海はまた

船舶の増大や事故での重油の流出等で汚染が進み水生類の生態系に悪影響を与える。人魚は呼吸困難に陥るだろう。龍宮城の乙姫様だって大変だろうと思う。ライン河畔のローレライも心配になってきた。

母の字の哀しいほどのむつかしさ

石原 淑子

母という字は、女性の乳房を象形化したものだろうが、「哀しいほど」という作者は、自分の母の苦労を想つてのことだろう。そして母としての自身の体験とを無意識に重ね合わせているとも思われる。昭和期までの母は炊事、洗濯、針仕事で血の沁む苦勞を強いられた。

前夫と間に出来たわが児を、新しく出来た男と一緒にあって、虐待したり、殺したりする例も珍しくない。母という概念すら見直す時代に入ったのだろうか。そう思っていたら、タレントに「しんさんなめこ」という芸名を見つけた。辛酸を嘗めた自信があつてそういう芸名を用いたのだろうか。わたくしはその安易さと無神経に怒りを覚えた。

鉛筆も私の芯も太くなる

小川 てるみ

鉛筆の芯も使えば丸味をおび、書く字も太くなる。人間だって人に揉まれると強く逞し

くもなる。句会に出る多くの柳人は、好んで柔かい芯の鉛筆を用いる。すぐ消しゴムで消せる利点もあるし、選者にとっても目が疲れない。かくて作者の作句も油がのり、お人柄もいよいよ円熟味を増してくるのだろう。

勸善懲惡せてドラマの中だけは

高瀬 霜石

勸善懲惡の見本版のテレビドラマ「水戸黄門」は扮する主人公、脇役を度々かえて延々と続いてきた。これからも続くことだろう。前半で誰もが結果が解る単純な物語に仕立ててある。悪漢が黄門にひれ伏し、目出度し目出度しでチョンとなる。現実はそのようなので、庶民はドラマの中で溜飲を下げるしかない。今も昔も法律の裏をかくて、悪い奴ほど良く眠っていることだけは確かだろう。以上、盲評を連ねましたが、おしまいに私好みの佳句を列記してみました。

鳥瞰図中へ自分を置いてみる

森田 明子

子殺しの世へ葱坊主仁王立ち

山本 蛙城

天国の招待状は気をつけや

井上 喜醉

積ん読の黄ばんだ本も愛おしい

藤井 則彦

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 7月号から

居谷 真理子

玄関へ入れぬ入らぬお付き合い

片山 かずお

人間にも触覚があつて、これ以上近づかない方が良く感じるのでしょうか。でも心の玄関は鍵をかけずにいたいもの。

わたしを煮詰めれば日本海の色

木見谷 孝代

説得力ある句。私も煮詰めたら日本海の色になりそうです。なりたいです。

鏡には自分と違う人の顔

神野 千恵子

ドキッ！これは恐らく、自分にしか見えない自分の顔。

飛ばされた帽子へらへら追いかける

吉田 陽子

帽子を飛ばされたら、誰だつて無防備な姿を見せてしまいます。そうですか、へらへらでしたか。

流れ星はじかれたのか逃げたのか

稲葉 洋

星達の世界つて冷たそうですものね。

いちご大福供えて先祖驚かす

二宮 栄子

代々のご先祖様、初めていちご大福をお供え致します。子孫はこんなしやれた物を食べさせていただきますのよ。どうぞ一緒に。

筍はもらった春は順調だ

安達 厚

筍は夏の季語ですが、気分は春の真つ盛り。旬の物を「朝採りよ」と持つて来てくれる人がいて、順調、快調、言うことなし。

ロボットに抱かれて眠る日も近い

牧野 隆之

永遠に眠る日と読ませて下さい。

人間は悲しみ方が下手。感情をほどよく表現するロボットができて、それに抱かれて逝けたら：案外安楽に往生できるかも。

渋滞をよそ目に安い米作る

高野 不二

ガソリンの値段ほど関心を持たれない米価。命を養う米を、連休の今日も黙々と作る。

母の日や独りの酒を愉しみて

畑中 節子

毅然とやわらかく過す一日。

耳掃除甘い話を聞きながら

森下 よりこ

ふんふんと軽いあいづち打ちながら、自分の耳は自分でほじります。あなたの耳はあなたがやんなはれ。

達者過ぎて可愛げないと言われても

梶原 弘光

可愛げないと言われてちよつと困っているあなたは、とても可愛いです。— 失礼。

平城京僕も歴史の中に居る

内藤 憲彦

あの広い平城宮跡に立つと歴史の風を感じます。その中に確かに私達は居るのです。

春風のひと娘の納骨す

荒巻 夢

すつきりと詠んで、きわだつ悲しみ。

天秤に老母と夫を掛けてみる

根田 よしこ

どちらも大事。でも自分が一番大事。だから天秤の中心にワタシ。

長生きの県で生きてその一人

武島 ちよえ

年齢を重ねてこそその仄かなユーモア。

自由気儘な鑑賞で楽しませて頂きました。的外れやら失礼やら、お許し下さいませ。

龍馬と私

鈴木 いさお

私が初めて坂本龍馬と出遇ったのは二十歳の頃、今から五十年ほど前のことである。

当時勉強もろくにせず小説ばかり読み漁っていた私の目に飛び込んできたのが、司馬遼太郎の『龍馬がゆく』だった。これにより龍馬に一目惚れしてしまった私は、以後、書籍映画、ドラマ等で、幾度となく龍馬との逢瀬を楽しむことになるのだが、中でも昭和四十四年にNHKが大河ドラマで取り上げた北条路欣也の龍馬は印象が深く、今日まで私の中の龍馬のイメージはピッタリ彼に重なる。

今年また大河ドラマに龍馬が登場した。主演は人気歌手の福山雅治、勿論毎回欠かさず見ており、これはこれで結構面白い。端正なマスクにスラリとした長身、けれどどこことなく違和感と言おうか、物足りなさを感じるのは何故だろう。それはきっと私の中の龍馬

のイメージが北大路から抜け出せないからに違いない。

今の龍馬は少しイケメン過ぎないか

いさお

平成十年長年の夢だった四国一周の旅が実現した。一番のお目当ては、勿論龍馬に逢うことである。観光客で賑わう真夏の桂浜に彼は居た。私は恋人に逢う若者の如く胸を高鳴らせながら、時の経つのも忘れて彼に見入った。彼は私の熱い視線などぞ知らぬふりで、ただ黙って太平洋の彼方を見つめていた。

目を細め海見て龍馬何想う

いさお

慶応元年、龍馬は志半ばの三十三歳の若さで凶刃に倒れる訳だが、もし彼が天寿を全うしていたら明治の世をどのように動かしただろうか、また、今の時代に彼が生きていたら、どんな活躍をしただろうかと、死んだ子の歳を数えるような詮ない思いをめぐらせる。

もう既に彼の倍以上も生きて、いまだに何の功も無い我身を恥じながら。

全日本川柳鳥取大会を終えて

高浜 勇

大勢のスタッフ皆様の献身的な努力により大会にこぎつけました。大会前日、私は鳥取駅前で案内係をいたしました。次々とお声を掛けていただき嬉しく張り切って案内させていただきました。

前夜祭では、去年の川柳塔まつりでお知り合いになった方々と再会、旧交を温めることが出来たたいへん嬉しく思いました。

大会当日は全国から大勢の皆様が、日本のチベットと呼ばれてる当地に、五百数十名もおいで頂きました。

全国の皆様のすばらしい句の数々に、まだまだ自分の未熟さを思い知らされ、これからも精進努力しなければと反省いたしました。

また、準備の会合を重ねるうちに、スタッフの方々ともチームワークがとれてきて、大勢の人が目標に向かってひとつになつて行くのがひしひしと感じられ、この歳になつて人間力のすばらしさをあらためて強く感じ、感動。つくづく川柳をしていて良かった。これからも頑張ろうと思つているところです。

全国の川柳愛好家の皆様、どうもありがとうございました。

第34回 全国川柳2010年

鳥取大会に参加して

江島谷 勝 弘

6月12日の午前9時、第34回全国川柳2010年鳥取大会へ大阪駅前をバスで出発。

中国道を走りながら加西SAで2名、滝野社ICで2名を乗せ、総勢34名で一路鳥取をめざしました。ハンドルを持たず、車高の高い観光バスから見る景色はいろいろな発見がありました。田植えが終わりが水が張ってある田に何故か楽しさを感じました。また、各集落ごとに半鐘櫓が残されていることにも気づきました。

中国道佐用JCTから鳥取道を進む。まだ全線開通はしていないが、それでも相当早くなったとガイドさんが話してくれました。

昼食は岡山県西粟倉村の「あわくら旬の里」、地元食材を生かしたバイキング。約50種の料理に舌づつみ、女性たちに人気があったのは、きな粉と餡の白玉とよもぎ餅、や

はり別腹らしい。

食事後、バスの中でどなたかが「バイキングゆっくり食べたことがない」「美味しかった美味しかったとバスの中」と天笑主幹の句を披露、ワツと笑い声上がる。

最初の観光地、智頭宿を散策する。因幡池田の殿様が参勤交代一日目の宿場町。重要文化財の豪商石谷家を見学する。林業を営んでいただけに杉と櫓をふんだんに使い、お庭も裏山を借景に取り入れるなど、それはそれは驚くばかりの豪邸でした。

次の観光地は鳥取砂丘、32度にも上る暑さのなかで、お店の長靴を借りて砂丘の海辺まで行かれた方は一人だけでした。今大会の兼題の一つが「駱駝」なので駱駝だけ見に行かれた方もおられました。現在、砂丘で活躍している駱駝は4匹、いずれもサファリーパークから買ったもので現在6歳、寿命は30年くらいだと係りの人が教えてくれました。

16時30分、鳥取砂丘を後にする。途中、鳥取市内で大会前夜祭に出席される方々と別れ、17時20分、予定通り今日のお宿「浜村ビューホテル」に到着。

（前夜祭では14回平成柳多留で川柳大賞を受賞した徳山みつこさん、80歳以上の功労者

として高田美代子さんが表彰されたそうです）
楽しみにしていた夕食は、思っていた以上に盛り沢山のお料理に舌づつみ、カラオケのトリは女性三人組がご当地の貝殻節で締めました。

翌日午前10時、大会会場「とりぎん文化会館」に到着。会場はロビーが広く、事前受付者と当日出席者と分けた受付がスムーズに流れていました。

お話は、「妖怪川柳で町おこし」、いま人気のゲゲゲの町境港市の取り組みの苦労話が語られました。

昼食中に「川柳雑誌・川柳塔通巻1000号記念川柳大会」ビラ500枚を配布、皆さん気持ちよく受け取って頂き、その中には「投句しましたよ」の声も掛けられました。

午後1時から「傘踊り」と「岡本一也コーラス」のアトラクションがあり、そして、事前投句の入選句発表、当日の投句数は各題1000句前後、そのなかから70句の入選句発表が続く、川柳塔同人・誌友の方々の呼名があるたびに歓声があがりました。

17時30分、会場を後に一路大阪へ帰途につきました。お世話くださった皆様ありがとうございました。



追悼

穴吹尚士さん さようなら

村上 玄也

六月十三日、日川協2010鳥取大会開催の日。日帰りのため当日の朝会場入りした私を待っていたのは、予想もしない悲しい知らせでした。会場に到着するや、いきなり穴吹尚士さんの急逝を知らされたのです。

尚士さんは観光を兼ねて前日から鳥取入りをしていました。前日はすこぶる元気で、柳友の皆さんと大層愉快に過ごしておられたと伺いました。しかし、病魔はその夜突然、尚士さんを襲い、そのまま帰らぬ人となられたのです。

つい四日前のそうりゆう会で、いつも通り隣りあわせに座って、軽口を叩きあっていたばかりでしたから、尚士さんの急逝はとても信じられない思いでした。

尚士さんと私は同じ会社に通務していましたが、親しくお付き合いをするようになったのは、退職後で、会社のOBによる川柳同好

会(そうりゆう会)が出来てからのことでした。お互い初心者ながら、句評や作句について熱く語りあつたことが懐かしく思い出されます。そうりゆう会の世話人になられてからは後進の指導は勿論のこと、会のHPを通じて初歩教室を開くなど、新規会員の勧誘にも積極的に取り組んでおられました。

尚士さんは伶俐な頭脳と積極果敢な行動力を併せ持った方で、在職中は国内・海外の重要な部署の責任者を務められました。何れにおいても常に優秀な業績を残されました。

定年後川柳と出合ってから、川柳と真正面から向き合つて腕を磨かれ、各地句会での活躍、なにわ柳壇での早々の百句入選、そして栄誉ある路郎賞の受賞など、一気に川柳人としての階段を駆け登られました。

一方川柳塔社の常任理事としても、昨年十月には川柳塔誌編集長の要職に就かれ、正に

八面六臂のご活躍でした。過去に幾度か大病を患われましたが、それを感じさせない精力的な活動で大役を熱されていました。

ご本人、ご遺族のご無念は元より、川柳塔社としても本当に掛け替えのない方を亡して、残念な思いで一杯です。

尚士さんには師と仰ぐ方が多数おられたと思いますが、川柳を最初に教わったのは、そうりゆう会の創設者であつた故小林周信さんだったと思います。ご本人も先に旅立たれた周信さんと、こんなにも早く再会の機会が来るとは思つてもなかっただろうと思います。天国で再会を果たし川柳談義に花を咲かされていることでしょう。これからはゆつくりと好きな川柳をお楽しみ頂きたいと思っています。

ご冥福を心からお祈りします。 合掌
(享年七十四歳)

遺句抄 (路郎賞受賞作品)

本当の事を言うから嫌われる

ストレスがあるのは呆けてない証拠

お互いに老いたな妻の笑い皺

涙腺の蛇口が甘くなっている

前科にはならないほどの罪重ね

路郎忌 本社七月句会

七月七日(水)午後五時半
アウイーナ大坂

路郎没後四十五年の路郎忌記念句会であり、交換選者に番傘川柳本社の宮田宣子氏、ふあうすと川柳社の長川哲夫氏を迎えた。番傘川柳本社、ふあうすと川柳社から多数の参加をいただき、初出席者五名を含め総計百二十名で開催された。

お話は新家元司氏、「川柳に見る男心と女心」と題し、男の気持ち、女の気持ちなどを東西の名句の中から拾い、軽妙な語り口による折しも七夕祭りというロマンチックな夜に合せてのお話であった。引用された句の幾つかを列記する。

立法も司法も妻が取り仕切る
妻に負け部長にも負け酒に負け
定年の夫が話しかけてくる
ワンサイドゲームになってきた夫婦
手間かけて造った食事残される
足湯でも巨乳の横へ行きたがり
次の世はどんな男に逢うだろう
干からびたお肌へベビーオイル塗る

句会に先立ち、去る六月十三日に急逝された穴吹尚士氏を悼み参加者一同黙祷を捧げた。
(黒兎記)

月間賞は奥時雄氏(堺市)に輝く。

(司会)美龍・昭(協取)蕉子・真理子

(受付)扶美代・舞夢(清記)富美子

席題「休む」

池

森子選

名古屋場所NHKも全休に

ドルユーロ円休む暇が無い

さあ休止もあるし友も来た

めりはりを利かすところで四分休符

妻の目の届かぬ辺り骨休め

原稿を書き上げうまい酒を飲む

心臓が休みをくれと言いだした

休んでも出席しても目立たない

休園日一息入れているキリン

四分休符ばかりが続く梅雨さ中

休止符を打つ雑踏の中で打つ

委細面談休日だけを聞いている

休肝に休煙いにち長らえる

今日こそは明日こそはと休火山

婚活に休む間もなく打つメール

骨休めしすぎて効かぬサロンパス

母と居てまだ休めない竹の串

心電図ここにもあった四分休符

休みには別の笑顔を持っている

休養はあの世でゆくり取るとする

休肝日友が来たのでやめにする

ローテーション妻の出掛ける日に休む

ときどきは休むふりして風を読む

シンゾウ殿皆勤賞を進呈す

かけ声がいつも虚しい休肝日

欠伸にはあくびで返す休み明け

休眠と言えずしばらくお静かに

休日はいつも朝からソブanoで

考えているか寝るか休んでる

冥果てまで休まないひとの口

鬼凡休んで見たい窓がある

この虹が消える時までひと休み

佳

にんげんの声せぬ森で大休止

ずる休み上手になつてからの鬱

一休みして螢は母の川に着く

男こころも女こころも風になる

休み休み言った嘘から発火する

人

毎日が休みになって身の置き場

地

休みたくないのか四季咲きのバラよ

天

雨つづく女をすこしやすもうか

軸

ひと夏を休めと言った右の時

東吉

一風

多恵子

楓樂

克己

茂

良一

航太郎

みつ子

はな

天笑

修

瑠美子

完司

昌紀

美龍

恵美子

楓樂

茂

良一

恵美子

兼題「大袈裟」

長川

哲夫選

大袈裟でいいよ泣きたい時は泣け
エコ対策大袈裟過ぎることはない
チチンブイで治る病も救急車
大袈裟な飾りは要らぬ白いシャツ
次の代もその次もまたあなただけ
大袈裟なことが嫌いな父だった
大袈裟に言つて間違ひ五円だけ
大袈裟に笑つていつも許される
大袈裟に騒いだあとの白い闇
体重計増えた減つたと百グラム
大袈裟に笑うあなたは淋しがり
大袈裟だが真顔の話し耳を貸す
大袈裟でも所詮トカゲの尻尾きり
大袈裟に騒げば夢は逃げてゆく
救急車呼べと騒いだ二日酔い
大袈裟に言えばあなたは好きなんだ
大袈裟に寝た子どもが光り出す
大袈裟な甘えもあつて夫婦仲
百円を貸したぐらゐで拜まれる
トラ負けた日もバンザイをして帰る
死ぬのではないかと思う二日酔い
オーバーに笑つて目立つ淋しがり
悲しみを独りで背負ひあびる酒
大袈裟でどこか淋しいチンドン屋
重いほど手垢のついた愛の文字

敏治 敏治 美義 賢子 公誠 義 みつ子 瑠美子 楓 朱夏 扶美代 一風 美籠 靖鬼 郁夫 堅坊 隆彦 一步 好 たつお 完司 俣子 唯教 淳司 真理子

大袈裟に笑いうつろな物忘れ

振られても振つたと日記には書こう

サツカーで世の中変わる訳じやない

大袈裟に言うて薬を増やされる

大袈裟とちやうよ日本が危ないよ

聞くほどにジェスチャーほどでない話

斬られ役なかなか死んでくれません

佳

うっそーとでつかく叫ぶからホント

文楽の女のかしら泣き崩れ

大袈裟に招待などと恐ろしい

葬儀屋の深いおじぎにある仕事

オーバーに胸をたたいてプロポーズ

人

寝めるとき両手ひろげて抱いてやる

地

大袈裟に泣いて一度は許される

天

やがて秋誇大誇張はそつと綴じ

軸

参院選麻生路郎と書けば足る

兼題「筋」

大内 朝子選

筋よりもやっぱり情に人が寄る
命ある句に道筋を導かれ
沖繩へ筋の通らぬ基地移転
青筋を立てずにおれぬ消費税

黒兎

良一

富美子

あかね

朝子

求芽

義子

直樹

朋月

いわゑ

宏子

恵美子

美代子

扶美代

森子

准一

保州

慶一

勝弘

悔しいが筋が通つていて黙る

家筋の良さが所作にも言葉にも

守備範囲守つて筋を通しとく

ライバルの前ではピンと張る背筋

大筋を認め大事をひた隠す

筋通す後姿が寂しそう

筋道を通し出世の遅れだす

第三ビル売れ筋を知るゴミ袋

思い出がひよつこり覗く御堂筋

筋通し切つてふわふわ浮いている

筋通す雑草だけがすすくすく

無学だが父の背筋は曲がらない

筋通す男少々鼻につく

絹さやの筋とる今は主婦の顔

節約は筋金入りのおばあちゃん

筋を通してひとりばつちの影法師

筋金の頑固を孫が抜いてゆく

道筋をきめて迷わぬかたつむり

粗筋だけ読んだ話でボロが出る

シナリオを変えてドラマは今佳境

神様がのひらに筋つけてくれ

筋道を通して覚悟する火の粉

筋書きの異にすっぽりバースデー

筋書きのそこそこにある伏せ字

筋書きを通せば傷む傷がある

一筋の涙に許そうと思う

筋通す覚悟辞表ポケットに

好

美籠

義子

航太郎

敏子

楓楽

東吉

義博

証子

堅坊

宏子

大輪

月子

朱夏

(岩) 明子

いわゑ

遠野

希久子

氷筆

紀乃

天笑

正雄

新一

扶美代

集一

良一

初太郎

向日葵の誇り伸ばしている背筋 堅坊

佳

背筋シャンと伸ばせば肩が凝ってくる 扶美代

農一筋土の言葉がわかる父 寿美

筋のない話を聞かせながら寝せ 月子

筋金に家族みんながぶら下がる 日の出

勝ち筋を読んでこごとと深呼吸 〇千代

人

運命と言う筋書きに身を任す 集一

地

貧しくも一筋通す母の意地 キヨミ

天

筋通す男の眉が美しい あかね

軸

一本の筋を支えに生かされる

兼題「うやむや」 川上 大輪選

白黒を取ってつけない知恵もある 美義

うやむやのままで責任とられる 雅明

うやむやにしても監査ではれている いくろ

酩酊の父さんうやむやがお好き シマ子

当選さえすればうやむやマニフェスト 克己

お悔やみは言葉にならず口の中 好

うやむやだから想い出美しい 扶美代

空白の日記はうやむやで終る 瑠美子

うやむやを吐き出すように大あくび 能子

プロポーズうやむやのまま五十年 耕治

うやむやで許し再発した浮気 正雄

うやむやな人生だけど子が二人 理恵

貸した筈返した筈のはした金 たつお

うやむやを許し金婚式となる 淳司

土砂降りでもうやむやにせぬ万歩計 一風

曖昧な私を叱る電子辞書 和夫

肝心な返事モザイクかかっている 天笑

建前を並べ難問先送り 見清

どっちにも転べることは用意する 天笑

あれこれをうやむやにしてまだ夫婦 宣子

うやむやが丸く収めた小競り合い 義博

えかげんになれぬ貧乏やつたから 次郎

勝敗をうやむやにした俄雨 キヨミ

結論を出すとは別れになりそうで 榎子

最後まで欺し通した処方箋 保州

症候群と言われて払う診察費 真理子

うやむやがいいな明日見る夢は 扶美代

うやむやじゃ祖谷の吊橋渡られぬ 義子

言い訳の言葉焦点はやけどす 〇千代

うやむやな握手で平和守り切る 郁夫

貸し借りがうやむやになる五円玉 良一

はつきりとしなさいあんだ男でしょ 佳

うやむやに生きて勳章だけ貰う 則彦

プロポーズしたかされたかわからない 理恵

優秀な秘書は自分のせいにする 完司

うやむやと訳しておこうマニフェスト 和夫

にこにこと笑って敵を作らない 集一

人

うやむやにしないと誰も居なくなる 翔

地

うやむやを許して母の目が笑う 新一

天

幸せを問われて妻はただ笑う 良一

軸

うやむやな返事儲けているらしい

兼題「午後」 富田 宣子選

成るようになっていつもの午後が来る 准一

携帯を切ってほとぼり冷ます午後 わこ

夕顔も私も開く午後の五時 哲子

夕焼けを見て欲望が目覚ます 集一

思い出を積んで崩して午後の雨 敏子

夕食を待てず飲みたくなるのです 美花

午後の雨かたつむりと聴くワグナー 朱夏

忍び逢う午後のほのよい雨になる 扶美代

おもしろいプランが午後のふところに たつお

人生も午後ウエストもゆるみ勝ち 真理子

夕食の支度帰るシンデレラ 〇明子

思いきり読書午後から独りで 誠

二紙読んで午後の無聊をどう埋める 公誠

予告ない人生の午後来る計報 初太郎

長い影引きずる一文無しになる 多恵子

単調な午後があしたもあさっても

日が暮れてやつと男の顔になる

留守電にして午後からは蝶になる

午後三時昼寝の時間夢みてる

午後からは自由誘いを待っている

お日さまを欺く昼下りの不倫

読み終えた余韻の中で選る夕餉

中天を落ち日輪の大きさよ

鉛筆も消しゴムも午後休み取る

昼一の会議睡魔とハツケヨイ

午後からの授業を抜けて裕次郎

夕方に落ちる定めの沙羅の花

午後六時じわじわ化けてゆく女

午後三時児童見守り隊に立つ

就活の笑顔も消えた午後の五時

リストラの話が午後にあるらしい

煮えきらぬこと胸底に午後の便

住

人生の午後各停に乗り換える

対峙した愛と憎にも陽が落ちる

人生の午後に光らず好奇心

ホスピスの午後は哀しいほど閑か

草原の果て牧神の午後がある

人

傾いた夕日逢おうか延ばそうか

地

人生の午後鈍行の時間割

いくひろ

大輪

智彦

あかね

卓

梶子

真理子

完次

良一

初太郎

新一

昌紀

克己

ばっは

千津子

ばっは

楓楽

森子

紀乃

いさお

慶一

敏子

能子

天

次に来るチャンスに立とう午後の椅子

軸

人生の午後ゆつくりと華やかに

兼題「痺れる」

河内

長すぎる恋に痺れが強くなる

お坊さんも痺れる足を組みかえる

写経する間は正座乗りきれる

膝枕された痺れが心地よい

お茶席で痺れた足が笑ってる

良心を痺れさせてたちゃんこ鍋

柳多留の中でききき痺れてる

産声に周りみんなが痺れてる

今一度痺れる恋がしたい古希

札幌は判断力を麻痺させる

悟りより痺れが先に来る座禅

正座して聞く長生きをする話

百歳のあつからかに痺れてる

バリトンに痺れかれこれ五十年

しびれると言ったら続くへたな歌

全身麻酔耳はしつかり聞いている

一言に痺れて趣味にのめりこむ

浴衣着て河内音頭の輪で痺れ

電蓄に痺れた暗い喫茶店

エルビスに痺れてからのロック狂

天笑選

千里

たもつ

修

保州

太郎

富美子

恵美子

光久

淳司

富美子

弘一

良一

公誠

扶美代

茂

大輪

みつ子

實

耕治

直樹

団塊のわが青春にビートルズ

陶酔の世界LPに針落とす

この人に痺れたなんて嘘みたい

析若に痺れた土俵今いずこ

虹を見て痺れ札東見てしびれ

無理矢理に握手をされた手の痺れ

捨て科白の一言に痺れます

返盆にしびれ葉を入れたいた

アツアツをしびれ切らして猫が食う

痺れたヨフリーキックを二本決め

おかげさまサッカー通になりました

まだ少し痺れていますW杯

住

即興のジャズに痺れる港町

脳みそに痺れが走るかき氷

見つめられ左の頬っぺ痺れてる

痺れさすジョークを一つふところに

お願より声に痺れて決めました

人

成し遂げた充実感に痺れてる

地

たわむれに触れて感電したまんま

天

目を瞑るからもういちど仰って

軸

ひと言に痺れぐすりを込みこませ

卓

初太郎

瑠美子

正明

航太郎

集一

義

求芽

茂

紀雄

義子

航太郎

紀乃

あかね

シマ子

扶美代

月子

柳弘

理恵

奥時雄

わが心ゆたか

毎月24日締切・35句以内厳守

編集部

川柳クラブわたの花大區 西川 義明報

賞味期限切れた二人が国嘆く
たはね髪白い恰足美しい
桜舞い散り華やかな春終り告げ
口数が多い夫の嘘わかる
剥き出しの闊志ライバル燃え盛る
デイトスポット二つの影が離れない
我が身より子に一生の母だった
三歳の憎まれ口の愛らしさ
口チャックすればストレス溜ります
寄り添うて幸福そうな影法師
肩書きが消えた名刺の身の軽さ
婚活マル肩の荷おろし妻と酌む
使い切るタンスの奥の一生もん
立ち話ながくて私校見ず
どっち先うちは夫が残る意志
おいしい物食べて幸せ若返る
ライバル不在ワンマンショーの国技館

知佐子 民 博子 愛子 宏至 義明 いつみ 宏 正春 妙子 俊子 晴美 浩三 孝子 和子 ますみ はじめ

二度ギネスゴルフ王子が孫に見え
幸福に見える人にも悩みあり
一生を大切に生き今がある
いい話無口もじっとしておれず

川柳塔わかやま吟社 川上 大輪報

正念場ゆずれば僕が消されそう
愛された記憶は消せぬ半世紀
嫌なこと消して笑顔の処世術
境界線消すと握手がしたくなる
途中下車消したい過去を捨てにゆく
マニフェスト消すのが好きな民主党
賛否両論夢中になれるものの価値
いつか醒めることもわかってる夢中
お百度の素足痛みを感じない
老いてなお夢中になれる川柳よ
夢中で話し込み軽くなりました
知ったか振りがいわずもがな先走る
先走った悔いへ笑顔の助け船
先走る夫の手綱握ってる
懲りもせず先走りする風の読み
一線を越えて地獄へ先走る
先走るから正道を見失う
先走りひとりよがりの四面楚歌
最後まで聞けば転ばず済んだのに
冷静な話クールに聴いている

たえ子 美代子 耀一 一風 准一 怜 美子 緑良 英子 輝子 あきこ 保州 三男 小雪 よりこ 克子 よしこ 富美子 寿子 精子 義雄 大輪 真里子

殻脱げばわたしクールなカタツムリ
月を背にクールに覗く水鏡
クールな君と熱い女のヤジロペー
クールな戦い互いに握る不発弾
ひょうさんが時どき見せているクール
クール過ぎ何とも味気ない男
熱き身をクールに装う晴れ舞台

長 柳 会大阪 坂上 淳司報

文句じゃないの入れ歯ガタガタ言うのです
ハイキングお地藏さんとティータイム
忘却の彼方にそっと古い傷
アルバムが古い記憶をよびもどす
天袋古い思い出詰め込んで
ひと昔前の話に花が咲き
老若男女遺跡へ馳せる旅心
選挙カー去って散らかる野次文句
飲んで食べ文句だけ言い帰る父
はいという言葉素通りして文句
三猿になって文句を閉じ込める
国は取るものはさっさと通知来る
登山靴明日の天気を知りたくて
ちびっ子の笑顔が揃うVサイン
是非欲しい達者でコロリ処方せん
愛のある師のひと言で抜けた棘
古本屋主は奥で渋い顔

めぐみ 利治 紀久子 徑子 紀子 俣子 和香 淳司 敬二 明子 輝子 マサ よしお 三和子 隆彦 けい子 孝代 久美子 ヒロ 弘光 靖博 光弘 英美 もこ

ずっと前貸した小銭は覚えてる

古日記読めば過去の日蘇る

古くよき時代を今も捨て切れず

古代史のにわか学者で奈良熱く

種牛が殺生するなと文句言い

泣き笑いじつと見ていた古時計

お湯の出る暮らした文句ありますか

美人の湯とこやかしに行つたのに

雑草の文句あるかと言う構え

し盤を聴いて青春偲んでる

五七五みんな一つの串だんご

嫁ぐ前古い恋文焼き捨てて

亭主の座古くなるほど軽くなる

田植え時お茶を運んでいるペンツ

川柳茶ばしら(愛知)

板山まみ子報

おちこばれ開き直つた趣味の会

冷蔵庫いっぱい西瓜ラップする

年寄りを二千元札よく騙す

銘のある花瓶処分に迷いだす

黄沙の地植樹で未来地球エコ

二十指を動かしてみる頭痛持ち

飯茶碗小に買い替えダイエット

川柳若葉の会大阪

宮崎シマ子報

退院も知らず折角きた見舞い

幸子

正子

芳野

篤

たけし

エミ

冨美子

正美

一慧

直樹

和子

武男

幸雄

和代

幸子

雅美

遡行

美千代

百合江

かつ子

まみ子

ますみ

折角の満月ビルの影に照り

折角のお招きだから楽しみに

離れても離れた気にはならぬ人

戻る父に察した幼児離れない

あまりにも距離近すぎてする喧嘩

程のよい距離を保つてまた夫婦

おさな友つかず離れず八十路いく

八尾市民川柳会(大阪) 宮西

弥生報

口蹄疫ますます肉が遠ざかり

嫁を脱ぐ今日一日の一と区切り

生き甲斐を探す長生きしたいから

メガネを探すための眼鏡を探す

ローカルの無人わびしい過疎の村

老人の村へ命の置き薬

ウイルスへ村があえいでいる牛舎

梅雨晴間メダカの学校から弾む

さよならは絶対言わぬ淋しがり

政治屋の大きな声を信じない

身の丈に生きて呼吸が楽になる

無農薬虫も感動する旨さ

ケータイの明かりで探す鍵の穴

庭の木に生氣が戻る梅雨の入り

温暖化曲つたきゅうり胸を張る

増えた白髪にドラマ幾つか棲んでいる

農園は野菜の宝庫憩の場

香住

慶子

シマ子

洋子

能子

烈

加津子

弥生報

寿之

華

紀乃

草風

寿鶴

欣之

秋子

弥生

柳伸

幸生

留里恵

賢子

勝弘

いさお

浩三

一風

紀雄

佳句地十選(7月号から)

井上勝視

やっぱりと言つて済まない核の傘

乗り越えた次へふんばれ足と腰

古傷に気やすく触れて来る他人

どうせなら踊る阿呆を貰こう

煮崩れてやつと孤独を抜けられる

猿くつわされても喋りたい内緒

五十年煮込んでやつと出た笑顔

核の無い国が借りてる核の傘

リクルートスーツを脱げぬまま四月

愚痴弱音吐いて笑つて生きている

捨て去つた村へ帰つてゆく余生

河内野に一足早い梅雨の入り

梅雨明けのような笑顔に癒される

しんどいと言えぬしんどいひとと住む

川柳塔なら

坊農 柳弘報

ちよこまかとまめに動いてくれた妻

人生の薫りと知つた父の汗

ポケットに研いだ刃を忍ばせる

千の風薫る彼岸の墓参り

藤の花ほんのり薫り恋の彩

便利さと裏腹にあるカード持つ

薫風に高い高いと子をあやし

正

實

仲雄

孔美子

緑良

淳司

三津子

照彦

故尚士

みつこ

加央里

扶美代

耀一

朝子

幸子

雅美

遡行

美千代

百合江

かつ子

まみ子

ますみ

妻という便利で怖いパートナー
香水の一滴介護の匂い消す
布団干す初夏の匂いに包まれて
磨き抜く家の歴史という柱
ポケットに青い大志は入れたまま
幸せの種はポッケにしまつとく
大枚がポッケにあつてわく勇氣
エジプトのロマンを語る石柱
ポケットに七つの板面持ち歩く
千年の揺れに耐えてる心柱
火も水も詰めたポッケの人生譜
便利さに慣れてしまつた指の先
ポケットに入る程度の僕の夢
古ぼけた太い柱に見る歴史
大黒柱だつた厳しい父だつた
柱時計わが家の主の顔で鳴る
人柱なんとも酷い掟だな
アッシー君順番制にしています
遷都祭時越え天平の風薫る
お隣のオール電化に耳が付く
母の荷を開ければ古里が薫る
猫の手を便利に借りて売る保険
四柱推命私の心もあそぶ
ポケットの拳雄飛の時を待つ
エプロンのドロップ母の涙かも
そこかしこ古都の床しと薫つて
電柱の陰に微罪が一つある

いさお 典子 次郎 博一 寿之 一風 隆盛 郁夫 富子 美智子 信子 弘風 和夫 美千子 寿美 良一 のりこ 恭昌 道子 國治 朝子 柳弘 順啓 理恵 田鶴子

口は便利天下国家を動かせる

川柳花の輪(大坂)

妻谷

重風報

真理子

喧嘩したあとも夫のめしを炊く

薫

ほのぼのと何をおしやべり老母と孫

やすの

夕焼けへ歩調合わせる老夫婦

克衛

初めまして孫保育器で手足ふる

一幸

初恋の自分に逢えるクラス会

音成

初孫の下つた目尻どちら似や

風

軽くとも現金欲しい初サラー

重風

起伏の道歩き通した太つ腹

ミヨノ

初舞台人の字飲んで深呼吸吸

楽鬼

太つてる医師に瘦せると云われても

泰子

川柳ささやま(兵庫)

遠山

可住報

付き合つてはばち癖が気にかかり

久子

いただいた温い言葉を抱いて寝る

純子

思い残す事ない軽身預けおく

美緒子

雑草を自負して開き直つて

二英

なごやかな話題賑わう苗売場

美紗子

立ち話目はお隣の窓へ向く

啓子

ついて行く方向音痴とも知らず

真由

背中押すライバルの手がうれしくて

文子

元気で言葉うれしい母子手帳

多美子

ばちばちと嫁に譲りたい台所

開子

バティシエが本場の味を披露する

照代

五七五赤いポストが待っている

かほる

ぼちぼちと倅の意見に耳貸そう
本場物と聞いて風味も倍になる
ご当地の本場の味に出会ふ旅
げんこつそのままでは何も掴めない
渡り鳥びたりと温い風に乗る

川柳塔鹿野みか月(鳥取)土橋

螢報

職責をはたし停退飛行雲

和枝

捺印し責任一切引きうける

実満

責任の軽さ生欠伸が続く

盛桜

離農して責める時世でありませぬ

みどり

人を斬る責任のないベンをとる

忠良

律儀にも責任守る茄子の花

くに子

子を産んでお国へ返すのも責務

茶子

責任を果たした夫のよい寝息

睦子

ストープに心の傷をいやされる

幸枝

ぎりぎりを生きた親父の羅針盤

彩子

しつかりと時の記念日捻子巻く

節子

トリックにかかつてからの半世紀

和子

しゃんとせいそれで責任者というか

はるお

何気ないことは大樹から落ちる

かおる

ことは尻とつてケンカの花ざかり

富久江

ありがとう言わず語らず平和です

菊乃

言うまいか言おうかことは喉を突く

弘子

バラバラの言葉をつなぐ母であり

満

人の世をすいすい泳ぐ美辞麗句

みさ子

すいすいと走り椅子並べ手伝う

孔美子

網の目をすいすい潜る面構え
すいすいと仲間押し分け主席の座
すいすいと嫁が決つて漁師継ぐ
すいすいと優雅にくらす熱帯魚
ねじれ国会議案すいすい通らない
邪魔者がなくてすいすい川のはる
すいすいと掃除洗濯お手のもの
すいすいと新車に乗つているお爺
よく止まる時計だんだん好きになる
友だちのことばを信じきつて

ほたる川柳同好会大阪 水野 黒兎報

さりげなく美人のママの請求書
禁煙の気がない夫ともめている
栄光と苦難の総理初夏船出
就活は今も役立つ七光り
秒表示睨みつつ待つ赤信号
記念日にちよつと奮発赤ワイン
胸のバラ赤く祝辞は熱くなる
やわらかな時を共有赤ん坊
赤い目の友の背中をそつと撫で
よれよれだがまだ信じてる赤い糸
今は亡き父の意見が懐かしい
ご意見はありませんで手を上げる
意中の彼想い届いた同窓会
意味深な笑み浮かべてる彼の父
精当での縁彼とは長い友

宣子 露子 蟹郎 惣子 八重 久枝 重忠 照彦 螢 洋子 春代 長一 順子 宇乃子 郁子 黒兎 桂子 純子 美智代 禮子 見清 公子 信男 勝

当り年花粉の次は紫外線
当り物に夢中駄菓子屋入り浸り
当りはずれつくづく知った恐い妻
頬に手を当て言い訳を考える
肘当てがファッションになり未だ着れる

南大阪川柳会

吉川

寿美報

かなうなら酒の泉でおぼれ死ぬ
母と妻の連合軍に敵わない
念願がかない今宵は二人きり
夢かなうミストサウナの三朝の湯
その夢がかなえられると黒い影
お眼鏡にかなつていと思つてた
かなわんなあまたおばちゃんに値切られる
叶わない恋がドラマと歌を生む
かなうなら一つ願いを流れ星
どう思案しても叶わぬのがお金
たつぷりの脂肪支える父の汗
あと三日居ればいいと里の母
のんびりと介護さもちを諭される
のんびりと家族居ぬ間のナポレオン
ジバンギで秘湯訪ねる一人旅
細工物匠の技の素晴らしさ
宇宙まで飛ぶつもりし竹とんぼ
細工した時計のネジをかけ忘れ
根性が右脳左脳を細工する
職人の細工指先知っている

契子 柳童 柳治 久子 雪子 克己 故尚士 憲太郎 なぎさ あおい 昌紀 直子 弘子 清 修 たもつ 栄子 タカ子 弘泰 和雄 ルイ子 志華子 一歩 柳伸 太郎

小細工が行き届いてる天下り
名人の寄木細工は暖かい
ちちんぷいぷい母の手品に救われる
マジックの鳩が昼寝で出てこない
とつときのマジック軽石が沈む
母さんをマジシャンにする台所
支持率がマジックのよう消えた
脂肪またわたし悩ます腰まわり
古いけど手品は口で座をわかし
マジックの横で孫来て種明かし
のんびりなんて滅相もない余生
のんびりの暮らし狂わすゼロ金利
かなうなら嫁御をひとり過疎の村
お百度をかなうまいとは踏んでいる

川柳塔おっぱい吟社香川 川崎ひかり報

署名して絆を結ぶ印を押す
陳情に押しの効く顔持つてゆく
車椅子押しても押されず終りたい
何ん回も念を押される年齢となる
脇役の我慢強さに押され気味
射止めたい押しの一手が浮ばない
エンピツが壁にあたつてころびでる
はびきの市民川柳会大阪 徳山みつこ報
また明日も起きたら仕事待つている
締切が明日に迫つてペン走る

更紗 忠昭 郁夫 あや子 柳弘 弘風 勝弘 寿美 萬的 百合子 恭昌 東吉 ひさ乃 修 ひかり あきら 八重子 よしみ いさむ 放任 賢 雄太 庸佑

老いて尚明日のために種を蒔く
 散り落ちたボビー炎の色のまま
 鯉のぼりビルの谷間で頭打ち
 鯉のぼり風のない日は休みです
 鯉のぼり女系家族にうらやまれ
 おーい見て初孫生まれ鯉のぼり
 花粉黄砂旨そうにのむ鯉織
 鯉のぼり古い序列のまま泳ぐ
 押入で風恋しがる鯉織
 心から愛してまうと言うてある
 心付け不要と書いてあるけれど
 波風の心を癒す金魚鉢
 心まで老いたくはなし赤が好き
 舞台には出ない主役が裏にいる
 スタッフの笑顔にベッド起き上り
 スタッフの徹夜に届く握りめし
 一人しかない小さなお店です
 スタッフによいしよが後で利いてくる
 ワンちゃんもうちのスタッフ留守まもる
 顔ぶれは揃ったなんだマージャンか
 炊き出しの列 スタッフの熱い汗
 スタッフの汗から世界一のネジ

川柳塔唐津(佐賀)

仁部 四郎報

いさお 美喜 りつえ 一壺 敏 フジ 喜久子 扶美代 久仁子 六点 章司 ちづる 泰子 千鶴子 猿杓 一知 アヤ子 光男 ヨシ枝 登志子 ダン吉 みつこ

他愛ない話も老妻が居てくれる
 八十路坂だまされぬよう登つてる
 八十二孫子八人祝いくれ
 分かれ道信号一つ違ひ過ぐす
 孫が押し祖母が指図の車椅子
 川柳塔きやらばく(鳥取) 大家 恵子報
 流れ星がきらきら亡夫が乗っていた
 強ばる身我流ではぐしストレッチ
 早いもの孫の一人がお嫁入り
 きらきら星の中のふたつは父と母
 道草が好きで陽気な風になる
 道しるべたよりに古道寺社詣り
 螢との距離が縮まる闇の中
 虎キチが泣いて喜ぶ快心劇
 回り道しても苦労はついてくる
 丹田に力をこめて待つ出番
 いい母はカーネーションが枯れるまで
 年寄りがサア立ち上がれ日本党
 おんぶして葱をきざんだ子が六十
 人間の罪魚獣のいのち絶つ
 栄光のメダルを不意に背負い投げ
 人間の謎解くように夕映える

城北川柳会(大阪)

伊達 郁夫報

勝視 輝夫 實 四郎 晴翠 恵子報 亜弥 初枝 紫泉 未延子 てい子 寿々子 ふみ 麗 晶子 春枝 恵子 章江 蘭 なみ 千代 瑞枝 容子

分煙で友はガラスを燻らせる
 定年後良人もつばらおさんどん
 近くても心通わぬもどかしさ
 反骨に生きて世間を狭くする
 溜息も思わず捨てるいい天気
 ひらめきが活かすよろこび心とく
 敗戦が落として行つた悲劇の子
 介護士の心配りに気が和む
 一服の場所も肩身も狭くなり
 輪の中で波風立てずいる無口
 ネットから土足でメール配られる
 ビラ配り朝飯前と決めている
 遺産分け折半できて仲が良い
 悪役はもつぱら秘書の務めです
 配り方まず勉強をする名刺
 その煙しつかり受けて責を取る
 定年の翼休める場所が無い
 流したい未練が渦を巻いている
 浅学がもつぱら頼る電子辞書
 気配りと無垢な笑顔に癒される
 一条の煙となつてグッドバイ
 気配りがすぎて自由に羽ばたけぬ
 あれもよしこれもよしでは生きられぬ
 あちこちで狼煙をあげるテロリスト
 おい月が綺麗と呼んだのは昔
 揉め事はもつぱら俺のせいにする

令子 あさ子 知恵子 桂作 とし子 利行 じゅんこ 満作 縣笹 ルイ子 郁夫 正 麗 明子 弘風 勝弘 満州夫 典子 志華子 集一 和夫 葉子 恵子 倫子 一歩 昭

新人の個性チェックのビラ配り
ハーフメイドだけでリッチなところ
愛煙家もっぱらホームの端のウツ
円満のハーフハーフの歩み寄り
一度だけの人生だからよく笑う
食卓のくぎ煮が春を連れてくる
いつ死ぬかわからないから明日を待つ
ひよとして私鬼とのハーフかも

川柳ふうもん吟社鳥取 夏目 一粹報

死ぬ日まで愛を信じる馬鹿でよい
月よ許せ横取りしたい花がある
太陽へ向かって走る群れにいる
ねしくって左官めでたいコテ絵描く
匙かげんくらいな事で傾かん
横取りをするほど飢えてなどいない
バワフルな仕事の虫が眠らせぬ
我が家にも大蔵省の匙かげん
五十年添ってほどよい匙かげん
菩薩にも般若にもなる匙かげん
マニフェストだけはバワフル足らぬ銭
匙かげんするからあんたきらわれる
ねしくった罪に心が疼かぬか
バワフルな妻と並ばず五歩下る
同じならバワフルに飲むこの酒も
仕分け人横取り視野に入れている
桜木のバワフル石を割って咲く

東吉

柳修

柳弘

賢子

朝子

初太郎

野鶴

美智子

洋々

一瑤

圭一郎

義徳

清信

美恵子

金祥

雅女

無限

節子

昌鼓

稔

春名

啓治

菖子

清帆

善夫

バワフルな嫁は我が家の革命家

波風を立てたくなくて匙かげん

バワフルな走法金メダルがふたつ

修正液ねしくり過ぎてバレました

議員さんへうそ発見機持たせたい

マグロ巻く網にエンジンバワフルだ

バワフルな一振り見事逆転打

情状へ甘い気もする匙かげん

袖の下次第で決まる匙かげん

バワフルに働き負債すぐ返す

横取りをされてハートが疼いてる

他人の巣を横取りしては玉子生む

バワフルの一杯つまるランドセル

バワフルな五月の苗に夢たくす

親友に横取りされた恋もある

陽の恵み無人駅にもさんさんと

匙かげん塩をきかせて子を育て

哀しみをねしくるようなことしない

川柳くだの会鳥取 岸本 宏章報

母さんがいちばんつらい娘の病

政治家は逃れるルールたんと持ち

距離おいて友と交わり長つづき

都合よく頼る近所の若夫婦

話しつつ歩き短い距離だった

上ばかり見るからつらさ倍になる

近所には距離をおいてのお付合い

(平) 節子

菊香

妻香

振子

孝二

蟹郎

孝男

秋月

一京

由美子

南花

はつ江

沢子

行男

重忠

益子

一粹

紀子

清帆

富貴子

寿賀子

せつ子

邦昭

仁子

師との距離追えば追うほど遠さかる

秀才も辛い上には上がいる

ルールからときにはずれてみたくなる

メル友にあるかなきかに置いた距離

富柳 会大阪 古田 千華報

やっぱりねうなじのあたり恋の彩

成功の秘訣を知っている努力

焼酎がやっぱり美味い肥後もっそ

避けていた人によっぱり会っていた

雑巾で役目を終えたタオルたち

ひと言のヒントで蓋も開きました

煩惱を掃除している写経筆

絶望へ一本下りた神の薬

あの星が君だと思ふよく喋る

もつたない母はやっぱり今日も言う

夜明けまで語る一夜の旅の果て

掃き溜めのゴミの山にもある歴史

原点に戻れば軌跡辿れます

花冷えに娘気遣う薔薇の芯

父に似てやっぱりカエル蛙の子

これも愛えくばりの一つ差し上げる

くつろげる人と流れていく大河

やっぱりと親父がなげくDNA

開けるだけ開けて恨みを聞いてやる

民営化目指したけれど元の鞘

やっぱりね煙が立った二人です

孝子

宏章

大鯨

玲子

千華

田鶴子

正治

七朗

和子

澄子

登子

欣之

寿之

操

千恵

壽峰

未知

駒子

高鷺

安希子

紅紫朗

彦次

伸雄

武人

よりこ

掃除機よすべての鬱を吸うてんか
妥協点少しばかせば円やかに

その事は焼いてしまおう身の芥
生さる海風のドラマをいくつ描く

おくれ毛のきれいな人に騙される
床磨くことしか出来ぬ妻の乱

エヘヘへやっぱり妻にばれてたわ
終らない掃除に過去が溢れ出る

金太郎飴がわたしを弄ぶ
君と逢う約束ヒントからヒント

松露川柳会鳥取

小西 雄々報

胸の内ボートに乗って打ち明ける
青春のボートに思う遠い日日

ボートレースドラマの風は勇壮だ
二人乗りボートで内緒話する

ボートには縁遠くして山育ち
ユーモアで訴えてみる平和論

ユーモアで話上手で楽しいよ
自分史へユーモアすこし付け加え

ユーモアを板の蓋を開けて聞く
川柳塔みちのく青森

小寺 花峯報

娘のためにわら一本を投げてみる
つぎはぎの思い出亡母のれんげ草

約束の紙一枚に縛られる
きよし

信子

奏子

鬼焼

健一

アキ

深雪

よしみ

森子

千華

久子

弘子

鈴枝

静江

正光

約束の悪事見ていたおぼろ月
一歩ずつ生きて今夜もさする足

拝借ができる範囲で生きている
借りた恩今こそ返す介護の手

光るまで貝は黙って引き受ける
約束が途中で切れた赤い糸

手拍子を借りる私の愛唱歌
将来は約束出来ぬ高速炉

植山へ約束できぬ盆の窪
寸借が積り積もって夜逃げする

美しく咲いて拝借されました
柔らかな言葉が徐々に効いてくる

大望を願う養銭そとと投げ
投げられて蹴られて文句言わぬ毬

神様に拝借しているいのちです
しみじみと友の悔やみを聞いてやり

和歌山三幸川柳会 武本 碧報

一口が精一杯の善意です
ため口で行方不明の日本語

過ぎた日の秘密潜ます身八つ口
口紅も食べてしまったバイキング

春ですな財布の口が開いたまま
大切な人へワインの口を切る

口が裂けようとも曲げぬ鶴形
口裂けても話せぬ夢を見て女

呑舟

柳子

則彦

美鈴

芳生

一呑

銀波

ふさゑ

花匠

愁女

井蛙

黙人

花峯

慕情

口許のホクロが語りかけてくる
口論になったその夜は寝つかれず

陰口は花びらに載せ流しましよ
口出しがしたい私の正義感

コーラスに向かぬ上品おちよば口
口喧嘩しても親子だすぐ笑う

お母さんもうゆっくりいいんだよ
足の爪切るうか猫と遊ぼうか

ほんとうの哀しみ喪服脱いでから
古時計ゆっくり刻むケアハウス

年金が基盤盤んでいる笑顔
ゆっくりと笑って過す今日が丸

亀の歩もテープを切れる夢がある
日向はこ猫と童話を読んでいる

ゆっくりと描いて行きたい四コマ目
亀の歩で進めば見える裏表

ゆっくりとパントマイムの喜寿夫婦
ゆっくりと呼吸自分と対峙する

根回しに山もゆっくり動き出す
捨てきれぬもの数えては散るさくら

冤罪へ数える齢重すぎる
金バッジ数え切れない嘘をつき

涙して母とデュエット数え歌
ゼロいくつ数え尻込みする財布

何度も顔洗ったけれど出直せず
洗っても消せない傷を抱いて寝る

夢子

絹子

孝子

美花

東吉

房代

理恵

和子

保州

幹子

紀子

喜久子

登美代

章子

ごうごうと心を洗う滝の音

俣子

竹原川柳会(広島)

吉田

太虚報

家じゅうで力道山を見たテレビ

白狐

3Dテレビで見た宇宙船

淑子

情報はテレビ暮らしの糧にする

栄恵

世界中時事も事件もすぐ茶の間

汎美

ホームラン今日はここにみるテレビ

一路

オリンピック世界はテレビの波に乗る

節生

息子つていい新型テレビ買ってくれ

房子

ねころんだ野原の草はあたたかい

規代

寝ころんだ野原に春の香をもらい

征舟

野原夕焼け妹よ弟よ

蘭幸

雑草の自由野原を闊歩する

敬子

寝ころんで心も緑にする野原

比呂子

焼野原不死鳥のように立ち直る

静風

新緑の三瓶の野原牛の群れ

弘子

故郷と人を愛した父がいた

半徳

愛いつぱい寡黙な父の太い幹

慶子

不器用な愛子である父子家庭

輝恵

雨の日は困る一日父が居る

力

仁王さまだんだん亡父に見えて来る

幸子

ふらり来て亡父は時計のネジを巻く

笑子

雨の日は雨のリズムで墨を磨る

栄香

ぐんぐん山盛り上がる音がする

あゆみ

今日も雨掌の折鶴一羽

厚子

赤ちゃんを脱皮パンツになりました
勝ち信じジェット風船を飛ばす

史子
千枝

尼崎尾浜川柳会(兵庫)

田原

一兆報

根気よくやれと匠の背が語る

かずお

誰のために生きているのか四股を踏む

一兆

山頂の一步一步と積み重ね

純

平凡な口調の陰にある平和

よしひさ

講釈に根気を重ね聞いてやる

野薫

子供より本気で遊ぶおばあちゃん

雪菜

いつだって馬鹿にはなれる利口者

由美子

老ゆる歳ダンスも薬玉の汗

柳明

積年の根気が並ぶさつき展

勝巳

まだ元氣長女の介護する米寿

五月

あじさいも添えてゆくり待つことに

ひとみ

手を添えて栞山盛りの梅を買う

奮水

宝恵駕籠の底が見えてる玉の輿

靖鬼

良妻と賢母は窓の裏表

比ろ志

加齢かな玉葱切つて涙出す

洋子

あべこべにすれば高値の抽象画

彰

ご飯よと呼ばれる趣味を持っている

耕治

幸せの定義はなしに茜雲

和子

ほんにまあ幸せそうに燕舞う

菜々子

ジャンケンポンあしたの風の行方など

ヨシエ

温い嘘と冷たい美辞麗句

哲男

優しさを狸寝入りでテストする

祐康

言い訳が平凡過ぎてバレーている
若い頃ボランティアまでしてたのに

紀乃
江美

たおやかに生きた女の絵の具筆

美義

飛車角の龍馬が射止む玉

哲夫

道順を逆に教えて追いかける

里江

なんとなく一日暮れた箸を置く

美籠

あかつき川柳会(大阪)

山本

柳昌報

奮い立つ心動かすのはこころ

朝子

タレントはん金のバツジは重いぜよ

篤

石ころが春の小川で昼寝する

郁夫

すききらい小川に花弁散つて行く

生枝

工業汚染小川の顔が歪んでる

一步

沖繩の心ジューゴンの泳ぐ海

樹

子を産んで今更知った親こころ

いさお

開発で小川も秘密基地も消え

克己

芹摘んだ小川下水溝と化け

勝久

ゴテ亀辞任連立はそのままで

和雄

嬉しいなあ今日も行こかと誘われる

勝弘

木洩れ日はどの光をあびている余生

希久子

水溜り写る月見てにらめっこ

君代

せせらぎの音にハミングして歩く

見清

ふる里の小川に流す負の記憶

集一

物静かな人ねと嬉しい事言われ

蕉子

優しさへ心をこめてありがとう

シマ子

谷川の蛍が托す村おこし

卓

ふる里の小川は唄を抱いている

太郎

嬉しいねこんな私を覚えてた

武

目の光る男が詠んだ不屈の詩

ダン吉

大好きと三頭身の絵をくれた

哲男

マスコミが煽って支持を上げてやる

鈍甲

首相辞任年中行事になりました

紀雄

小川の奥はやがて浄土かホタル舞う

廣子

墓守りを孫が確約してくれる

房男

上げ潮で選挙やりたい民主党

美世子

癒される心やさしい友がいる

美智子

目立たない彼が歌った反戦歌

美花

故郷の小川に捨ててきた迷い

桃花

幽霊いな本心を早よいいなはれ

野鶴

内戦の真つ只中でキックオフ

柳弘

囀りに心ときめく春の朝

柳昌

翠 洋 会(大阪)

佐々木満作報

反骨の汗を拭って友は逝き

昭

凜として銀河へ向かうハンチング

富子

こだわりの帽子が似合うデスマスク

恭昌

不撓不屈努力の人を送る梅雨

みつ子

川柳をこよなく愛し黄泉の国

弘子

誤字脱字正して黄泉路歩まれる

希久子

尚士さん冥府の句座もIT化

千歩

川柳の真つ只中で旅立たれ

舞夢

惜しまれて緑の黄泉路逝かれけり

久峰

辛口の舌鋒偲ぶ尚士節

集一

たいせつな大きい星を奪われる

照子

エンマ様とやり合つたら尚士さん

理恵

尚士さんあの辛口をもう一度

げんえい

惜しむ声背に受け巨星旅立ちぬ

浩二

あの笑顔余りの早さ嘘のよう

日の出

翠洋句集めくつて偲ぶお人柄

捷也

死出の旅浅い柳友偲むだけ

知之

ハンチング似合う笑顔が偲ばれる

桃花

旅半ば友の死に合う声もなし

蕉子

尚士さんいつもの席に気配あり

紀子

ガンバリと笑顔を残しああ合羣

すみ子

編集長に心残して雲の峰

千梢

博識で心の温い人でした

観子

凜とした淀の葦とて風に折れ

滋彦

尚士の呼名もう聞こえない句会場

れんげ

川柳の神に召されて逝き給う

水昇

花野ゆくともダンディーなハンチング

志華子

諸行無常さのう被ったハンティング

義

一徹な裏に人情併せ持ち

満作

幸福度好きな事なら真つしぐら

善之

岩美川柳会鳥取

石谷美恵子報

喜寿過ぎりや孫のテンポに追いつかぬ

稔

手際よいテンポが支持を押し上げる

圭一郎

長いながい話の中に野垂れ死に

螢

長い影引きずりながら野良帰り

重忠

貝から節海の波長を肌で知る

忠良

長い帯ぐるぐる巻いて瘦せました

蟹郎

長いもの絡む隙間がある心

幸安

一日を長く感じた日の疲れ

節子

長く生きて辛いとぼつりである本音

幸子

長い劇一人の仲間こんなもの

和子

答を求め走りつづけている命

一瑤

水求め迷う霊の八月忌

茶子

中高年若さ求めて翔んでみる

公子

求めても届かぬ声か基地に泣く

菖子

小遣いの仕分けをほやき求められ

清帆

美しい文字だおおかた美人だら

雅女

一生は想像絶する上り坂

孝男

想像の城なら何の罪もない

たぬ

想像も努力次第で叶いそう

幸枝

海底の油田想像越えて噴く

よしえ

ワンテンポ遅れて笑う老母愛し

美恵子

米子住吉川柳会鳥取

渡辺多美子報

雨 雨と待ってた雨がうとましい

多美子

足腰を鍛え明るい夢を追う

すみえ

加茂川のツツジ堪能ありがとう

登美枝

ひとり者テレビに向かい言い返す

正二

忘れ度いこと何時までも忘れない

紀の治

もう乗らぬ飛行機ゆれて後悔し

礼子

神隠しのように蟹は身をかくす
教科書にサクラがサイタ一年生
老いる日になお上を向く桐の花
極太の支柱を樹ててこいのほり

川柳塔まつえ吟社(島根) 三島 浜尻報

泡立ちをほめて抹茶へかしこまり
二十歳の夢泡と飛び散る古希の朝
ひとつずつうわさの泡を消す男
珍客へ泡を食つてる昼寝時
泡風呂へ旅の疲れもふんわりと
この決意泡にはしない最後まで
わだかまりけじめをつけたコップ酒
独り者自由の中でおはれてる
ここまでをけじめと決めてお茶にする
割り算をしたらけじめがつかました
悲しみを薄めるけじめつけている
ゆで卵つるりとけじめ等はない
リハビリが自由くれたと母の笑み
空をとぶしやばん玉にも似て自由
不自由はあつて変化を味わえる
ほどの距離自由別居で仲が良い
自由にはなつたが羽根が生えて来ぬ
もんべ脱ぎ自由を穿いた終戦日
天空へ抜ける真つ青樵の音
ぐるぐると天気も変り気も変る

未延子 公一 ふみ 宏之 町紅 注湖 柳歩 昌枝 ちえこ 長吉 幸代 薫 きみえ 蘭 知恵子 桂子 芳恵 政子 邦代 スズコ 多喜 幸子 禮子 紫見

悪天気予定が立たず空を見る
女房のお天気今日は日本晴れ
晴れ女背なのリュックも弾んでる
組板の音で天気がよくわかる
腹帯を巻いて明日へ夢育て
切腹をしたことがない腹を撫で
腹黒い女に似合う赤いバラ
腹割つて話せる人は頼もしい
腹くくる女に恐いものはない
大声で腹から笑う日もあろう
川柳塔打吹(鳥取) 野口 節子報

英子 茂美 美智子 玲子 たくし 螢 寿代 和歌子 畔 浜丘 和枝 泰輔 悦子 泰山 滋 美美子 玲子 たけ代 小生 孝恵 克枝 いさお 美知江 楨元

開拓魂北満の野に置いてきた
過ちは犯していない置きぐすり
行き場無い海兵隊は地下に置く
折角の命ポストに置いて逃げ
あかつきから奇跡の画像来る日待つ
リュウマチの足で登つた八百段
アフリカで奇跡起こそうサツカー陣
奇跡起きオタマジヤクシが降つて来た
宇宙から電話交信見る奇跡
土石流家つぶれたが皆んな無事
時間切れやけつぱちの句天を取る
いとかわの塵はやぶさが持ち帰る
万能細胞で五万年生きる
妻の恩忘れぬうちに先に逝く
いただいた苦言煮込むと恩になる
お金では買えない恩がたとある
ワクチンを恩ある牛に注射する
検診が恩人ですと言う乳房
米軍基地置くのは何の恩返し
恩返し足の指がそばを向きたがる
川柳さんだ(兵庫) 北野 哲男報

重忠 螢 義人 貴恵 よしえ 公恵 和子 富恵 美代子 久芽代 龍枝 玲坊 石花菜 清 芳光 紀美恵 勝憲 紀の治 照彦 節子 哲男報 章子 忠 ちあき 和子

ふるさどに一本の古木凜として
騙される方にも見えた五分の欲
夏が来てよこんでいる土踏まず
寝入る児の頬つべに残るひと滴
一滴の血が犯人を見付け出す
口蹄疫滴る涙牛の目も
ドナーカードまだ使えます胃と口が
弁当屋気象台より良く当る
年限が如才のなさをプラスする
言い訳を笑って聞いているうさぎ
年収を聞かれて彼女居なくなり
大丈夫あしたの予約くらいなら
いま仏昔は鬼と言われてた
しがらみを乗りこえ泳ぐ鮎のむれ
鳩山さん親指たてて何の意味
地底から無念の中うめき声
予期しない計報に軋む胸の窓
古里は星鈴成りの過疎の村
ため息を宝石店に置いて来る
不良っぽい若者に席譲られる

倉吉川柳会(鳥取)

竹信 照彦報

順子 祐康 歳子 彰 正和 一子 キヨミ 二英 婦美子 ひとみ 宣子 千代子 一泉 一良 雅司 好文 美和子 哲男 晃 淑子

面倒な役目押しつけ蹴ってやる
あの話蹴ったが何故か気にかかる
良い話ころ裏腹蹴ってみる
五十年似たこの夫婦出来上る
この国をそっくりクリーニングする
そっくりで名前が呼べぬ双子ちゃん
新内閣課題そっくり残ってる
寝相までそっくりそのまま親子です
我が娘妻そっくりの小言いう
燕の子みなそっくりの口あける
この辺で地球そっくり洗おうか
そっくりに出来ても造花香らない
孫生まれ息子と嫁のコビーさん
苦笑い鑑定結果偽だった
どなたにも貸せぬわたくしだけの足
七十年歩いた硬い足の裏
まだまだ足の機嫌をとりながら
足繁く飲み屋に通ったつけまわり
故郷の土は忘れぬ足の裏
足しげく通って口説きものにする
指紋から足が付いたまよ帰らない
年金の足が出たまま帰らない
どうですかと雀の群れが来てくれる
好きな人密かに置ける罪かしら
どうですかと似合いですよサイズL
どう似合う妻に聞かれて拷問だ
どうですか生きていいこと有るかしら

泰輔 秋草 喜美子 悠子 石花菜 和枝 けいこ 文恵 玲子 螢 茶子 醉美蓉 貞子 祐子 完司 萩江 康子 英子 美代子 智恵子 日出子 美津恵 よしえ 恭子 瑞子 美栄子 和子

どうですか西瓜の尻を叩く音
どうですか知らずに配る毒茸
沖繩に蹴られて首相やめました
六甲川柳会(兵庫) 伊勢田 毅報
星ひかる不意に初恋思いだす
過半数に少数党の価値が増し
博士さま多くなりすぎ価値下がる
石ころも孫には宝捨てられず
金婚になつて女房価値わかり
のんびりと過ごす時間も価値がある
病むことに祈りの深い日々になる
失敗を深く反省バネとする
君と僕深いところで響き合う
深読みが外れて分るアホらしさ
懐の深さに飲まれ動けない
意味深な一言残し席を立ち
深読みひとよりがりで誤解うむ
大金を掴んだあとの浪費癖
御馳走のあととはやっぱお茶漬で
ピンチでもやはり主役が勝つドラマ
愚図やけどやっぱりあなた好きやねん
だんまりはやはり遣伝か父に似る
風揺らす今日の命が駆けて行く
卓袱口の疵が昭和を生き抜いた
仕事振りとえらい違いの飲みっぷり
手術終る祖母の微笑み金メダル

重忠 由紀子 照彦 毅報 いわゑ 浩司 和子 利子 繁義 能子 美恵子 寿朗 忠貞 弘 登美子 恵子 芳江 光久 夏子 和郎 盛夫 基輔 孝子 武彦 茂 洋一

足蹴され怯まず生きる道の草

勤

後戻り出来ない君と逢ったから

順子

聞き上手有め上手のデーホーム

礼甫

退院日新たな幕が開く気分

千賀子

マドンナが来るのが怖いクラス会

政一

春風に木々が芽吹いて香り立つ

悦子

裸婦像に私勝ったと思う初夏

悦子

人生をエンジョイするメダカの子

美穂

父の日に亡父の癖などふと恋し

美穂

梅雨しとど夫婦の会話杜絶えがち

無限

あなどった漢字にお灸すえられる

無限

夜半の月仰いで願うこと一つ

楓楽

結局は母のわだちを踏んでいた

楓楽

豊中もくせい川柳会大區 藤井 則彦報

門限を破つてからの不整脈

庸佑

嘘にウソ重ね微熱が下がらない

幸雀

父の日は父と一緒に夕ご飯

美智代

白い肌焼いて十代夏おわる

きらり

もうきゆうで冷酒一献暑気払い

宇乃子

疑似針についていっつかいを出しただけ

佳恵

正論を吐いているのに低姿勢

隆

のどごしもひんやりそうめん母の里

都代子

もみじマーク前後左右に貼り安堵

千恵子

梅雨続く古典落語を借りて来る

行兵衛

水中花見放されても咲いている

歌留多

アルバムに心の旅路重ね見る

歌留多

歩数計つけると尻が軽くなる

美津子

斜めから一度自分を見るゆとり

則彦

誘惑をしいたい傘一つ

巴子

6Bにシール残して友が近く

美義

一代で終った町の開業医

千枝子

いつまでも親の代りがいるつもり

求芽

時々重ねてみた妻の手と

玲子

お礼状二度来ましたとお礼状

見清

代理人論吉しだいで気がはいる

郁子

重ね合う夢がふたりの道しるべ

葉子

書留のシールに母の字がにじむ

志津子

歳重ねじよよに重心下げてゆく

堅坊

さあ今だ梅雨の晴れ間の腕まくり

夢

二代目が親の歩いた道を選け

千代

この次は雲に誘惑されるだろ

寿美子

西宮北口川柳会兵庫 小林 わこ報

夏休み大きな靴が脱いである

耕治

古靴に共に歩んだ自負を見る

直

小さな靴に潜んだ夢の無限大

りこ

オリジナル偏平足も満悦

順子

ポロ靴が性に合ってる土踏まず

キヨミ

もう一軒言いつたのたつにわか雨

美津子

片減りの靴に無情を叱咤され

わこ

不意打ちにあつて本音がとび出した

比ろ志

不意に来た竹馬の友の喪の知らせ

祐康

梅雨空や友は不意に亡くなりぬ

佐紀子

哀しみは不意に思いは遅遅として

秋果

風化した話が不意に浮上する

文子

不意打ちの道連れ辞任鳩の意地

盛夫

けろつとして離婚しました子を連れて

美代子

油断すれば吹き矢ひょいと飛んでくる

野鶴

不意打ちの揺れで失くした恋と夢

浩司

不意打ちが特技な姑に鍛えられ

てる

睡眠薬飲むかどうかで眠られず

千代

肝臓がもう止めとけという深夜

茂

寝返りの刑を何度か熱帯夜

毅

ベランダでホテル見つけて今晩は

武臣

ふらふらと夜は魔物のネオン街

基輔

名人に直ぐ成りたがる一夜漬

彰

マンションの廊下しらず歩く夜

歳子

雨音を聴く独り身の長い夜

折杭

アリバイがなめらか過ぎて怪しまれ

二英

なめらかな会話を運ぶ柏餅

章子

お取り寄せの品なめらかに胃を満たす

美籠

今日もまた諦めなれで舟を漕ぐ

玲子

お父上許してたないあの不孝

弘子

お早うのキャッチボールが清清し

光久

判定勝ちでいい僕の生き様は

忠

うれしくて誰かに電話したくなる

美穂

歳時期の草花を知る万歩計

哲男

さわやかに生きた小さな記事がある

富富子

川柳塔ねやがわ(大阪) 籠島 恵子報

太陽がアハハと笑う梅雨晴れ間
宮崎牛飼うのを止めて穴を掘る
梅雨晴れ間一緒に男干してある
飼うつもりなかった戦後蚤虱
火種灰に埋めて誰にもさとせぬ
世話焼きであちこち火種置いてくる
今風の火種つけるは女から
飼育法反省してる三人目
お互いに仏や鬼になる介護
シングルの顔日替わりのコンバクト
内緒だが別の私を飼っている
紙おむついつもさらつとしてあげる
よく吠える飼犬うちのセキユリティ
女房に飼い慣らされてハイハイハイ
戸籍には火種未だに残ってる
挿し芽して咲いた花ほど愛おしい
ケータイの中に忘れていた火種
沖繩を梅雨前線動かない
雑巾が乾き切ってる妻の死後
浮き雲に気持ちのをのせてひとり旅
貧乏神に飼われて年期まだ開けぬ
梅雨じめりする赤ちゃんの泣き声も
生きているあかし火種が疼き出す
あの口はダイナマイトの導火線
知ったか振りするから辻褄が合わぬ

柳弘 栄二 西 一風 とし子 祥昭 敬 弘風 郁夫 弘一 薫 銀杏 寿子 尚世 さち子 鈍甲 ルイ子

いさかいのいつも火種になる女
言い勝って気分分の重い梅雨の空
梅雨入りを喜ぶほどの負け続き
何にでもまだ着火する可能性
一人居になって分かった夫の愛
宇宙へのロマン夢みる竹トンボ
雨が好きでんでん虫もわたくしも

岸和田川柳会(大阪) 仲谷 弘子報

そんな時どやしてくる友がいる
五合が適量だった友が逝く
本当の友はお酌をしてくれぬ
手伝ったママの字残る夏の友
妻は留守ビール枝豆あればグー
病んだ時友の情けが身にしみる
沖繩を除く友愛だったんだ
仲人は素性はかりを強調し
隠すほど見せるほどでもない素性
氏素性知らぬ存ぜぬ大都会
素性より先ず人物に太鼓判
婚活で素性知るのはずっと後
代々が庶民の素姓日々気楽
孫七人子供手当の無く育ち
家業継ぐ息子育てた父の背な
教師の娘天職ですとよるこんで
全員をやる気にさせるのが社長
未知数へ母は無償の愛をすく

忠央 亜成 秀雄 賢子 美江 壽男 恵子 弘子報 すみえ 俊昭 香代 和美 房枝 ダン吉 茂 龍子 淳風 柳風 笑司 蛙城 弘子 隆昭 浅子 東吉 仁緑

ちらちらと目立つ白髪に墨をぬり
弁解にちらちら本音漏れて出る
ちらちらと漁火ゆれる白子漁
ちらちらと邪魔な舞台の紙吹雪
損得をトータルしたら真つ赤つ赤
トータルで家が建つほど飲んだ酒
結局はさほどでもない金名督
トータルで見れば日本はバラダイス
運不運トータルすれば大差なし
人生をトータルすればまだ未完
わああゆ川柳会鳥根 松本はるみ報
地の果てに散った生命という石碑
一枚の紙と生命を引きかえに
私から木の葉の舟で去った人
予告なく別れを想う雨の彩
一人言やっぱり野党が楽だった
ストレスとうまくつき合う世が広い
二次会は人がさそったという事に
身につけた野党のかつらだをこね
老醜へすっきりしない戦陣訓

川柳塔さかい(大阪) 河内 月子報

捕鯨反対それじゃあ牛はどうなんだ
金婚に気障なアロハがよく似合う
標準語気取ってばれる河内弁
それではと力んだ傘が開かない

植代 玄也 つかさ 昭 洋 清 義泰 泰弘 ゆい 珠子 かつ子 はるみ 好栄 恵美子 聖子 伸子 ちよえ 博利 清泉 和夫 唯教 像山 俣子

えんぴつは自由にものを言つて消え核のボタンにゴキブリが触れているアイラブユー気障な言葉で別れよう悪知恵は仲々元氣にびないそれじゃ君つて見てよと猫に鈴転んだら気障なお人に助けられそれじゃあと振り返らない息子達ロボットが人を亡ぼす時が来る世の中は始末儉約大事がりそれじゃあと片手を上げて離婚劇水虫が僕の死ぬまで亡びないよそれのシャツを美学に伊達気取る四番を信頼できず代打出す千号記念それじゃ開会いたしますそれじゃあね尾灯見送る過疎の駅羅漢さまいずれは丸い石になる気障な服氣にするほど人を見ずそれじゃ血も涙もないと言われそう日本語が造語略語で亡びそう亡んでる細胞隠し若づくり良い子だと叱つたあととだきしめる横向いて知らんぷりして妥協せずよしなはれ知らんお人に抱きつくの生返事それじゃ何かい不足かいノラになる準備は出来たサヨウナラしばらくは静かなドンで策を練るよめはんの幸せそうな団子鼻

篤子 惠勇 さくら 日の出 八千代 舞夢 半銭 玄也 公誠 ゆきの 時雄 五月 としお 妻子 のん子 千代 誠一 雅明 梓 山彦 冬虹 かりん 敏治 世紀子 明子 清晋 愿

邪魔せねばクジラ亡ぶと食べぬ国腹いっぱい食べてそれじゃと寝てしまひ良く言えば幸せ実は情性です言葉尻気障な言い方浮いている川柳塔すみよし大阪 岩崎 公誠報 目的地どうあれゆるり参りましょ隣席でゲームする子が乗り過ごしジャンケンで決める夕餉の洗い物結婚もゲームと同じ運まかせ先読めず貴方任せのゲームです手拍子でゲームみたいな一気呑みこの頃の子供ゲームで日が暮れるあの歳で他人もうらやむラブゲーム月並みな男とゲームセットまでいつからか無沙汰ですのラブゲームローンさえマネーゲームにかえた国起訴不起訴シーソーゲームみなみてるゲームセット疲れはてるおじちゃん追風になつてゲームがやめられぬゲームセット告げる神には逆えず犯罪もゲーム感覚とは怖いゲームオーバー生き過ぎんよに頑張ろう男とやゲームに勝つて火傷するテレビゲームだんだん意地になつてくる時々一人ゲームも面白いわざとババ抜いて子供に花持たす

健吾 月子 童之介 雅子 温子 妙子 かりん 日の出 りつえ 遠野 のん子 朝子 裕之 美世子 ヒロ 桃花 悦子 庸佑 チエコ 岳人 まつお 篤子 克博

ワンサイドゲームで罰の皿洗いゲーム機に百円と孫奪われるスッピンは見せないゲームセットまで下半に懲りずとうとう丸はだか好ゲーム負けたら何の意味もない鷹狩りに女狩りする御殿様遣伝子のゲーム終わりにしませんか空白を埋めるゲームが発火する罰ゲーム青汁いっぱい飲まされるゲームでないこの世しつかり生きている延長のゲームテレビは時間切れ

いずも川柳会島根

佐藤

治代報

末吉 蕉子 瑠美子 美代子 昌紀 舞夢 哲矢 柳弘 芳香 半銭 公誠 ラーメンのスープは最後までするポケットに仕舞つておけぬい話隠し芸うきうき人を驚かせシンブルなスリーブの中で暮れて行く久々の親スリーブで温つためるうきうきとフレームずらし散歩する来るこない来るに掛けてる待ち呆けうきうきもそそわもなし独居爺バランスがスリーブの中で泳いでるうきうきとスキップ踏んで逢いに行く言い訳はよそうスリーブがさめてきたあの日からスリーブはずっと冷えたままそつとしておこ明日はきつと来る騙されたつもりで来いと誘われる 美千代 靖子 敬子 志ける 佳子 煩悩児 治代 英子 德子 嘉寿恵 桂子 武久

匙一つスープの味を皿に聞く

滑らかなスープを注ぎモーニング

鼻歌が忘れた過去を連れて来る

気を付けていてもスープが音を出す

友誘う本当の事は言えぬまま

スープ冷めまだ用件が言い出せず

スープには私の入る余地がない

知らぬ間に眉間の滝も深くなる

昇格も束の間ネコの鈴になり

うさぎが旅に出た切り戻らない

忘れずに今年も来ると言う螢

辿りつく邪念を払う滝の音

スープ皿わたしひとりになりました

縋けば滝のしぶきのある日記

その時が来れば私も立ち上がる

うっかりと飲んだスープで火傷した

うさぎがソプラノになる電話口

とりあえずビールスープじゃ物足りぬ

滝壺は神祕で私もぐれない

誘い水蛭も甘い手にのらぬ

提げて来る酒も泣いたり笑ったり

川柳大阪

長井

善純報

平均の暮らしが夢という日本
子だくさん愛平均にそそぎこみ
バランスは運動からと腰痛め
スタイルも顔も平均早よりろて

妙

幸子

弘子

裕

美江子

孝亮

喜子

久枝

左余

昌枝

歌子

まこと

多喜

寿美

茂美

ちえ

玲子

文子

蘭水

きみえ

ちかし

美花
すがお
ゆめこ
五月

平均に女性みんなを愛してる
人間の欲平均で納まらず

平均の体重忘れた喰いつぶり

人並みに君を守って今日は春

平均に飛鳥美人はポツチャリで

平均がむつかしいです御香典

平均値上げればいいな世の暮らし

平均と言うけど君は太ってる

普天間の五月決着首賭ける

3Dのスリルにかけける映画界

ぞっとする映画血圧まで上がる

発表の待つ間のスリル胸さわぐ

ちよい悪のスリルな恋をしてみたい

小沢さん心ひやひやしてるでしょ

急流を筏で下る櫂さばき

ハラハラとドキドキならばドキをとる

子育てはスリルスリルで気がぬけず

生と死の狭間で行き来するスリル

一手勝ち読み切る中にあるスリル

悔しくて男涙を拭くこぼし

尽くしても報われません派遣です

プロポーズ思わず涙傾つたう

仁義なく涙も見せぬ離党組

哀愁の涙あふれてくる夕日

母の日の嬉し涙は忘れない

悲しみの涙の訳を知る枕

泣き顔を笑顔にかえる鯉のぼり

花笑

いつふみ

司

信醉

彦太

かよこ

まつお

功

川童

喜楽

鉄心

照月

東吉

美世子

義明

勝弘

和

柳弘

一步

一風

紀雄

珠生

章久

朝子

芳香

ひまわり
善純

残暑お見舞申し上げます

川柳クラブ

わたの花

生嶋	ますみ	赤木	妙子
吉村	一風	西川	義明
山本	宏至	寺川	はじむ
八倉	知佐子	田邊	浩三
乾	美代子	松浦	愛子
篠原	いつふみ	小西	博子
井尻	民子	上田	和子
馬場	宏	土谷	耀一
杉本	晴美	葭矢	正春
脇	俊子	今川	孝子
本田	たえ子		

第34回 全日本川柳2010年鳥取大会

表記大会は6月13日、とりぎん文化会館梨花ホールで開催、事前投句二〇〇名、ジュニア四八六一名、当日出席五八〇名の中から選考され受賞句が決定した。

〈一般の部〉

文部科学大臣賞

木簡のここにも税の文字がある

東京 河合 成 近

参議院議長賞

平均台今日を渡っているような

滋賀 今井 和 子

川柳大賞

トリックに乾杯笑い合えるなら

熊本 阪本 ちえこ

大会賞

だんだんと漢字になって薔薇は咲く

秋田 伊藤 厳

ゆつくりと渡りましょうかい天気

滋賀 笠川 嘉一

からくりを問うとはたるは光らない

秋田 大石 一 粹

沢ガニも君もそーつと捕まえる

静岡 加藤 鯉

湯加減がびったりこの人に決める

愛媛 田辺 進 水

感覚のずれ日本語が通じない

大阪 吉道 あかね

炎昼に駱駝の息をいとおしむ

福岡 小崎 国雄

撰氏四十わたしが溶けてゆく温度

鳥取 斉尾 くにこ

マジックが終り搜索願ひ出す

東京 船岡 五郎

悠久の風とひとつになる駱駝

愛媛 田辺 進 水

つばめ来る明日は僕の誕生日

千葉 日下部 敦 世

〈ジュニアの部〉

鳥取県知事賞

さかあがりおなかのあざがくんしようだ

山口(小2) 田村 真子

鳥取県教育長賞

あらわれよ日本を救う妖怪よ

大阪(中3) 山本 倭子

鳥取市教育長賞

飢えた子に分けてあげたいこのお菓子

神奈川(中1) 滝口 萌 恵

全日本川柳協会会長賞

鬼太郎もこうさんするぞうちの母

広島(小4) 鈴木 恵 佑

医者になりみんなの笑顔守りたい

広島(小4) 河村 絢 汐

じきゅう走心の中もあせをかく

広島(小5) 伊藤 瑞 穂

教育新聞社賞

組体そうあせとなみだのピラミッド

広島(小5) 山田 果 歩

レシビなし母の料理に舌づつみ

愛媛(小6) 鈴木 藍 花

ぬりかべにキーパーたのむ全勝だ

広島(小5) 住田 美 果

第24回 堺市民芸術祭川柳大会

とき 平成22年9月12日(日) 12時30分開場

ところ 堺市立梅文化会館3階 第一講座室

堺市南区桃山台2丁2番1号

TEL 072-296-0015

(東北高速鉄道・とが美木多駅3分)

おはなし 「川柳散策」 長江 時子

— 川柳楽しんでますか —

宿題 「派 手」 山岡富美子 選

「吠える」 板野 美子 選

「シヨック」 荻野 浩子 選

「固まる」 志田 千代 選

「時 間」 墨 作二郎 選

「たつぷり」 田中 新一 選

「野 心」 和氣 慶一 選

席題 なし 各題2句 出句締切13時30分

参加料 1,000円(作品集、参加記念品呈)

連絡先

〒593 8305 堺市西区堀上緑町2丁16-3

河内 天笑方 堺川柳協会宛

主催 堺市文化団体連絡協議会

後援 堺市・堺市文化振興財団

「美と川柳Ⅶ」観月の夕べ

本年も、お月さまをめながら、川柳を楽しむ句会を下記の通り企画いたしました。

ぜひご来遊下さいませ。ご案内申し上げます。

とき 平成22年9月22日(木)

ところ 兵庫県立美術館 TEL 078-262-0901

(阪神岩屋駅下車南約400m)

受付開始 13時30分 美術館1階・レクチャールーム

句会締切 15時30分(レクチャールームの句集箱に投句下さい)

月見の宴 17時30分(美術館の方のお話もあります)

宿題 「月」 前川 淳 選

「鬼」 松本 初太郎 選

「境」 西出 楓楽 選

「化ける」 黒嶋 海童 選

賞 ※席題なし・各題2句・欠席投句拝辞

各題・初音賞・ラビエールミューゼ賞

兵庫県立美術館賞・兵庫県川柳協会賞

1,500円(注・美術館のご好意で

団体割引とシルバード引を適用させて

頂きますので申し込み時に、生年月日

をお知らせ下さい。ご協力をお願い

いたします。

申し込みは会費を添えて左記まで(予め参加予

約をお願いいたします。定員70名・

先着順・定員になり次第締め切り)

◎横山美代子 〒654 0142 神戸市須磨区友が丘

7-58-51 TEL 078-792-0903

◎長島 敏子 〒654 0151 神戸市須磨区北落合

4-28-12 TEL 078-793-3641

主催 兵庫県川柳協会

協力 兵庫県立美術館 ラビエールミューゼ

(館内のレストラン・2F)

兵庫県川柳祭 in 多可町

日時 平成22年12月12日(日)

午前10時30分〜午後4時30分

場所 多可町文化会館「ベルデイホール」

多可町多可町中區中村町135番地

(JR加古川線西脇市駅下車・会場

まで送迎あり) 昼食は各自でお済ま

下さい。

開場 午前10時30分

開会 12時15分

事前投句の部(一般の部)

「米」 山口 光久 他2名 選

「敬う」 大森 一甲 他2名 選

「舞台」 内橋 実三郎 他2名 選

※各題1句、未発表作品に限る。重複投句不可

応募料 1,000円(郵便定額小為替を句

稿を同封して下さい)

応募方法 所定の事前投句応募用紙(コピー

使用可)に作品を記入し、郵便番号・住所・

氏名(ふりがな)・性別・電話番号・大会

への出欠を楷書で明記して下さい。

応募締切 平成22年9月6日(月)当日消印有効

応募先 〒677 0121 多可町多可町八千代区中野

間650 多可町八千代公民館内

兵庫県川柳祭多可町実行委員会宛

兵庫県川柳協会

兵庫県川柳協会

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
岬川柳会	15日(日) 午後1時半締切 無事・他人・のぞく	淡輪17区集会所 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
豊中 もくせい 川柳会	16日(月)午後1時40分締切 継ぐ・様子・クール・自由吟	豊中市中央公民館 阪急曾根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
川柳 さんだ	17日(火) 午後1時から 夕立・幅・歪む・あやまち 自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
川柳塔 みちのく	21日(土) 午後5時締切 供養・地獄・すっきり	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
岸和田 川柳会	21日(土) 午後2時締切 寸法・染める・手軽・トラブル	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
はびきの 市川柳 民会	22日(日) 午後2時締切 花火・握る・シーズン・焦る	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうもん 吟社	22日(日) 午後1時より 役人・リスク・前倒し	鳥取駅2F シャミネホール 〒680-0872 鳥取市宮長205-45 萩原美雪
南大阪 川柳会	23日(月) 午後6時から どンドン・アナログ・夜店 雑詠	住まい情報センター (大阪くらしの今昔館・5F) 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
松露 川柳会	23日(月) 午後8時締切 西瓜・フィルム・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
川柳クラブ わたの花	27日(金) 午前9時半から ローン・声・運・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0834 八尾市萱振町1-16-1-501 田邊浩三
川柳塔 すみよし	28日(土) 午後2時半締切 約束・動く・ばらばら	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉3-16-8-206 鶴田遠野
和歌山 三川柳 幸会	28日(土) 午後1時から 安心・神経・魚	和歌山商工会議所4階 第2会議室 〒640-8111 和歌山市新通7-17 古久保和子
八尾市民 川柳会	第57回 八尾市民川柳大会 29日(日) 午後1時締切 子・化・愛・輪・香・時・里	八尾文化会館5F レセプションホール 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
京都 塔の会	30日(月) 午後1時開場 〇〇加減・訴える・沈黙	ハートピア京都 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

8 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 さ か い	第28回 夜市川柳大会 7月31日(土) 午前10時半開場 (詳細は本誌7月号73頁)	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
川 柳 塔 な ら	4日(水) 午後1時開場 貰う・毬・曖昧	奈良市立中部公民館4F 近鉄奈良駅④番出口 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
城 北 川 柳 会	7日(土) 午後1時開場 支える・点・グループ・自由吟	旭区老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富 柳 会	7日(土) 午後1時から 帰・フルーツ・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴4-1-10 TEL.0721-25-0603 池 森子
倉 吉 川 柳 会	7日(土) 午後2時締切 袖・本物・下さい	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 ま つ え	7日(土) 午後2時締切 野菜・正面・帰る・ふらふら	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町1388 安達幸子
川 柳 塔 わかやま 吟 社	8日(日) 午後1時開会 溜める・寺・くねくね だ・です(断定の助動詞)	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒640-8482 和歌山市六十谷1188-14 川上大輪
西宮北口 川 柳 会	9日(月) 午後1時開場 胸・数える・たまたま・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	10日(火) 午後2時締切 鈍い・本気・別々・自由吟	尼崎女性センター トレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほたる 川 柳 同 好 会	10日(火) 午後1時半締切 職・寄る・ひたすら	豊中市立蛸池公民館 阪急・モノレール 蛸池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
あかつき 川 柳 会	13日(金) 午後2時締切 風船・朝・笑う・時事吟	ねむかホール (新谷町第2ビル3階) 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口から南へ2分 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
川柳大阪	14日(土) 午後2時締切 消す・技・夢中	長堀鶴見緑地線京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川 柳 塔 打 吹	14日(土) 午後1時から 禅・割れる・奪う	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
川 柳 ねやがわ	15日(日) 午後2時締切 夕焼け・シルエット・笑う 自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川 柳 藤 井 寺	15日(日) 午後2時締切 ケア・能書き	藤井寺市立生涯学習センター・シユラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子

柳界展望

○谷口義さん(理事・大阪市)は第7回大野風柳賞優秀賞を受賞した。
姉さんが怒っているのは寒いから 他2句

○新家完司さん(理事・鳥取県)は第6回展覧賞準賞を受賞した。
自己破産した人に注ぐ春の酒 他9句

○高瀬霜石さん(理事・青森県)は第6回展覧賞佳作を受賞した。
善人が集うとつまらない話 他9句

○第8回オホーツク全国誌上川柳大会には260名の応募者があり本社同人の成績は次の通り。
特選 木本朱夏
そして最後に残った種を撒いている
過疎進む町にいのちと残る医師 水野黒兎

○(社)全日本川柳協会は80歳以上の功労者を顕彰。川柳塔社参予の高田美代子さん(藤井寺市)他4名が選ばれた。

○第3回21年度個人句集から選ばれる川柳文学賞は「逢いに行く」河村啓子さん(京都府)に決定。6月12日の日川協鳥取大会前夜祭で表彰。

○鈴木公弘さん(理事・鳥取市)は6月11日付日本海新聞で「文学性のある川柳を、自分らしさを志して」と題して掲載された。

▽芳志△
○宮崎シマ子さん(参予・八尾市)から夫君弘直氏の供養として切手を拝受しました。

▽計報▲
●穴吹尚士さん(常任理事・吹田市)は6月13日午前零時10分逝去。享年74歳。本社より西出楓楽理事長、村上玄也副理事長他、多数の同人がお別れの会に参列した。(追悼文は91頁)

▽お詫びして訂正△

○「七月号」P14上段23行目、可愛いババを→ババを。P48中段6行目、選られるです→選られるのです。P52上段2行目、團菊際→祭。P72下段16行目、伊津市→志。P130中段、詳細は111頁↓113頁。

▽新誌友紹介△

大阪市 山下 玲子

紹介者 奥田みつ子

堺市 太田 由子

紹介者 奥田みつ子

大阪市 浅井 公平

紹介者 奥田みつ子

大阪市 岡田 元一

紹介者 奥田みつ子

篠山市 北澤 穠民

紹介者 遠山 可住

○一〇〇〇号大会準備のため部長会議が6月19日(土)本社事務所で開かれた。出席9名。

常任理事会7月7日(木)出席17名。①一〇〇〇号記念大会関連②新理事・常任理事の推薦③高野山合祀祭の日程④定例確認事項⑤各部報告事項

次回8月5日(木)13時半。

新同人紹介

山^{やま}本^{もと}加^かお^おり^り
—天笑・楓楽・瑠美子・耕治推薦

第20回「太平記の里」全国川柳大会

第二部(郵送参加の部)

課題「夢」

選者 岡崎 守、大野 風柳、津田 暹

河内 天笑、磯野いさむ、本田 智彦

平山 繁夫、平田 朝子

参加賞 一、〇〇〇円(発表誌共)

応募方法 二句詠とし表現方法自由。新作に限る。

投句用紙(指定用紙又は便箋)に住所・氏名を記入し、参加費(郵便為替・現金書留)を添えて郵送にてお申込ください。

締切 九月三〇日(木)当日消印有効

応募先 〒373-0844 群馬県太田市下田島町

TEL・FAX (〇二七六) 三一〇八八七

主催 太田市、太田市川柳協会

TEL・FAX (〇二七六) 三一〇八八七

主催 太田市、太田市川柳協会

「番傘100巻記念・誌上川柳大会」

ご 案 内

題と選者

「意外」 大塚こうすけ 選(神奈川)

「白」 奈倉 楽甫 選(愛知)

「嵐」 山田 圭都 選(石川)

「結ぶ」 田中 新一 選(大阪)

「余韻」 福本しのお 選(徳島)

「笑顔」 定本イツ子 選(広島)

「期待」 伊豆丸竹仙 選(福岡)

投句 各題未発表の一句と私の自信作一句(既発表の句でも可) 投句参加用紙をご使用下さい(コピー可)

締切 平成22年9月30日(木)(当日消印有効)

参加費 1,000円(定額小為替同封)

発表 番傘誌平成23年2月号で入選作と私の自信作を発表します。

参加方法 投句参加用紙に記入し投句料と共に送ります。※封筒に必ず「誌上大会応募」と朱書きして下さい。

送り先 〒530 0047 大阪市北区西天満5丁目6-26-605

TEL 06-6361-2455 FAX 06-6361-2456

「番傘川柳本社・誌上大会応募」係

第32回 井笠川柳会誌上大会

薬 ひこばえ

課題と選者

「あの頃」 河内 月子(大阪府) 三宅能婦子(岡山県) 野村 賢悟(広島県)

以上3選者による共選

「惜しいおし」 梶原サナエ(兵庫県) 長島 敏子(兵庫県) 安原 博(岡山県)

以上3選者による共選

応募要領 便箋又は所定の用紙に各題2句(計4句)を列記し、郵便番号・住所・氏名・柳名・電話番号・所属柳社名を明記して応募料と共に送付下さい。

応募料 1000円(定額小為替又は現金書留)

締切 平成22年8月31日(金) 消印有効

投稿先 〒714 0081 岡山県笠岡市笠岡2289 電話・FAX 0865-626200

賞品 各課題共、天位獲得者のうちから総合成績等を勘案して各課題毎に1名の句碑贈呈者を決定します。

その他の三才(天・地・人)入選句に賞品を進呈します。2課題とも年間賞の対象とします。

主催 井笠川柳会(日川協加盟)

2010 尼崎川柳大会

月 日 平成22年8月22日(日)

場所 兵庫県立青少年創造劇場(ピッコロシアター) 中ホール

開場 午後1時

締め切り 午後2時

会費 1,000円

兼題

「瘦せる」 岡田 篤選

「あんな」 片岡 加代選

「悩む」 吉川 卓選

「なっとく」 山岡 富美子選

「握る」 黒嶋 海童選

「底」 長浜 美龍選

連絡先 尼崎川柳協会事務局

山田 耕治

06-6491-1612

災害お見舞い

この度の豪雨災害により被災された方へお見舞いを申し上げますと共に、一日も早い復旧をお祈り申し上げます。

川柳塔社

二賞選考規定 (要約)

川柳塔社各賞選考規定

① 路郎賞 川柳塔欄の入選句から5句

川柳塔賞 水煙抄欄の入選句から5句

昨年9月号から今年8月号までの一年間の入選句の中から自選し、8月号に刷込みの応募用紙を使用の上、8月10日必着で本社宛郵送する。

② 第一次選は主幹・理事長・副主幹・副理事長・編集長・選考委員で行い、各賞20編ずつ選出し、第二次選者へ郵送する。

③ 第二次選者は折り返し、路郎賞、川柳塔賞の各選考結果を本社宛通知する。選考には順位をつけ、第一席(五点)、第二席(四点)、第三席(三点)、第四席(二点)、第五席(一点)の五編の番号を予め本社で用意したハガキに記入のこと。

④ 第二次選者

本社関係 主幹・理事長

地方関係 主幹・理事 主幹・理長

北海道・東北 関東 北陸 (2)

【京都・奈良(1)】【大阪(6)】【兵庫(3)】

【和歌山(2)】【鳥取(4)】【島根(3)】

【岡山・広島・山口(2)】【四国・九州(2)】

計25名

地方関係の選者は、適宜交代制をとり、均衡をはかることにする。

⑤ 川柳塔欄・水煙抄欄に六ヵ月以上出句した人に応募資格を認める。

① 川柳塔社には、路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬抄賞・一路賞・各地柳壇賞の六賞があり、毎年十月に表彰する。

② 自選集の作者は、すべての賞の対象としない。

③ 各賞とも、原則として同一人に同一賞を授賞しない。

④ 路郎賞・川柳塔賞については、準優秀作の場合、上位は差し支えないが、同位または下位には授賞しない。

⑤ 路郎賞・川柳塔賞の選者は、その任期中は路郎賞の対象としない。また、愛染帖・檸檬抄欄の選者も、路郎賞の対象としない。

⑥ 路郎賞・川柳塔賞の選考要領については、別途に定める。

⑦ 愛染帖賞は選者が決定し、主幹の承認を得るものとする。

⑧ 檸檬賞は二名の選者がそれぞれ五句ずつ選出した十句中から主幹が決定するものとする。

⑨ 一路賞・各地柳壇賞は、常任理事会の委嘱を受けた選者が受賞句を決定し、主幹の承認を得るものとする。

(備考)

この規定は、現行の選考規定を一部改定したもので、常任理事会で承認の上、平成十八年度から実施するものとする。

平成二十二年度二賞選考委員

第一次選者（七名）

河内 天笑・西出 楓楽・川上 大輪・小島 蘭幸
河内 月子・村上 玄也・木本 朱夏

第二次選者（二十七名）

本社関係（二名）河内 天笑・西出 楓楽

地方関係（二十五名）（一）内は人数 ブロック内五十音順

【北海道・東北 関東 北陸ブロック（2）】

小野 多留・今 愁女

【京都・奈良ブロック（1）】坊農 柳弘

【大阪ブロック（6）】

井伊 東吉・出口 セツ子・藤村 亜成・吉岡 修

米澤 徹子・山本 蛙城

【兵庫ブロック（3）】

奥田 みつ子・黒田 能子・山口 光久

【和歌山ブロック（2）】喜田 准一・武本 碧

【鳥取ブロック（4）】

石谷 美恵子・夏目 一粋・両川 洋々・春木 圭一郎

【島根ブロック（3）】

伊藤 玲子・竹治 かし・松本 文子

【岡山・広島・山口ブロック（2）】

大石 あすなろ・山本 玉恵

【四国・九州（2）】清川 玲子・仁部 四郎

昨年九月から今年八月の間に

誌友から同人になられた方へ

「路郎賞」「川柳塔賞」のいずれか月数の多い方を
選択して応募してください。

ただし、「路郎賞」には川柳塔欄作品から、「川柳
塔賞」には水煙抄欄作品からの応募となりますので、
間違いのないようにお願いします。

平成二十二年度各賞選者

愛染帖賞 新家 完司

檸檬賞 三宅 保州 高田美代子

一路賞 小西 雄々 松原 寿子

各地柳壇賞 太田 昭 政岡未延子

編集後記

★夏雲の 死ねば越ゆべき
峰ならん 薫風

★「川柳雑誌」から「川柳塔」に改題して、新生創刊号が生まれたのは昭和40年10月でした。最初は清水白柳氏・不二田一三氏氏の編集でした。不二田氏は編集人としてプロでありましたから、誌面も整然と充実して読み応えがありました。★薫風先生も編集長を務められたことがあり、田中正坊さんが編集長の時代には奥田みつ子、西出楓葉、山本希久子育て女性編集長が三代続きました。昨春秋、山本編集長の定年により、ひさしふりに男性編集長が誕生。穴吹尚士さんでした。★精力的に編集に携われた穴吹さんが、日川協の大会参加の鳥取で急逝されました。突然の悲報に言葉もなくな、それでも七月号は出さねばならず、悲しみのどん

底に沈むご遺族に尚士さんの手元の原稿などを頂き、本当に辛いことでした。

★女性陣にはない男性的視野で、編集長という重責をこなされた尚士さんの後を暫定的に私が受け持つことになりました。お気付きのことなどご教示頂きたく存じます。至らない点はみなさまのご寛恕をいただきますようお願いします。(朱)

◇神聖な場所と言えば教会や神社などを思い浮かべるが、裁判所や国会も尊くて侵しがいと思っている。

◇裁判は人が人を裁く神聖なものであるが、裁判を傍聴する人はその心構えができていなければならぬ。故に、裁判中は写真撮影が許可されないほか、傍聴者の言行は厳に慎まなくてはならない事になっている。

◇先日の裁判員裁判の出来事である。京都地方裁判所で傍聴者の居眠りに怒った裁判長は「居眠りしたい

ひとこと

川柳に出会うまで

今年の一月で柳歴二十八年に入ったが、それ以前は短歌、俳句に馴染んでいました。特に短歌は三十一文字で自分の想いや考えを十二分に表現できることに魅力を感じていました。

某新聞の全国版短歌欄に目標を定め、若さも手伝って一枚の葉書に2首、家事の合間にひたすらペンを走らせ奮闘すること二年。

ある時「お母さんって根気があるのね」の長女のひと言に「この娘は載るわけもないのによくやる

わ、と言いたいのだろうか」と私は娘の心中を詮索する心の貧しい母親になっていたのです。そんなある日、「どうぞ今日こそ載っていますように」。折る思いで朝刊を開いた時「田中みね」の名前を発見。「やったー」。叫んだ声は裏返っていました。

佐々木幸綱に選ばれた短歌は宿題を我に任せて末の娘はテレビの前で声上げて笑ふ

その後も生方たつあ、木俣修の両選者にも挑戦していましたが、縁あって川柳に手を染めることになったのでした。(田中 みね)

人は出て行つて」と釘をさす場面があった。審理中に傍聴人が頷いたり首を振ったりする態度も戒めなくてはならない。

◇私もたまに裁判を傍聴するが考えられない事である。国会開会中に居眠りしている議員もいるがこちら

も許される事ではない。(光)
▽「私の珠玉の一句」を選ぶのに今までの句をもう一

度見直す作業に何日か費やしました。ある程度整理していた中から、私の心の入っている何十句かを抜き出し、どうにか一句選び投じました。一句だけ選び出す

のは大変で、投句してからのもあの句の方が良かったのではと思ったり。

▽初歩の頃の句の方が素直で良いような気がするのはい何故だろう。上手に作ろう、

抜ける句をと思わなかったからでしょうか。ちよつと反省することしきりです。時々最初は初心に戻り、新鮮な気持ちで作句に臨みたいものです。

▽皆様もそれぞれ素敵な句を投句なさった事と思います。編集部も頑張つて作業しております。楽しみに一、〇〇〇号記念誌をお待ちください。(能)

○印を入れてください。

路郎賞（川柳塔欄・同人）
川柳塔賞（水煙抄欄・誌友）

◎下段に掲載月と掲載頁を記載のこと。
◎裏ページの要項を読んで応募してください。

月	月	月	月	月
頁	頁	頁	頁	頁

地名

姓·雅号

応募要項

① 川柳塔欄・水煙抄欄に六カ月以上、出句した人に応募資格を認める。

② 平成21年9月号から平成22年8月号までの自分の入選句から5句を選ぶ

路郎賞——同人は川柳塔欄から応募

川柳塔賞——誌友は水煙抄欄から応募

③ 5句と掲載月、掲載頁を楷書で書き、8月10日必着のこと

④ P 118・P 119を参照して下さい。

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(10月号)」

地名

都道府県
市町村
姓雅号

きりとらせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「持ち味」 (8月15日締切)

10月号発表

山本希久子 選 — 共選 — 三宅 保州 選

B A

--	--

B A

--	--

地名

市都
県道府
姓雅号

地名

市都
県道府
姓雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



同人・読友の皆様

川柳塔社主幹 河内天笑

川柳への情熱と川柳塔社へのご協力ありがとうございます。かねてご案内の「1,000号記念川柳大会」が目の前のもとなりました。既にご出席を前提に事前投句の準備をされた方、また未だ出席参加を決めて居られない方へここに改めて承知よりお願いを申し上げます。

「川柳塔1,000号記念大会」に出席出来るという幸運に恵まれた私たちです。ここまで幾多の苦難ものり越えて1,000号への名簿を築き上げられた先達言者氏々。きっとこの日を見守って居られるだろう事を思うと感心既に面すません。

生ぬうちに巡り合えるこの幸運をしっかりと貴方の手で掴んで頂きよろこびを分かち合いたく名譽ある出席者のお一人として力をお貸し下さいます素直に底よりお願い申し上げます。

事前投句がまだお済みでない方は添付のハガキをご利用下さい



作品募集

10月号発表（8月15日締切）

初歩教室 「泣く」(3句) 「らくらく」	一路集 (3句) 「余韻」 「ひと休み」	檸檬抄 (2句) 「山本希久子共選」	愛染帖 (3句) 「新宅保州共選」	水煙抄 (8句) 「西出楓楽選」	川柳塔 (8句) 「河内天笑選」
----------------------------	-------------------------------	--------------------------	-------------------------	------------------------	------------------------

11月号
檸檬抄「ことさら」
一路集「飽きる」「支度」
「ひっそり」
初歩教室「ゲスト」

本社8月句会

とき 8月5日(木) 午後5時開場・6時20分締切り
 開場時間、締切時間を変更しています。ご注意ください。
 ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
 天王寺区石ケ辻町19-12 電06-6772-1441
 おはなし「川柳雑誌の皆を訪ねて」
 兼題「居留守」
 席題「昔」
 課題「つもり」
 「微妙」
 「喋る」

会費 1000円 投句料 500円(切手可)

河内天笑選 山口光久選 安土理恵選 山田耕治選 西内朋月選 黒田能子選 川端一步選

本社9月句会

7日(火) 午後5時から
 兼題「手加減」「誰」「サイン」
 「今更」「逆らう」

第29年度 夜市川柳募集

第3回「挑む」鈴木公弘選
 ハガキに3句 8月末日締切
 投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
 河内天笑方 川柳塔さかい

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお問い合わせいたします。

定価 八百円(送料84円)
 半年分 五千円(送料共)
 一年分 九千八百円(同)
 (二〇一〇年平成二十二年)八月一日発行

発行所 川柳塔社
 編集人 河内権治
 印刷所 美研アート
 〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一四一七
 花野ビル201号室
 電話(〇六)六七七九三三九〇番
 振替〇〇九八〇四二九八四七九番

杵つき製法の「すりごま」
オニザキの

つきごま



長い間親しまれてきた
オニザキの「すりごま」は、
この度「つきごま」に名称
を変更いたしました。

オニザキのすりごま
は、元々すり鉢ですった
ゴマではなく、杵と臼を
使った杵つき製法で出来
た「すりごま」です。

今までと変わらぬ、風
味豊かな味わいをご堪能
ください。



株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市水上前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保険取扱 看護2A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
- ・放射線科・ホスピス
- ・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪 (06) **6771-4861**(代)